比叡山宗教サミット３０周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

今こそ平和のために協調を
～分裂と憎悪を乗り越えて～

日本宗教代表者会議

比叡山宗教サミット３０周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

今こそ平和のために協調を
～分裂と憎悪を乗り越えて～

日時：２０１７年８月３日（木）・４日（金）

場所：国立京都国際会館・比叡山延暦寺・将軍塚青龍殿

開会の辞を述べる宍野史生
日本宗教代表者会議事務次長

開会挨拶を述べる杜多道雄日本宗教代表者会議事務総長

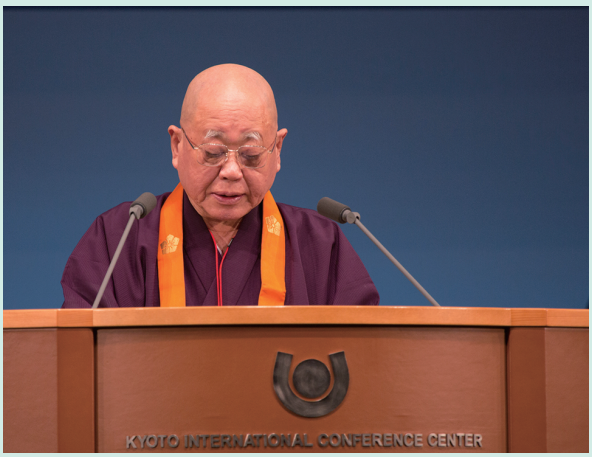
開会式典での海外代表者たち

名誉議長、名誉顧問をはじめとする日本宗教代表者会議の役員

2017
8.3
開会式典

世界宗教者平和の祈りの集い

歓迎挨拶を述べる芳村正徳日本宗教代表者会議議長



来賓祝辞を述べる小峰一允日本宗教代表者会議名誉顧問

満場の京都国際会館

フランシスコ　ローマ教皇メッセージ
「年に一度のこの宗教サミットは、対話と友情の精神を築くことに大きく貢献しています。このような精神が、人類という家族の平和への新たな道を開くために、世界の諸宗教の信者による協力を可能にしているのです。」

ローマ教皇のメッセージを披露するジョン・トン・ホン枢機卿

パン・ワナメティ世界仏教徒連盟（WFB）会長メッセージ
「世界の平和は、まず一人ひとりが自らの中に平和を見出さなければ実現されることはありません。自分の心のなかに平和を生み出し、他の人も平和を見出せるように手助けすることによってのみ、世界に平和が訪れるのです。」

世界仏教徒連盟会長のメッセージを披露するパロップ・タイアリー事務局長

イスラームからのメッセージはムハンマド・ビン・アブドルカリーム・アルイーサー世界イスラーム連盟事務総長

「私たちイスラームの国民は、すべての人々が幸福になることを願っております。イスラームはその名称において語義的にも、そして宗教的にも、その高尚なる根本教義と価値観において、人間の尊厳、人類の平等、善と正義と徳への愛情、弱者への慈悲、公正さの支持、不正と侵害の撲滅、全人類の平和といった教えに立脚しております。」

2017
8.3

アッシジから比叡山へ

東西の祈り30年を振り返って

「アッシジから比叡山へ・東西の祈り 30 年を振り返って」と題して特別講演を行うアルベルト・クワトルッチ聖エジディオ共同体事務局長

「アッシジから比叡山へのメッセージは何であるか。
宗教は平和という課題に対処することができます。長年にわたって、諸宗教対話は、宗教を信じる人とそうでない人が協力していく本物の『共生の文化』をつくりあげてきました。
宗教は、私たちの社会における『共存と平和の学校』であり人々の心と精神を変化させます。心と精神を変化させることによってのみ、私たちは最も抵抗力の強い政治構造さえも変えることができるのです。」

アッシジ

閉会の挨拶を述べる宮本恵司日本宗教代表者会議常任委員

琵琶湖から眺める比叡山

「分裂と憎悪をどうしたら乗り越えられるか」

人類は互いに国籍が違っても人間として基本的な権利において平等であり、人命の価値と尊さに関して共通の態度をとるべきではないかということです。世界には多くの宗教が存在しますが、偉大な宗教はそれぞれの文化の基盤を構成するものである以上、それを重んじることは互いの平和と共存を保証することにつながるといって過言ではありません。

元国際連合事務次長、公益財団法人 国際文化会館理事長
明石 康 氏

2017
8.3
基調講演Ⅰ

「分裂と憎悪をどうしたら乗り越えられるか」について基調講演を行う明石康元国際連合事務次長

「暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか」

2017
8.3

基調講演Ⅱ

世界宗教者平和会議（WCRP）国際事務総長
ウィリアム・ベンドレイ 氏

共通の幸福は寛容を認めると同時に、さらに深い美徳の達成も要求します。宗教は私たちに「連帯」を求めます。それは非常に深い連帯です。ですからあなたの「幸福」は、私の幸福でもあり、同時に私の「幸福」はあなたの幸福でもあるのです。

「暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか」について基調講演を行うウィリアム・ベンドレイ WCRP 国際事務総長

コーディネーターは杉谷義純日本宗教代表者
会議事務局顧問が務めた

テーマ

テロと宗教

―暴力的過激主義に宗教者は
どう立ち向かうか―

2017
8.3
シンポジウム

参加したパネリストたち

白熱した議論に熱心に耳を傾ける参加者

2017
8.3

緊急提言―シリアからの訴え

緊急提案として実現したシリアのファローク・アクビック氏による「シリアからの訴え」

「私は献身的な人々にお願いしたいと思います。価値観を守るために立ち上がり、あらゆる場所のあらゆる人間を、その存在を脅かすような迫りくる危険から守ってください。
私は祈りを捧げます。私たちのこの会合が、善の力を集結させ、その力に活気を与えて目標達成への道を歩ませるための一歩となりますように。」

緊急メッセージを聞く参加者

2017
8.3

鎮魂の祈り

将軍塚・青龍殿

グレゴリオ聖歌

天台声明（しょうみょう）

コーラン朗誦（ろうしょう）

世界宗教者平和の祈りの集い

鎮魂の祈りの意義について語る
植松誠日本宗教代表者会議議長

参加者による黙祷

鎮魂の灯がともされた

分科会１

「核廃絶と原子力問題を考える」

分科会２

「貧困の追放と教育の普及」

2017
8.4
分科会1・2

2017
8.4

世界平和祈りの式典

比叡山延暦寺

総合司会は山田歌日本宗教代表者会議事務局儀典部長が務めた

開会挨拶を行う保積秀胤日本宗教代表者会議議長

祈りと絆

来賓挨拶は深田充啓日本宗教代表者会議名誉顧問

宗教代表者から天台青少年へひまわりの花が渡されオブジェに飾られた

森川宏映日本宗教代表者会議名誉議長
による主催者代表挨拶

天台青少年による平和の鐘の鐘打

「私たちは、地球上のすべて人々が、あらゆる恐怖や差別、貧困から免れるよう、そして世界平和が実現されるように共に手を携えて参りましょう。今回の『平和の祈り』では世界を覆いつつある『排除と孤立』ではなく『相互理解と連帯』こそが人類に平和と繁栄をもたらすものであることを世界に示したいと存じます。」

諸宗教代表者並びに参加者による「平和の祈り」

「平和への努力を誓う固い絆を！」との森川名誉議長のお言葉で平和の交歓が行われた

式典後に交流を深める宗教代表者

閉会挨拶を行う山田匡男
日本宗教代表者会議運営委員長

「比叡山メッセージ 2017」を発表する庭野
日鑛日本宗教代表者会議名誉顧問

2017
8.4

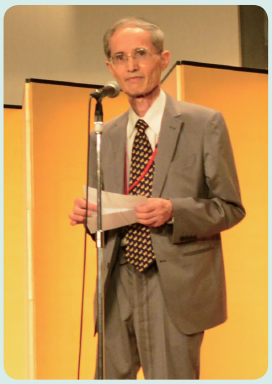
レセプション

――びわ湖大津プリンスホテル

主催者挨拶は田中恆清日本宗教代表者会議議長

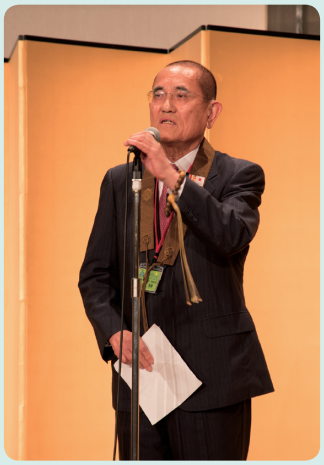
開式の辞は和多善秀日本宗教代表者会議運営副委員長

レセプションの模様



閉会挨拶は徳増公明日本宗教代表者会議常任委員

来賓祝辞は文部科学大臣御代理中岡司文化庁次長



乾杯のご発声は石上智康日本宗教代表者会議議長

比叡山宗教サミット30周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

比叡山宗教サミット30周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

目　次

カラーグラビア……2
発刊にあたって……20
比叡山メッセージ2017……22
開催趣意書……24
平和の祈りによせて……27
　日本宗教代表者会議　各代表者のあいさつ
日程・会場……35
海外からのメッセージ……39
　ローマ教皇　フランシスコ聖下
　世界仏教徒連盟会長　パン・ワナメティ師
　世界イスラーム連盟事務総長　ムハンマド・ビン・アブドルカリーム・アルイーサー師
アッシジから比叡山へ……45
　聖エジディオ共同体事務局長　アルベルト・クワトルッチ氏
基調講演……51
　Ⅰ 明石　康氏「分裂と憎悪をどうしたら乗り越えられるか」
　Ⅱ ウィリアム・ベンドレイ氏「暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか」

シンポジウム……65
テロと宗教――「暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか」
緊急提言……93
シリアからのメッセージ　ファローク・アクビック師
分科会（フォーラム）……95
1　核廃絶と原子力問題を考える
2　貧困の追放と教育の普及
世界平和祈りの式典……153
主催者代表挨拶　日本宗教代表者会議　森川宏映名誉議長
資料……157
◆日本宗教代表者会議経過報告
◆日本宗教代表者会議規約
◆日本宗教代表者会議組織図
◆海外招請者一覧
◆日本宗教代表者会議役員名簿
◆新聞報道
あとがき……186

発刊にあたって

日本宗教代表者会議の主催により、比叡山宗教サミット三十周年記念『世界宗教者平和の祈りの集い』が、神仏のご加護と関係各位の暖かいご理解と絶大なるご尽力により、世界十八ヵ国から宗教指導者二十四名をお迎えして開催できましたこと心より御礼申し上げます。

微力ながら事務総長として重責を担わせていただきましたが、この度の三十周年の集いが多くの成果を収め、盛会裡に終了できましたのも、偏に小串和夫常任委員長、そして山田匡男運営委員長をはじめとする皆様と、事務局の方々の献身的なご奉仕によるものと衷心より感謝申し上げます。

初めての「比叡山宗教サミット『世界宗教者平和の祈りの集い』」が開催され、最大規模の宗教会議として世間の耳目を集めたのは一九八七年のことでした。それから三十年の月日が経過しましたが、その間に平和を祈る地道な努力は、世界各地へと広がり、平和を希求する宗教者の願いは着実に実を結びつつあります。

しかしながら、二十一世紀に入っても武力紛争や深刻かつ大規模な人権侵害は止むことなく、暴力と憎悪の連鎖が続いております。

その主たる原因は、現代世界が国家も個人も、神仏や自然への畏敬の念にかわって経済発展こそを至上の価値としていることにあるように思えてなりません。それが、富の偏在と差別の増長を生み、テロと憎悪を世界中に拡大させています。

加えて現代世界は、地球温暖化、自然破壊、核拡散、飢餓、武力紛争による難民の増加など一日もゆるがせにできない問題を抱えています。地球は危機に瀕しているといっても過言ではありません。

そのような負の連鎖を打破し、世界平和を実現するためには、お互いに対話し相互理解を深め、価値観の多様性を認め、共生の思想を共有することが必要です。共生とは、平和の根本を言い表す言葉として頻繁に使われもするのに、その実現は容易ではありません。

今回のサミットでは、「今こそ平和のために協調を～分裂と憎悪を乗り越えて」をメインテーマに、宗教宗派の異なる宗教者同士が互いの誤解を乗り越えるために話し合い、決意を新たにし協調を誓い合いました。意義深い集会であったと存じます。そして、宗教者の連帯の絆を一層強め、忍耐強い対話と他者を受け容れる努力こそが世界平和と成熟した共生社会の実現につながることを、世界に向けて発信いたしました。

天台宗の宗祖伝教大師は「一身弁じ難く、衆力成し易し」と教えられました。ひとりの力には限界があります。ここにご参集のすべての皆様のお力を結集し、さらには世界の宗教指導者の皆様とも手を携えて、共々に叡智を出し合い、和解と共生を実践し、一日も早く世界に平和が訪れるよう祈りを捧げたいと存じます。

重ねて、今回お世話になりました皆様、そして遠路ご参加下さいました皆様に心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

日本宗教代表者会議事務総長
杜多道雄
（天台宗宗務総長）

比叡山メッセージ２０１７

本年、比叡山宗教サミットは三十周年を迎えた。一九八七年八月、世界の平和を祈るべく、我々は宗教・宗派の垣根を越えてこの地、比叡山に参集した。それは前年十月、諸宗教の指導者が集まったアッシジにおける「世界平和祈願の日」の、あの開かれた精神を継承するものであった。やがて我々と思いを同じくする宗教者によって、世界各地で諸宗教による平和の祈りが捧げられ、宗教間の対話や協働の輪が広がりを見せている。この度の「世界宗教者平和の祈りの集い」に参加した我々は、真摯な祈りを捧げるとともに、世界のすべての人々に心からのメッセージを贈りたいと思う。

今や世界は、排他的傾向が広がり、対立と分裂への動きが深刻化していることを、我々は憂慮する。かつてスマトラ沖大地震や東日本大地震など自然災害が人々を容赦なく襲い、絶望の淵に追いやった。そのとき、国際機関や各国政府の救援はもとより、国内外から多くのボランティアや宗教者が馳せ参じ、支援の手を差し延べたことは記憶に新しい。その国境を越えた人々の献身や連帯の姿に、一筋の光明を見る思いがしたのであった。

ところがその後、ヨーロッパ各地では市民の憩いの場を狙うテロが頻発した。その行動は、政府や公共機関に打撃を与えるばかりでなく、罪のない市民に対するいわれのない攻撃でもあった。それはまた、豊かな消費を謳歌する一部の現代文明への怨念を表すものでもある。一方、中近東などの地域では長期にわたって戦闘や空爆が続き、多くの住民が犠牲になり、また難民生活を余儀なくされている。地球社会には、テロや国家暴力を抑えきれないことへの絶望も広がっている。

我々宗教者はいかなる理由があろうとも、尊いいのちを軽んずる暴力を認めることはできない。格差社会で排除され抑圧されている人々の苦難もまた忘れることはできない。差別や不公正を許さない社会の実現のために、宗教者にもその責任があることを胸に刻み、我々は市民社会と強力な連帯を構築していくことを決意する。

いのちの尊さを考えるとき、環境問題の重要性もまた認識しなければならない。すべてのいのちを育む地球が、人間の欲望の犠牲となることを放置すれば、温暖化がいっそう加速して取り返しのつかない結果となることは自明の理であり、我々は警鐘を鳴らすものである。

人類を滅亡に追いやる核兵器の廃絶は、高齢になった被爆者が存命している今こそ、さらに強く訴えていくべきである。原子力発電所の事故による災害や環境汚染を何度も経験してきた人類社会は、将来世代にきわめて大きな負荷を及ぼす原子力の利用の限界を深く自覚しなければならない。我々は核廃棄物を残す核エネルギーの利用に未来がないことを強く訴える。

いのちの尊さが脅かされている背景には、現代の政治・経済体制の問題があることを認識しなければならない。近年、科学技術と経済機構があいまって人間の欲望を刺激し、そこから利潤を引き出すことのみに追われる傾向が強まっている。たとえば動植物のゲノム改変を推し進めるだけでなく、新たな生命科学を用い人間という種のあり方までも変えてしまう可能性も危惧されている。人類の倫理的自覚が科学技術の発展に追いつかず、特に核開発以後、それは顕著になっていて、人類の福祉のために科学技術を方向づけることがますます困難になってきている。まさに今、世界の諸宗教が培ってきた叡智をもって、倫理的な吟味を踏まえた科学技術の発展を求めるべきときである。

国連は二〇一五年に持続可能な開発目標ＳＤＧｓを満場一致で採択し、次の十五年間に向けてのさまざまな取り組みを始めた。これは、従来のままのありかたでは、地球社会の持続が不可能であるという危機感のもとに、世界を変革するというゆるぎない意志を示すものである。この開発目標は取り組みの過程で「地球上の誰一人として取り残さない」というもので、まさに宗教者の立場と一致しており、これを強く支持したい。

とくにＳＤＧｓでは公平で質の高い教育をめざしている。我々も、教育は人格陶冶の第一歩であり、心に平和の砦を築くために欠くことのできないものと考える。すなわち平和を脅かす倫理観の欠如や正義の歪みを正し、欲望を制御し、愛や慈悲に満ちた豊かな人間性を育むために、教育は宗教的基盤とともに、欠くべからざるものであるからだ。したがってこの課題は、宗教コミュニティーがもっとも協力できる分野であることを表明する。一方、宗教コミュニティーの中に暴力や差別を動機づけ、教育の自由と平等を阻害するグループがあれば、我々は辛抱強く説得する責任をもつものである。

これまで人類が直面する諸問題を解決するために、我々は国連などの国際機関と連帯し、また各種条約による枠組みに沿って対処する努力を行ってきた。ところが最近、先進国の中でも経済構造の変動により、格差問題が深刻化するようになり、国際的連帯より自国中心主義が主張されはじめた。しかし先進国の繁栄は自国の努力のみならず、発展途上国に支えられてきた側面を忘れてはならないだろう。平和を考えるとき一番重要なのは、他者の存在を受け容れ、弱者に対する配慮を欠かさないことである。

三十年前、我々は「宗教者は常に弱者の側に立つことを心がけねばならない」と世界に宣言した。しかしその責務を十分に果たしてきたとはいい難いことを、率直に告白せざるを得ない。そこで改めてここに決意を新たにし、宗教者の連帯の絆をいっそう強め、「忘己利他」の精神で平和のために献身することを誓うものである。

憎悪と排除からは争いしか生まれない。忍耐強い対話と他者の存在を受け容れる努力こそ、平和への近道であることを強く訴える。そして我々の切なる願いが神仏に聞き届けられるように祈り、行動していくことをここに宣言する。

二〇一七年八月四日

「世界宗教者平和の祈りの集い」参加者一同

開催趣意書

多様性を認め共に生きる

一九八七年八月世界の宗教指導者が比叡山上に集い「比叡山宗教サミット・世界宗教者平和の祈りの集い」を開催し、共に世界平和のため真摯な祈りを神仏に捧げました。そして、比叡山メッセージを発信し「宗教者は常に弱者の側に立つことを心がけねばならない」と誓いました。

科学技術の発展は止まるところを知らず、利便性は飛躍的に向上しましたが、一方では生命倫理を脅かすところまで進んでいます。さらに、グローバル化の波は地球の隅々まで及ぼうとしており、人間の飽くことのない欲望は巨大な資本主義社会を生み、しばしば公正な富の分配を拒んでいます。その結果、政治、経済、教育、医療などいろいろな面で差別に苦しんでいる人々が少なくありません。また、同じ先進国内部でも格差が進行しています。このような富の偏在や差別の増長は怒りや憎悪の拡大につながり、テロの温床となり得る状況となっているといえます。

特にシリア内戦をはじめ、近年の中東の不安定な政治情勢の影響は、北アフリカまで及び、大量な難民や避難民を生んでおります。そのうえ、各地に宗教を標榜するテロ集団が組織され、中東地域はもとよりヨーロッパやアジアでも、テロや破壊活動を繰り返しています。

私たち宗教者は、宗教の名による暴力はもとより、暴力は如何なる理由があっても認めることはできません。しかし、これらの過激主義が台頭する背景については決して鈍感であってはならないのです。それゆえ宗教者はそれらの実相に目を背けることなく連帯して問題に取り組む責任があります。

世界平和を目指すには、お互いの価値観の多様性を認め、共に生きることによって良き友人になることが近道であります。そして自分の宗教を大切にすると同様に、他者の宗教に敬意を払うことが重要なのです。

ところが、近年他者に対して排他的な空気が次第に強まり、世界各国でもそれを容認する政治勢力が力を増しつつあります。

けれども、人間が一人で生きられないように、国も一国だけでは文化的にも経済的にも豊かに発展できません。また、宗教も相互の垣根を越えて対話し、共に時代の問題に取り組んでいかなければ、その存在価値が問われるでしょう。

二〇一七年八月は比叡山宗教サミットが開催されて三十周年を迎えます。今、私達の周囲にはかつてない分裂や孤立を誘発する、目に見えない力が働いているような気がしてなりません。その力は世界が直面している貧困、飢餓、差別、人権、核拡散などの問題、さらに平穏に生きる人々を震撼させるテロなどと密接な関係を持っています。

私たち宗教者は、自ら深く問い、足らざるところを神仏に祈り、そして心を開いて相手の立場に立たなくてはなりません。そして、国際機関と協調しながら従来にも増して私たちを取り巻く問題に立ち向かい、平和のために働くことを決意し、ここに比叡山宗教サミット三十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」を開催するものであります。

日本宗教代表者会議

比叡山宗教サミット30周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

平和の祈りによせて

日本宗教代表者会議

名誉議長 森川　宏映 師
名誉顧問 出口　　紅 師
名誉顧問 小峰　一允 師

名誉顧問 高見　三明 師
名誉顧問 北白川　道久 師
名誉顧問 深田　充啓 師
名誉顧問 庭野　日鑛 師

相互理解と連帯

日本宗教代表者会議名誉議長　第二五七世天台座主　森川 宏映

世界の代表的宗教指導者が比叡山と京都国際会館に集い、世界平和実現について話し合い、祈る「比叡山宗教サミット30周年記念『世界宗教者平和の祈りの集い』」が開催されます。

これまで私どもはその開催母体として、日本宗教界の総力を結集して「日本宗教代表者会議」を組織し、初回、10周年、20周年と、その節目の年ごとに集いを開催してまいりました。今回30周年の記念の集い開催は誠に感無量なるものがございます。

さて、通信や交通機関の高速化は、国境を超えヒト・モノ・カネの流動化をもたらしましたが、それは同時に貧富の差を拡大し、環境と固有文化を破壊する原因ともなりました。

そして現在、世界の国々は自国の利益のみを最優先する国家主義的な方向へと急速に変わろうとしています。

日本が置かれている極東地域は、核爆弾の恐怖に深く覆われ、その危機を取り除かんとするため軍事衝突の危機が高まりつつあります。人類の叡智によって戦争が回避されんことを心より切に念じます。

私達は、今回の「平和の祈り」を通じて、天台宗の宗祖伝教大師最澄様の「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」とのみ教えを高く掲げて「排除と孤立」ではなく「相互理解と連帯」こそが世界平和と繁栄をもたらすものであることを世界に示したいと考えております。

今回の平和の祈りにおいて信仰を持つ者どうしの連帯と信頼がより深くなり、固い絆で結ばれ、そのことが人類の未来と平和の実現に繋がることをねがってやみません。

今回の平和の祈りを開催するにあたり、ご協力をいただきましたすべての関係者に深く感謝申し上げます。

人群万類が安心して

日本宗教代表者会議名誉顧問　大本教主　出口　紅

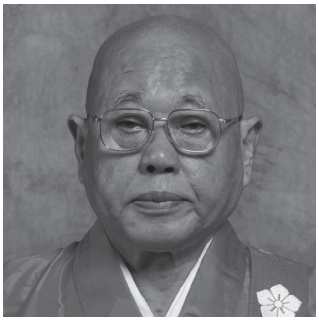
比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が、国内外の宗教代表の皆さまが集い、盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。

振り返りますと、１９８６年ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世聖下の呼びかけにより開催されました「アッシジ世界宗教者平和祈祷集会」の精神を継承すべく、１９８７年、山田恵諦天台座主猊下をはじめ多くの先人方のご努力により、日本宗教史上、画期的な第1回サミットが実現しました。以来30年、比叡山山頂において平和の祈りが続けられましたことは誠に尊く意義深いことでございます。

いま世界は、地球的な環境破壊や気候変動、大規模な自然災害、相次ぐ紛争と報復の連鎖、飢餓や貧困、食糧・資源、核の脅威など、人類の生命を脅かすさまざまな問題が頻発しています。そこには人類の「われよし（利己主義）・つよいもの勝ち（弱肉強食）」の精神が深く根ざしていることを思うとき、私たちは神仏の御声に謙虚に耳を傾け、自らを深く省み、人類が生み出したこれらの諸問題に真摯に立ち向かわなければならないと存じます。

このたびの集いを新たな契機として、神仏のご加護を真剣に祈り、人群万類すべてのものが安心して暮らせる平和な世の中が一日も早く実現いたしますよう、皆さまと共に最善を尽くして参りたいと存じます。

結びに、ご参集の皆さま、また会議運営にご尽力いただいておりますご関係の皆さまの益々のご繁栄、ご多幸、ご健勝を心よりお祈り申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。



尊重し合う社会へ

日本宗教代表者会議名誉顧問　全日本仏教会会長／真言宗智山派管長
小峰 一允

比叡山宗教サミットが開催され30年を迎え、ここに世界宗教者平和の祈りの集いが行なわれますことに心からお祝い申し上げます。

このサミット発願の趣旨は、世界各地における戦争、テロ等の惨状に鑑み、その原因となった貧困・飢餓・差別・人権・核拡散という社会の現状を解消し、人間としての尊厳を確立しようとするものであります。

凡そ宗教は人が安らかなる心を保持し、平和な生活を送るためにありますが、現状はその宗教が互いに争いの原因として使われていることは、まことに悲しいことであります。

釈尊はその成道に於いて、人間の根源を貪・瞋・痴の三毒にあるとし、むさぼりといかりとおろかさの心をやめ、互いに慈しみの心をもって生きよ、と示されています。そのためにはまた人の智恵を働かせよとも申されています。

この心を再確認し、日々の生活の中に争いをやめ自心の欲望を抑え、相手の苦しみを抜き、互いに尊重し合い、平穏なる社会の建設のために努力しなければなりません。

このサミットを一つの契機として平和社会の実現のため大いなる一歩を踏み出すことを期待します。

地球は「皆の我が家」

日本宗教代表者会議名誉顧問　日本カトリック司教協議会会長
カトリック長崎大司教区大司教
髙見 三明

１９８７年以来30年間、毎年８月、天台宗総本山比叡山延暦寺において、比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」を開催してこられた第２５３世山田恵諦様をはじめ歴代の座主ならびに関係者の皆様に深い敬意と感謝の意を表します。

この集いのきっかけは、１９８６年10月27日にアッシジで行われた諸宗教者の代表による世界平和の祈りの集いだと伺っております。この集いを提唱したローマ教皇ヨハネ・パウロ２世は、宗教者が共に平和のために祈ることは、別の次元の平和があり、人間の交渉とは別の「平和を推進する方法」があることを示し、人間の能力を超えた力を伴う関係を表すことになる、と言われました。宗旨宗派は異なっていても、神仏を信じる人たちが一心に平和のために祈りをささげることは大変貴くかつ有意義な行いであると思います。

とは言え、異なる宗教の人々が、共に祈るだけでなく、平和について考え、語り合い、必要な行動に出る姿は、信者や多くの人たちに真剣に平和な社会を築こうと努力することの大切さを訴えるのではないでしょうか。

宗教者は、この地球が〝皆にとっての我が家〟であると認識し、人と人との間、民族と民族との間、国と国との間に人間の尊厳とそれに由来する諸権利についていかなる差別もせず、暴力を起こさず起こさせない姿勢を常に優先させるべきであり、また他のすべての人、特に若い世代にそのような考え方と生き方を示していく使命を与えられているのではないでしょうか。

平和は祈りの広がりから

日本宗教代表者会議名誉顧問　神社本庁統理　北白川 道久

例年、国内外から多くの宗教者が比叡山に集い、世界平和の実現に向けて祈りを捧げられています。本年はその祈りが30周年の節目を迎えるにあたり、世界各国よりさらに多くの方々が参集されますことは、平和という目的を同じくし、共に歩んできた私ども宗教者の友好の証とも言え、ここに心よりお祝いを申し上げます。

いま、世界に目を向けますと、人の命や魂に軽重をつけるかのような出来事が後を絶たず、自らの力では窮地を脱することのできない多くの人々が助けを求めているように見受けられます。そのような中、宗教者である私たちの役割は、神々より受けた命・魂がいかに尊いものであるかを人々に伝え、手と手を取り合うことで知識や知恵を分かち合い、悲哀を過去のものとし、喜びや幸福にあふれた世をつくるという神々の示された道を分け隔てなく広めることで、人類の生成発展に寄与することではないでしょうか。

何が良いことなのか、成すべきことなのかは神々が示される道に明らかであり、我々はその示された道によって様々な悲劇や困難を回避し、遠ざけることが出来るはずです。我が国では、異なる宗教や宗派が互いの違いを認めた上で尊重しあい、平和な世の中を実現するという試みを30年に亙って続けてくることができました。その成果である今回の比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」は、弛みない祈りが人類の明るい未来に繋がることを表すものであると、強く信じてやみません。開催にあたり尽力戴いた関係各位に深い感謝の意を表しますとともに、この祈りが今後も永きに亙って継続されてゆくことを願っております。

永久に続ける平和への祈り

日本宗教代表者会議名誉顧問　新日本宗教団体連合会名誉会長
円応教教主
深田 充啓

比叡山宗教サミット30周年「世界宗教者平和の祈りの集い」に、各国の宗教指導者代表が集い、開催の機会が与えられましたことを、心よりお慶び申し上げます。今回の集いを契機として、全世界に向けて「平和」への祈りと「対話」を推し進める機運を高めてゆきたく考えております。

現在、世界を見渡しますと、宗教問題を発端とした内戦や紛争、無差別なテロ等がいたるところで発生し、安心な生活を営むことが出来ない人々が多く生まれております。また、隣国では世界の情勢と逆行する「核兵器の開発」が進められており、世界で唯一の被爆国である日本国民の一人として、大変憂慮する事態であると心を痛めております。

この集いも30周年を迎え、今も初心の「宗教者は常に弱者の側に立つ」の誓いを忘れることなく、国家、民族、宗教の違いを乗り越え、「世界平和」を祈り、訴え続けていくことは、故山田恵諦天台座主様をはじめ、多くの先生方のご遺志を継承してゆくことであります。そして、その継承し続けようとする思いと行動が、前に進む一歩となり、様々な問題解決に繋がってくるのではないかと思うのでございます。

私たちはまず「全世界の人々の下に平和な暮らしが訪れるように」祈り続け、様々な機会を通して訴え続ける。他の人様の痛み、苦しみ、悲しみを自分のこととして捉え、その解決策を考え、寄り添い、共に歩み続けていくことが大切だと思うのでございます。

一人ひとりの力は微力でも、世界の人々が手を取り合い共に歩み「平和への祈り」を続けるならば、その力は大きく、宇宙の大円となって多くの心と共に、世界に平和をもたらす働きになると信じております。

「連帯」と「育成」

日本宗教代表者会議名誉顧問　世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）日本委員会会長
立正佼成会会長
庭野 日鑛

「比叡山宗教サミット」が30年もの長きにわたり、継続的に開催されてきたことに深く敬意を表します。

昨年私は、イタリア・アッシジでの「第30回世界宗教者平和のための祈りの集い」（聖エジディオ共同体主催）に参加致しました。「比叡山宗教サミット」と同様に、「アッシジの精神」を受け継ぎ、現代に活かそうと、毎年開かれている催しです。その開会式でスピーチの機会を得た私は、特に二つの点に触れさせて頂きました。

一つは、宗教界が、政治、経済、国際機関、民間団体、メディアなどとの連携を深め、より開かれ、より行動的な活動を目指すことが不可欠だということであります。

あらゆる宗教に共通する普遍的価値――つまり生命を尊び、皆が兄弟姉妹として調和して生きる、という根本の願いが、各界に反映されれば、平和への大きな力となります。平和は、宗教者だけでは築けないことを再認識し、ネットワークづくりを真剣に進めていくことが大変重要であります。

もう一つは、人材育成――人を植える道――です。山積する課題に息長く取り組み、本質的な解決に導いていく上で、人材育成は、まさに要であります。特に若者が積極的に参加することによって、新たな発想も生まれ、平和に向けての創造的な展開が期待できます。

これらのことは、日本の宗教界にも当てはまることでありましょう。

比叡山延暦寺は「日本仏教の母山」であり、天台宗は日本の宗教界の先覚とも申せます。平和の実現に向け、今後もご教導くださることを念願致します。

比叡山宗教サミット30周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

日程・会場

8月3日(木)　開会式典／基調講演／シンポジウム　国立京都国際会館

時間	日程	内容	場所
11:00～13:00	開　場 受　付		国立京都国際会館
13:00～13:05	オープニング	オープニング映像	
13:05～14:10	開会式典（総合司会・日本宗教代表者会議事務次長　宍野史生師）		メインホール
13:05	開会の辞 主催者登壇 海外招請者登壇 開会ご挨拶 歓迎ご挨拶 来賓ご祝辞 海外代表ﾒｯｾｰｼﾞ	日本宗教代表者会議事務次長　宍野史生師 日本宗教代表者会議事務総長　　杜多道雄師 日本宗教代表者会議議長　　芳村正徳師 日本宗教代表者会議名誉顧問　　小峰一允師 ローマ教皇フランシスコ聖下　御名代　ジョン・トン・ホン枢機卿 世界仏教徒連盟(WFB)会長パン・ワナメティ師　御代理　パロップ・タイアリー事務局長 イスラームからのメッセージ　世界イスラーム連盟事務総長　ムハンマド・ビン・アブドルカリーム・アルイーサー師（イスラーム）	
	アッシジから比叡山へ東西の祈り３０年を振り返って 講演者　聖エジディオ共同体事務局長　アルベルト・クワトルッチ氏		
	閉会挨拶 閉会の辞	日本宗教代表者会議常任委員　宮本恵司師 総合司会者　日本宗教代表者会議事務次長　宍野史生師	
14:10～14:25	小休憩（１５分）		
14:25～15:25	基調講演		メインホール
14:25	基調講演者紹介 講演Ⅰ　元国際連合事務次長　公益財団法人国際文化会館理事長　明石　康氏 「分裂と憎悪をどうしたら乗り越えられるか」 講演Ⅱ　世界宗教者平和会議（WCRP）国際事務総長　ウィリアム・ベンドレイ氏 「暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか」		
15:25～15:40	小休憩（１５分）		
15:40～17:30	シンポジウム		メインホール
15:40	テーマ　「テロと宗教～暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか～」 進行役　日本宗教代表者会議事務次長　宮下良平師 ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　日本宗教代表者会議事務局顧問　杉谷義純師 パネリスト　世界イスラーム連盟事務総長　ムハンマド・ビン・アブドルカリーム・アルイーサー師御代理（イスラーム） パネリスト　ローマ教皇庁諸宗教対話評議会（PCID）次官　ミゲル・アンヘル・アユソ・ギクソット師（キリスト教） パネリスト　米国ユダヤ人教会　諸宗教対話部長　デビット・ローゼン師（ユダヤ教） パネリスト　スリジャヤワルダナプラ大学学長　ベランウィラ・ウィマララタナ師（仏教） パネリスト　ギリシャ正教会フランス府主教　エマニュエル師（キリスト教） パネリスト　前ボスニアイスラム共同体最高指導者　ムスタファー・ツェリッチ師（イスラーム） パネリスト　KAICIID事務総長　ファイサル・ビン・アブドゥルラハマン・ビン・ムアンマール師（諸宗教対話組織）		
17:20	緊急発題　アブヌール・モスク代表　ファローク・アクビック師		メインホール
17:30	終　了		

8月3日(木)　交流の会／鎮魂の祈り　将軍塚青龍殿

時間	日程	内容	場所
18:00～18:30	開　場 受　付		将軍塚青龍殿
18:30～19:20	交流の会（招待者のみ）		
18:30	開会の辞		
19:20～19:30	大舞台へ移動（１０分）		
19:30～20:00	鎮魂の祈り（招待者のみ）		
19:30～19:40	入　場		青龍殿大舞台
18:30	グレゴリオ聖歌 天台声明 コーラン朗誦 鎮魂の祈り 黙　祷	日本宗教代表者会議議長　植松　誠師	
20:00	閉　会		

8月4日(金)　分科会　国立京都国際会館

時間		日程	内容	場所
09:50〜10:00		開会挨拶		国立京都国際会館
10:00〜11:30			分科会	
	10:00	分科会1	『核廃絶と原子力問題を考える』	ルームB-1
		進行役	日本宗教代表者会議会議部次長　田中朋清師	
		コーディネーター	日本宗教代表者会議常任副委員長　黒住宗道師	
		基調発題	世界宗教者平和会議（WCRP）国際副事務総長　杉野恭一師	
		パネリスト	世界教会協議会（WCC）ヨーロッパ総幹事　アンデシュ・ウェジリド師（キリスト教）	
		パネリスト	韓国仏教宗団協議会上席副会長　春　光師（仏教）	
		パネリスト	日本カトリック司教協議会会長　髙見三明師（キリスト教）	
		パネリスト	全日本仏教会理事　戸松義晴師（仏教）	
		パネリスト	世界教会協議会（WCC）プログラム部長　ペニエル・ラジクマール師（キリスト教）	
	10:00	分科会２	『貧困の追放と教育の普及』	ルームD
		進行役	日本宗教代表者会議会議部長　國富敬二師	
		コーディネーター	世界教会協議会（WCC）中央委員　立教大学教授　西原廉太師（キリスト教）	
		基調発題	アブジャ大司教区大司教　ジョン・オナイエケン師（キリスト教）	
		パネリスト	カンボジア仏教会会長　テップ・ボーン師御代理（仏教）	
		パネリスト	フォコラーレローマ本部諸宗教対話事務局共同代表　ロベルト・カタラーノ師（諸宗教対話組織）	
		パネリスト	ガンジー財団創設者　エラ・ガンジー師（ヒンドゥー教）	
		パネリスト	世界ゾロアスター教徒文化財団理事長　ホミ・ダラー師（ゾロアスター教）	
		パネリスト	アジア宗教平和会議（ACRP）実務議長　ディン・シャムスディーン師（諸宗教対話組織）	
		パネリスト	フランシスコ修道会諸宗教対話局長　シルベストロ・ペハン師（キリスト教）	
11:30		閉会		

8月4日(金)　世界平和祈りの式典　比叡山延暦寺

時間		日程	内容	場所
13:00〜14:35		受付		比叡山延暦寺
14:45〜16:05		世界平和祈りの式典	（総合司会・日本宗教代表者会議事務局儀典部長　山田　歌師）	一隅会館前広場
	14:45	開会挨拶	日本宗教代表者会議議長　保積秀胤師	
		来賓挨拶	日本宗教代表者会議名誉顧問　深田充啓師	
	15:30	平和の祈り	諸宗教代表者並びに参加者による平和の祈り	
		平和の鐘鐘打		
		主催者代表挨拶	日本宗教代表者会議名誉議長　森川宏映師	
	15:40	平和の交歓	青少年代表から参加者全員へ	
	15:50	比叡山メッセージ2017	日本宗教代表者会議名誉顧問　庭野日鑛師	
	16:00	閉会挨拶	日本宗教代表者会議運営委員長　山田匡男師	
	16:05	閉会		
16:30		記者会見		延暦寺会館

8月4日(金)　レセプション　びわ湖大津プリンスホテル

時間		日程	内容	場所
18:00〜20:00		レセプション	（総合司会・日本宗教代表者会議渉外接遇部長　佐藤益弘師）	びわ湖大津プリンスホテル
18:00〜18:30		受付		
	18:30	開会の辞	日本宗教代表者会議運営副委員長　和多善秀師	プリンスホール
		主催者挨拶	日本宗教代表者会議議長　田中恆清師	
		来賓祝辞	文部科学大臣　御代理　文化庁次長　中岡　司氏	
		乾杯	日本宗教代表者会議議長　石上智康師	
		歓談・スピーチ		
		閉会挨拶	日本宗教代表者会議常任委員　徳増公明師	
	20:00	閉会の辞	日本宗教代表者会議渉外接遇部長　佐藤益弘師	

比叡山延暦寺

比叡山は標高 848メートルで、山全体に延暦寺の堂塔伽藍が点在する。伝教大師最澄上人の開山（788 年）以来、日本仏教の母山として知られる。1995年には国連ユネスコの世界文化遺産の一つに指定された。本堂は根本中堂で、その堂内には 1230 年以上の間絶えることなく「不滅の法燈」が光り輝き続けている。

国立京都国際会館

将軍塚青龍殿

比叡山宗教サミット30周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

メッセージ

ローマ教皇　フランシスコ聖下
世界仏教徒連盟（ＷＦＢ）会長　パン・ワナメティ師
世界イスラーム連盟事務総長
ムハンマド・ビン・アブドルカリーム・アルイーサー師

ローマ教皇
フランシスコ

30周年を迎えた比叡山宗教「サミット世界宗教者平和の祈りの集い」が行われるこの比叡山で、ご参列の皆様に、そして諸伝統宗教の代表者である高名な皆様に、心からのご挨拶を申し上げられますことは大変な喜びです。私の魂は皆様の近くにあります。私はすべての皆様と共に、戦争に引き裂かれた世界の多くの地域で協調と調和が新たに開花するよう、祈りを捧げたいと思います。

年に一度のこの宗教サミットは、対話と友情の精神を築くことに大きく貢献しています。このような精神が、人類という家族の平和への新たな道を開くために、世界の諸宗教の信者による協力を可能にしているのです。祈りは私たちに平和のために尽力する意欲を起こさせ、この尽力を持続させます。祈りは、私たちが互いを人間として一層深く尊重することを可能にし、私たちの間の愛という絆を強め、正しい関係や兄弟としての連帯をはぐくむための確固たる努力の原動力となります。

「現在の世界は、暴力やテロリズム、そして私たちの共通の故郷である地球への脅威の高まりによって傷つけられています。このような世界では、祈りや共通問題の目撃者が、大切なメッセージを善良な男性、女性に伝えることになります。私たちは平和を持続させることは実際に可能であると信じています。祈りの中で神に頼れば、何事も不可能ではないと知っているからです（参照：アッシジでの演説　２０１６年９月20日）」。

このような確信に満ちた希望と、私の祈りという新たな約束によって、この比叡山にお集まりのすべての皆様に神の祝福がありますよう、お祈り申し上げます。

２０１７年７月18日　　バチカンにて

世界仏教徒連盟（ＷＦＢ）会長
パン・ワナメティ

比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」の開催にあたり、世界仏教徒連盟は、主催であられる、教派神道連合会、全日本仏教会、日本キリスト教連合会、神社本庁、新日本宗教団体連合会をはじめとする、参加者御一同にお祝いの言葉を申し上げたいと思います。

家庭や社会において仲間が互いに傷つけあったり、人類およびすべての生物の破滅を招く自然の搾取ということが、世界中で起きているように思います。我々は、暴力が許されざる行為であることを、端的に示していかなければなりません。仏教の教えは、本質的に平和を希求するものであります。仏教の経典のなかで、紛争解決の方法として暴力の行使を容認しているものは、一つとしてありません。我々は皆、世界平和を望んでいます。世界の平和は、まず一人ひとりが自らのなかに平和を見出さなければ実現されることはありません。自分の心のなかに平和を生み出し、他の人も平和を見出せるように手助けすることによってのみ、世界に平和が訪れるのです。

あらゆる宗教は、利己主義を律し、自己中心的な行いから人の精神を解放することを目指しています。つまり、すべての宗教は暴力の生出に反し、人々の平和を究極の目的としているのです。したがって宗教は、社会に平和をもたらす主たる実行力なのです。我々は、各信仰の本質を深く理解する必要があります。そうして初めて、利己主義が消滅し、うぬぼれや欲求が存在しなくなるのです。怒りや憎しみからも解放されることでしょう。今こそ、あらゆる宗教が、慈悲、勇気、英知、自己認識を通して、他者の命を守り、世界に和平をもたらすために、自らの信仰を推進するべき時です。平和や公正、様々な社会・国家・宗教の保全を育生するために、すべての宗教は一丸となって取り組まなければなりません。

世界仏教徒連盟を代表して、本サミットが、今日の世界を脅かす暴力と対峙する有効な手段、および世界平和に向けた新たなヴィジョンを共有する場になることを祈願しております。

本日の集いの成果が、平和の波紋を地球の隅々まで送り届けることとなり、仏のご加護が得られますように。

世界イスラーム連盟事務総長

ムハンマド・ビン・アブドルカリーム・アルイーサー

健常かつ誠実なる良心による世界平和の実現を目的とした、この盛大かつ多様なる宗教的会合に参加できることを、大変嬉しく存じております。皆様方に、心よりの挨拶を申し上げます。この宗教サミットに着手され、毎年8月3、4日に定期的に開催されてきた天台座主猊下に、多大なる感謝の意を表したく存じます。

私は、この会合から、国家間の物質的闘争や文化・文明間の思想的衝突、さらには宗教的・宗派的紛争といった命題への解決策が明示されることを望んでおります。また異なる宗教諸派、思想的指導者、文化・文明の中心となる方々のあいだで対話の窓が開かれることによって、それらの問題に対する対策の強化、つまり平和と幅広い共生へのいざないへと私たちが到達できることを望んでおります。

私たちイスラームの国民は、すべての人々が幸福になることを願っております。イスラームはその名称において語義的にも、そして宗教的にも、その高尚なる根本教義と価値観において、人間の尊厳、人類の平等、善と正義と徳への愛情、弱者への慈悲、公正さの支持、不正と侵害の撲滅、全人類の平和といった教えに立脚しております。

私たちがその道を模索している人類の幸福は、私たちが共有する理解、前提、そして人間と世界と人生に対する信仰的視点からこそ、その本質が導き出されます。そして私たちイスラームは、この視点を、神の啓示から戴いております。啓典『クルアーン』は、全人類の起源は一つであることを確証しつつ、こう語っております。

『人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も貴い者は、あなたがたの中最も主を畏れる者である。本当にアッラーは、全知にして凡ゆることに通暁なされる』（クルアーン49：13）

私たち世界イスラーム連盟の関心は、イスラーム世界のみに留まりません。私たちの関心は全人類へと向けられていますし、イスラームのメッセージもまた人類へと向けられた普遍的なメッセージでございます。そしてそのなかには、合法なる手段によって諸権利と自由を守る努力をすることをはじめ、国際的な憲章、協約、原則、

証書、慣例などによって認知している公正なる契約の実践も含まれております。

イスラームの預言者ムハンマドは、こう仰っております。

「私が遣わされたのは、優れた品性を完遂するために他ならない」

最後になりますが、至高全能なるアッラーが私たち全員を、全人類に有益なことの遂行へとお導き下さいますよう。この会議が成功にあふれたものとなることを、お祈りいたします。

比叡山宗教サミット30周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

アッシジから比叡山へ

アッシジから比叡山へ

東西の祈り30年を振り返って

聖エジディオ共同体事務局長
アルベルト・クワトルッチ氏

私たちは、１９８６年にヨハネ・パウロ2世により召集された歴史的な日からの30周年を、アッシジで祝いました。このお祝いの日には、ローマ教皇フランシスコ聖下にもご出席いただきました。本日私たちは、１９８７年8月に開かれた歴史的な第1回比叡山宗教サミットからの30周年記念で集まっています。

これらはまさに、西洋と東洋における長い祈りと対話の歴史です。私にとってこれは、非常に数多くの個人的な思い出で飾られた物語です。私は１９８６年10月27日にはアッシジの会場におり、１９８７年8月3日と4日には比叡山での第1回宗教サミットに出席していました。歴史は私の個人的な出席に左右されるわけではないことは言うまでもありません。しかし、私が出席していたことにより、始まりから一つずつステップを重ねていくにつれて、年を追うごとに私の言葉も証になっていきます。そのため今日では、私は本当に幸せを感じています。

第1回比叡山サミットの前に、山田恵諦天台座主猊下は幸福の重要性について次のようにおっしゃいました。

「宗教の目標は人類を幸福へと導くことであり、平和がなければ幸福はないことから、宗教の最初の目標は世界の平和に向けて取り組むことです。私は昨年のアッシジでの会合に参加したことで、すべての宗教指導者がこの点において同意見であることを確信いたしました」。

過去30年間に、西洋では、聖エジディオ共同体がさまざまな宗派に属する多くの友人と一緒に、民族と宗教国際会議を通じてアッシジの精神の遺産を謙虚に集めてきました。そして東洋では、日本の宗教および天台宗の永続的コミットメントにより、最も困難な時代にあっても、

世界の平和に向けた対話と祈りに絶えず関心を寄せながら、こうした8月のサミットを、その目的に忠実に従って、継続することに成功しています。

しかし本日は、私たちは単に過去を祝うことだけを望んでいるのではありません。昨日形成された道の記憶は、私たちが明日はどこへ行かなければならないかを知るのに役立ちます。記憶なしに未来はありません。記憶というのは伝承されるものだからです。つまり、一つの世代から別の世代へと伝わり移行していくものなのです。そこが、伝承を通じて方向性を示し現在の道標として役立つことのできる、宗教の強みであり財産でもあります。

東洋においても西洋と同様に、今日の政治ではこの伝承意識が失われています。「新しいもの」のほうが常に「古いもの」よりも良いのです。さらに、記憶もルーツもない「新しいもの」を主張するためには、「古いもの」を削除することが必要であると考えられています。この一例は、今日のポピュリズムにおける魅力的ではあるが危険な考え方です。賢明な教えを持つ宗教は、世界を統治する人々を助けることができます。宗教は政治家に、伝統に触れて公平かつ平穏に統治を行い、人間の本物の価値観を再発見するように強く働きかけることができるのです。

私たちは次のように自問します。

今日、私たちの手によってさまざまな方法で伝えられる、アッシジから比叡山へのメッセージは何であるか。

基本的で重大なことは以下のことです。

宗教は一丸となって、平和という課題に対処することができます。長年にわたって、諸宗教対話は、宗教を信じる人とそうでない人が協力していく本物の「共生の文化」をつくりあげ、真のワークショップとなりました。

宗教は、私たちの社会における「共存と平和の学校」であり、それによって男性と女性との間の対話が促進され、そうした対話が人々の心と精神を変化させます。心と精神を変化させることによってのみ、私たちは最も抵抗力の強い政治構造さえも変えることができるのです。その逆は絶対にあり得ません。政治構造の転換によって心が変わることはありません。

ローマ教皇フランシスコ聖下は次のように述べておられます。

「宗教は、最も貧しい人々、弱い人々、および苦しんでいる人々のために多くのことを行うことができます。宗教は公正を好み、調和を促進して平和を構築することができます。しかし何よりも、宗教が行わなければならな

いのは、絶対的存在を切に望む心が世界において生き続け、世界から消えてしまわないようにすることです。生産や消費によって人間の本質が表現されると考えるような、人間に対する一次元的な見方を許さないことです。ですから宗教は世界を変えることができるのです」。

この30年間は、私たちに「対話の成熟」を実現するよう求めています。その一例を挙げます。

私には一人の親愛なる仏教徒の日本人の友人がいます。彼女は今日この場に来ていますが、名前は伏させていただきます。2年近く前に彼女がローマで、対話を「アップグレードする」のにふさわしい時期が来ていると言いました。私にはそれが重要な発言に思えました。そして私たちは、それについて何度も話し合いました。それから私たちはこの問題に取り組み、そして1年後に、共通のコミットメントに対するキリスト教と仏教の間で友好協定が生まれたのです。アフリカ人を支援するキリスト教徒と仏教徒の協力は、ローマで調印されました。そして私たちはマラウイで共同作業を開始しました。

親愛なる友人の皆さん、対話は「成熟」しなければなりません。他者を容認したり尊重したりするだけでは十分ではありません。私たちは力を合わせて平和を構築しなければならないのです。これはローマ教皇フランシスコ聖下の深い考えなのですが、対話というのは平和を構築するためのツールです。例えば、対話を通じて、米国とキューバとの国交は再開されました。

世界では、対話のプロもスペシャリストも必要とされていません。必要とされているのは、平和のワークショップにおける情熱的な職人です。

対話は誰でも実践できる技術であり、誰もが「平和の職人」になることができます。鎖につながれた作業者ではなく、大きなワークショップの職人です。私たちに必要なのは、人の組織を毎日修復するため、あらゆる不和を縫い合わせるため、およびあらゆる友情の絆を編むための針と糸なのです。

以上から、導かれる問いは次のようなものです。

どうすれば不和や憎しみを乗り越えられるのか。どうすれば信仰を持つ男女が暴力的な過激主義と闘うことができるか。

憎しみや暴力の根源にあるのは「恐怖」です。私たちの世界は恐怖で満ちあふれています。時には政治家が、「安全保障」を掲げて統治を行うために恐怖を拡散させます。彼らは壁を設置するために人々の恐怖を利用します。設

置される壁が増えるほど恐怖は増大します。壁は人々を分け隔て、他者や異なる人たちへの憎しみを生み出します。壁は少数派の人々を実に多くのゲットー（決して社会に溶け込むことのできない監獄）に閉じ込め、ゲットーが暴力や過激主義を生み出します。過激主義は、何としても壁を破壊したいと考えている人々の破れかぶれの力です。だから暴力がごく普通の日常茶飯事になっているのです。

宗教は、恐怖による締め付けを通じて信仰を押し付けるのではなく、喜びが持つ誘引力を通じて広がります。宗教は、すべての人々と協力して、壁ではなく橋を建設することを望んでいます。

宗教は、苦しんでいる人々、紛争地帯で暮らしている人々を「養子縁組み」して平和を作り出す賢母のようなものです。宗教は、国や人々を丸ごと養子にすることができます。貧しい人々を養子にしたら、豊かな人々も含めて、より思いやりのある世界を作り上げることができます。危機の際には宗教は人類を再構築し、地球を共通の住居とするために人類の統合を行います。

結論を言わせていただきます。対話というのは哲学ではありません。対話はアイデアによってではなく人々によって作られます。世界にはアイデアが満ちあふれていますが、そこではより多くの人々、実際の人々が必要とされています。男性も女性も、夢見人になったときに本当の対話ができるようになります。なぜなら、夢がなければ、言い換えれば理想とする展望がなければ、対話は不毛な演習のままでとどまります。

私はここで、何人かの夢見人、困難な時期に橋を築いた偉大な人たちの話をしたいと思いますが、時間の関係で、二人の偉大なキリスト教徒と二人の偉大な仏教徒にだけ触れようと思います。

私は、すでに言及したヨハネ・パウロ2世にパウロ6世（Pope Paul VI）を付け加えたいと思います。

パウロ6世は、回勅の「エクレジアム・スアム（Ecclesiam Suam）」のなかで、「対話」という用語を初めて公式に使用した人物です。彼は、第二バチカン公会議を設置するとともに、すべての宗教間の協力という夢を築きました。もう一人は山田恵諦天台座主猊下です。私は、１９８９年にポーランドのワルシャワで開かれた、聖エジディオ共同体の会議に出席していた彼のことを覚えています。彼は第2次世界大戦での沖縄から本土への渡航を思い起こし、祈りという武器で戦争に打ち勝ちました。彼はこ

う言いました。

「私はそのとき、今こそすべての人々が戦争放棄に立ち上がるときであると気づきました」と。さらに、偉大な夢見人である庭野日敬師のことも忘れたくありません。1965年9月15日に、彼はバチカン宮殿でパウロ6世に謁見しました。そのときキリスト教を信仰する人々はその視野を引き上げなければならないと感じました。庭野師がすべての宗教を結び付ける懸け橋になることを決意されたからです。

これらの偉大な人々は、今も私たちの記憶の中にその姿をとどめています。彼らは、民族間や宗教間の真の「懸け橋」になっています。それは彼らに、自分たち自身のなかに最初の橋を架ける勇気があったからです。彼らの精神をその心と結び付けたのがその橋です。心のない精神は味気なく、また精神のない心には平和を構築するための手段がないからです。この橋、この絆、この「religare」(「宗教（religion）」の語源となったラテン語)、これらのなかに、平和の職人である信者の創造的知性が隠されているのです。

親愛なる友人の皆さん、本日私たちは、平和と正義は共に歩んでいることに気づいています。したがって、詩篇第85篇（Psalm 85）:「義と平和とは、互いに口づけしています」という先人のユダヤ教徒およびキリスト教徒の知恵にあるのと同様に、それは仏教徒の「慈悲」の認識のなかにあります。アッシジの精神と比叡山の精神は、平和と正義を同時に行うことにあるのです。このことは、西洋と東洋における、30年間の巡礼と祈りを経た今の私たち全員の認識です。

最後に、祈りをささげて私の講演を終わらせていただきたいと思います。

今後、友情と祈りがさらに大きく成長し、大勢の平和の職人を通じて広がらんことを祈ります。

比叡山宗教サミット30周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

基調講演

Ⅰ 明石 康 氏――元国連事務次長・国際文化会館理事長
Ⅱ ウィリアム・ベンドレイ氏――世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）国際事務総長

平成29年8月3日（木）国立京都国際会館

基調講演 Ⅰ

分裂と憎悪をどうしたら乗り越えられるか

元国連事務次長　国際文化会館理事長
明石 康 氏

このたび比叡山宗教サミット30周年を記念する「世界宗教者平和の祈りの集い」において記念講演をさせていただくことを深く感謝申し上げます。

私と日本の宗教指導者との出会いは、この国各地の宗教指導者の方々何人かが、宗派の差別なくニューヨークの国連本部を訪れ、敬虔な仏教徒であったミャンマー出身のウ・タント事務総長と会って語りあった１９６０年代に遡ります。不世出の事務総長といわれたダグ・ハマーショルドを継いだウ・タントは、超大国アメリカがベトナム戦争に介入を深めていったことに反対を表明し、国連とアメリカとの関係は悪化していきました。しかし、ウ・タント事務総長の決意は固く、孤独な祈りの時間が多かったように見えました。その後も、世界平和機関である国連と大国との関係には複雑な局面が何度もありました。現在もその一つかも知れません。

米ソ両国政府の賢明な判断もあって、冷たい戦争は１９８９年前後に終結に向かい、同時に国連を通じる国際平和の明るい兆しが見え始めました。92年初頭の安全保障理事会の特別会合には、宮沢喜一元総理はじめ各国首脳が出席して国連を中心とする新しい可能性について語りあうことになりました。ブトロス・ガリ事務総長はその年の半ばに「平和への課題」と題する国連の平和機能強化案を提出するなど、世界平和に関する国連の未来構想が描かれていきました。その年２月、安保理事会は

カンボジアにおいて同国の約20年に亘り、２００万人近い犠牲者を出した戦乱収拾のための壮大な多目的平和維持活動を開始することを決定し、わが国や中国、ドイツなどを含む44ヵ国がＵＮＴＡＣ（国際連合カンボジア暫定統治機構）に初めて参加することになりました。カンボジアにおける平和維持活動の前後には、ナミビアやモザンビークにおいても同種の活動が実施され、いずれも成功を収めました。

しかしその後、世界各地において国と国との紛争や戦争は明らかに少なくなっていきましたが、他方、一国内における民族や宗教の違いに根ざす血なまぐさい紛争が次々と発生することになり、国内紛争は実は国連憲章に明記されていない事態なのですが、それが持ち込まれた国連にとっては苦難の90年代になりました。とりわけソマリア、ルワンダ、旧ユーゴスラビアなどの国内紛争の激しさと人道的悲劇のスケールは、明らかに当時の国際社会の対応能力を超えていました。その経験に基づいてガリ事務総長は95年に「平和への課題」の「補遺」を発表し、国連自身が軍事的強制活動を行うことは無理であることを告白しました。

この種の活動に経験豊かな練達の外交官ブラヒミ氏は２０００年に率直な報告書を国連総会と安保理事会に提出し、国連の可能性と限界について語り、国連にはできることもあるが、できないこともあること、またＰＫＯ（国際連合平和維持軍）に関してはこれを派遣すべき場所もある一方、派遣されるべきではない地域も存在することを認め、派遣する場合には十分の予算と人員が必要であることを強調して、国連加盟国に対し紛争の予防から平和構築に至るまでの息の長い関与を国際社会として続けるべきであることについて力説しました。

21世紀に入ってから、国連は中東やアフリカの一部の国々において、破綻国家に近い事態が生じたのに対応して、今までの古典的なＰＫＯをはみ出る、より強力なＰＫＯ活動を実施することになり、成果を収めることも幾つかありました。しかしコンゴ民主共和国やダルフール、南スーダンなどにおいては、国連の試練はいまなお続いている状態です。今年は日本が初参加したカンボジアＰＫＯ派遣の25周年に当たりますが、私たちは今まで行われた平和維持活動の成果を加盟国共同の努力の結果としてきちんと評価するとともに、テロリズムのような、より新しく複雑化する平和へのチャレンジについてどのように対応することができるのか、全世界の視点に立って適切な行動をとることが要請されているように思います。

先月、ドイツのハンブルグにおいて開催された有数の

国々によるG20サミット（金融・世界経済に関する首脳会合）では、参加国による真剣な討議が行われ、大半の国々がグローバルな協力をより一層進めようと決意しましたが、トランプ大統領率いるアメリカのように自国中心の国々による留保の姿勢もあって、合意は困難でした。参加した中国やロシアの態度も、問題によって微妙でした。交流が深まる世界経済や貿易、益々悪化していく自然環境、サイバー攻撃を含む複雑な安全保障問題などに皆でどう対処するかについて意見の違いがありましたし、対立の狭間におかれた国々の真剣な対応ぶりも見逃すことはできませんでした。このような場で大事なことは、自国の立場や意見をやたらに絶叫することではなく、他の国の立場によく耳を傾け合意の可能性を探る謙虚な姿勢であるといえるのではないかと考えます。

イラク、シリアなどにおいては、3年以上暴れまわったＩＳ（イスラム国）など過激で残忍な勢力の力が削がれてきているのが明らかになっている一方で、その影響力は遠いアフガニスタンやリビアなど、あるいはアジアにおけるフィリピン南部やインドネシアなどに飛び火していかないという保証はありません。つまりこのようなテロリズムの問題は中東地域だけの問題ではなく、先進国と開発途上国に共通する困難な社会問題であり政治問題でもあるのは明らかです。その背後には、各国における多くの若者の失業や社会からの疎外、希望の喪失とか、アフリカなどから流入が続く大量の移民や難民と、それに脅威をおぼえる地元の住民との緊張関係があるのは指摘されるとおりでしょう。

いまや地球人口の五分の一を占めるに至ったイスラーム世界と近代に強くなった西欧文明との歴史的な拡がる溝も指摘されています。ヨーロッパからの十字軍が中東地域に軍事的な攻撃を加え破壊を行ったこと、中世においては科学や学問の世界で、イスラーム文化の水準の方が高いレベルにあったこと、また19世紀から20世紀にかけてはフランスやイギリスなどによる植民地支配が中東地域で多くの破壊をもたらしたことなどを忘れることはできません。

私は１９９４年から95年にかけて、国連本部からバルカン半島の旧ユーゴスラビアにおける平和維持活動の責任者として派遣されました。現地ではミロセビッチ元セルビア共和国大統領が６００年前のオスマントルコとセルビア王国との激烈な戦いとセルビア側の徹底的敗北に触れて、セルビア人による結集と報復が必要なことを強調し、セルビア・ナショナリズムをしきりに煽っていました。しかし歴史を忘れることは許されませんが、過度

に歴史を想起するのは往々にしてこれからの平和を構築する上で厄介な問題を生じることになりかねません。ここ北東アジアでもわが国と中国や朝鮮半島の国々の間の外交問題の裏に似たような過去の問題が存在することを指摘しておくべきでしょう。

ニューヨークとワシントンを襲った２００１年９・11の同時多発テロ以来16年が経ちました。一時の興奮は去ったにしても世界はそれ以来、政治的・社会的な不安定と不安をいまだに抱えています。それぞれの社会が平和を保つためには、経済の安定、治安の維持と政治の民主化などが最低限必要になりますが、根本的に大事なことは、おそらく世界中の国々が互いの文化と伝統をきちんと認め合い、相手に対して尊敬と謙虚さをもつことであるといえましょう。同時に人類は互いに国籍が違っても人間として基本的な権利において平等であり、人命の価値と尊さに関して共通の態度をとるべきではないかということです。世界には多くの宗教が存在しますが、偉大な宗教はそれぞれの文化の基盤を構成するものである以上、それを重んじることは互いの平和と共存を保証することにつながるといって過言ではありません。

私は近年スリランカにおける国内紛争にも日本政府代表として関係してきましたが、この国におけるシンハラ、タミル、イスラーム系など住民の間の平和な生活において宗教と宗教者の占める役割がいかに大きいかを改めて認識することができました。紛争の渦中において、スリランカ北部や東部における住民の対話に数多く参加しましたし、タミル人の多いジャフナ市で世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）が主催した宗教間、民族間の対話では参加者たちの間の真摯な雰囲気に打たれました。こうした対話に関係した人々の眼差しには真剣かつ温かいものがありましたが、自分のよく知らない人々をステレオタイプ化する危険は、どこでも見られる現象であることも改めて知らされました。

バルカン半島のボスニアではイスラーム教徒、セルビア正教徒、カトリック教徒が人口のそれぞれ44％、31％、17％を占めていましたが、自分たちをより一般的な「ユーゴスラビア人」として認識している人たちも一部おりました。紛争勃発以前、チトー元ユーゴスラビア社会主義共和国大統領が君臨していた頃には、これと違って宗教間の関係はかなり親密だったと記憶します。関係が悪化してから、砲火の下にあったボスニアの首都サラエボで、私はセルビア系、カトリック系、イスラム系を含む新旧市長が毎週開いていたお茶の会に招かれる機会を得て、紛争のさなかでも、友人としての静かな対話が続い

ているのを確認してほっとしたのを覚えています。

南アフリカにおけるアパルトヘイトの問題は、中東におけるパレスチナ問題とともに、国連をゆるがした難問中の難問でした。しかしネルソン・マンデラ元南アフリカ共和国大統領の偉大な功績もあって、南アフリカはこの問題をついに克服することができ、その背景には宗教者による、精神性と啓示に充ちた「和解」を通じるプロセスが、分裂の世界における一つの例として現在に至っています。

もちろんそれぞれの紛争はユニークな要素を持っていますから、一国の例をそのまま他の国にあてはめるのはきわめて危険なことです。人々の顔が異なるように、和解の歴史は異なっていて、宗教が果たしうる役割にも色々な形があるのは当然です。どの場合にも関係者は知恵と経験を持ち寄り、そこで可能な解決策を見出すしかないのです。宗教者、思想家や運動家、NGO（非政府組織）の間で、あるいは政府や国連などの専門家の助力も得ながら、課題解決への道を一歩一歩進んでゆくしかないと思われます。

一つ言えることは、私たちは自分と違う文化や生活の豊かさに触れ感銘する気持ち、またそれによって自らを変えていく可能性を捨ててはいけないということです。

我々の住んでいる北東アジアにおいては、とりわけ困難で錯綜した歴史がお互いの過去に存在していました。平和な交流の時の方が衝突した時期よりずっと長かったのですが、侵略や武力行使、支配や残虐行為の記憶を消すことは容易でありません。それについては真摯な謝罪と反省に基づく和解が必要なことは、おそらくこれからも変わりないと思われます。

同時に、対立するすべての側にとり必要なことは、虚心坦懐な過去の反省だけではなく、より明るい共通の未来を信じ、それに向かって不退転に進んでゆくこと、その限りない可能性を信じることではないでしょうか。北東アジア地域、特に現代の日本などでは宗教への関心は残念ながら決して大きいとは言えません。多くの人たちは日常生活に埋没しているように見えます。しかしこのままでよいとは思われません。日本と中国、日本と韓国、日本とより広いアジア諸国との関係改善の道は、政治家、教育者、宗教者だけでなく、より多くの若い人たちの積極的参加なしには、おそらく達しえないのだと感じます。私は若者の交流に関係しておりますが、その大きなポテンシャルを強く感じている一人です。

確かに、あまりにも多くの分裂とあまりにも大きな憎悪の存在する現代世界です。どうしたら我々はそれを乗

り越えられるのか、考えれば考えるほど呆然としてしまいます。しかし諦めることは許されません。一つの問題が解決したら、次の難しい問題の解決に突き進む蛮勇が要るでしょう。また理性だけでなく感性も、知恵と共に情熱ももって当たらないと、最近私たちの周りにとみに増えてきている反グローバル、反民主的ポピュリズムに対抗するのは難しいと思われます。

言い換えますと、お互いに自分の世界から外に向かい胸襟を開いて語り合う、対話の場を拡げる地味な努力しかないのだと思われます。一緒に仕事をする人の輪を少しずつ大きくしながら究極的に大きな目的を達成するその過程は長くとも充足感に満ちているに違いありません。具体的な課題、たとえば貧困の撲滅、病気の克服、育児や教育の問題など身の周りに沢山ある比較的簡単なことから始めて、より困難な政治や平和がからまる問題に進んでいくのが効果的であるように思われます。

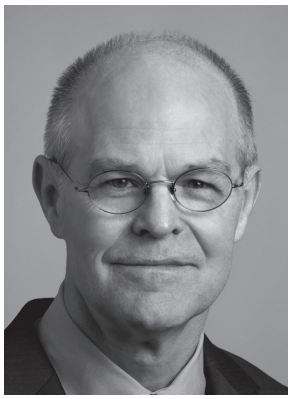
比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈り」のこの集まりが、私たちみんなの間の強い繋がりを再認識する一つのきっかけになることを信じて、私の拙い挨拶に代えさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

基調講演 Ⅱ

暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか

世界宗教者平和会議（WCRP）国際事務総長
ウィリアム・ベンドレイ氏



このサミットは、限りのない思いやり、真の平和、平和の促進に向けた多宗教間の協力に対する仏教のコミットメントを表明しています。

宗教は暴力的過激主義に利用され悪用されるようになっています。これは、人間の尊厳を尊重しない、過激な宗教的イデオロギーによる暴力です。暴力的過激主義には、罪なき人々の殺害を正当だと主張する政治的・民族的な暴力的イデオロギーが挙げられます。暴力的過激主義が非難・糾弾されてしかるべきですが、ここではとくに「暴力的な宗教的過激主義」に焦点を当てさせてください。

暴力的な宗教的過激主義はたちが悪く、広がりを見せています。宗教関連の敵意、憎悪犯罪、侮辱、屈辱がメディアで増幅されて、社会的な敵意をあおり、暴力的な宗教的過激主義の魅力をいやがうえにも強めるという「悪循環」に陥っています。また、暴力的な宗教的過激主義の高まりに対して、社会的な敵意はさらに強まっています。この悪循環は暗黒の落とし穴にさらに深く吸い込まれていっています。比叡山宗教サミットでは、どうすればこの暗黒の落とし穴に「光」を当てることができるかについて考えます。

宗教が解決に貢献できる方法を共有するために、私の所見を三つに分けて述べます。

まず、エジプトのナギー・イブラヒム博士についてお

話しします。

博士はイスラームで、彼の話はすべての人々にとって教訓になります。

第二に、暴力的宗教的過激主義の「原動力」に焦点を合わせます。原動力とは人を暴力的過激主義に「押しやる」力、あるいは「引き込む」力です。

第三に、多宗教による「積極的」な平和の表明が新たに見られるようになっている状況を注視したいと思います。「積極的」な平和のビジョンは、暴力的過激主義を支持する宗教の悪用を減らすことができます。また、真の繁栄に至るための指針としても役立ちます。

一、ナギー・イブラヒム博士の話

ナギー・イブラヒム博士の話をするにあたって、エジプトのアンワル・サダト大統領のことを思い出す必要があります。１９７９年にエジプトとイスラエルが、平和条約を締結しました。エジプトのイスラーム聖戦士グループは、この条約をひどい裏切りとみなし、サダト打倒を企みました。１９８１年10月6日、第四次中東戦争でエジプトがスエズ運河を渡河した日を記念して、カイロで戦勝パレードが行われました。パレード進行中に、エジプトのイスラーム過激派が約2分間にわたって攻撃を仕掛け、サダトとその他10人が殺害されたのです。

ナギー博士は、エジプトのジャマー・イスラミア（イスラーム原理主義グループ）と同グループの過激派であるイスラーム聖戦機構のリーダーの一人でした。博士はサダト大統領暗殺計画と全国の警察署襲撃に加わりました。何百人もの民間人と警察官が殺されました。要するに、ナギー博士はイスラームの名において暴力を説き勧め、実行したのです。彼は自分が神の業をなしていると信じ切っており、自分の信仰のためなら死んでも構わないと本気で思っていました。

ナギー博士は逮捕され、テロと殺人、エジプト政府転覆未遂で有罪となり、懲役25年を言い渡されました。

ナギー博士は獄中でも戦闘活動をけしかけ、調整し続けました。博士と仲間たちは、世界中で新たに出現していた若いイスラーム聖戦士の間で英雄になりました。その一部はフィリピン、インドネシア、モロッコ、ナイジェリア、チェチェン、ヨーロッパ、北米など、ほかの場所で同様の暴力行為を働きました。この暴力的な聖戦士運動は、ナギー博士と彼の同僚たちからインスピレーションを得たのです。

実際に、私の友人で、ナギー博士のようなジハード過激派の起訴に携わったエジプトの元検察官、アムル・ア

ブダラ博士は、投獄された聖戦士たちが自分たちの道徳的優越性を明らかに確信し、彼のような検察官をしばしばののしったことを話してくれました。

ナギー博士は無限に続くかのような獄中生活のなかで、自らの信仰の基礎をさらに深く探求することができました。これは予期せぬ宗教的「目覚め」をもたらし、その結果、暴力に関して驚くべき「転換」あるいは「転向」に至ったのです。やがて、これは「修正主義」として知られるようになった思想を生み出しました。その本質は、イスラーム国家建設のために暴力に訴えることはまったくもって非イスラームであり、間違っているという認識でした。

ナギー博士と仲間たちが始めたこの修正は後年、より大規模な運動――1997年にアル・ジャマー・アル・イスラミヤ、2007年にイスラーム聖戦機構――によって採用されました。これは驚くべき展開ですが、まったくと言っていいほど知られていません。

2007年2月の修正主義発表以降、イスラーム聖戦士の指揮官はエジプト政府当局の支援を受けて、エジプトの刑務所を回って信奉者たちと会談しています。ナギー博士は、自分と仲間がエジプト各地の刑務所で非急進化ワークショップを開いていると主張しています。彼らは約2万人の若い聖戦士の暴力的な態度や信念を変えることに成功しました。実際、刑務所から釈放されたあと再び暴力行為に走った者は一人もいませんでした。

さらに、エジプトの過激派のみならずアルジェリア、サウジアラビア、イエメン、ヨルダン、タジク、マレーシア、インドネシアの武装イスラーム運動でも、同様の取り組みが採用されているのです。

要するに修正主義とは、イスラームの名において暴力を振るうことに熱中している人々を非急進化するための最も効き目の強い薬と言っていいでしょう。修正主義には、イスラームの名における暴力の支持者の心を変え、より多くの若いイスラームが暴力的集団に加わることを防止する可能性があります。

この薬の出所はイスラーム自体の「薬局」から直接処方されるのです。この点を普及させなければなりません。歴史を見れば明らかなように、どの宗教も暴力的過激主義に冒されやすいのです。特定の宗教の名において暴力的過激主義が実行されている場合、その宗教の信者は自らの宗教の中で過激主義という病の解毒剤を探すのが賢明であることを、ナギー博士の話は示唆しています。それはまさに私たち宗教団体の双肩にかかっています。

先ほどお話ししたエジプトの友人である元検察官のア

ムル・アブダラ博士は、数週間前に私に代わってナギー博士に連絡し、私がここ比叡山宗教サミットで彼の話をする予定であることを伝えてくれました。

二、暴力的過激主義の原動力

次に、暴力的過激主義の「原動力」と呼べる要因についてお話しします。これは三つのカテゴリーに分けられます。

㈠ 宗教イデオロギー的原動力

暴力的過激主義を正当化しようとする誤った宗教解釈。これはナギー博士の話で例に挙げた「教義的」原動力で、正しくない歪んだ宗教的解説・解釈です。その実態を暴き、誤っていることを証明し、信頼できる「主要な」宗教的解説と置き換えなければなりません。「主要な」宗教的解説とは、それぞれの宗教の平和に関する独創的・全体的なビジョンを指し、現在私たちが人間の尊厳の尊重、公益への関心、暴力の拒絶と呼んでいるものを含みます。

重要なことには、ナギー博士自身は、教義的修正だけに焦点を当てても効果がなく、暴力的過激主義の原動力となっているその他の要因にも取り組まなければならないと強調していることです。

㈡ 社会経済的原動力

基本的人権の広範囲に及ぶ侵害、極貧、上昇機会の不足、教育などの基本サービスを提供する政府の能力の欠如。これらの悲惨な状況と暴力的過激主義との関連に対応するには、法の支配によって正義を促進するとともに世界的貧困に取り組むことが必要です。人々を暴力的な宗教的過激主義に「押しやる」可能性のある要因の多くを取り除く必要があります。

㈢ 心理的・精神的原動力

集団に所属する心理的・精神的必要性や、自分自身より大きいものの一部になりたいという願望など。この原動力は多くの場合、人々を暴力的過激主義に「引き寄せ」たり「引きつけ」たりし、暴力的過激主義を非常に魅惑的に見せることがあります。これらの原動力には、個人や集団の尊厳に対する侮辱に対応したいという願望が含まれます。暴力的な宗教的過激主義の心理的魅力に対抗するには、有意義な生活を築

く絶好のチャンスを提供しなければなりません。例えば、長年の不公正に取り組んだり、利他に貢献したりする真の方法を示すのです。とくに、人々は意義と目的を求めており、自らを犠牲にして他者を助けることによって、より深い自己を実現するよう求められたいと考えています。

これらの三つの暴力的な宗教的過激主義のいわゆる「原動力」教義的、社会経済的および心理的・精神的のそれぞれをさらに分析し、宗教団体、政府その他の関連部門が投入する能力や資源によって対応しなければなりません。

〈多宗教によるアプローチの必要性〉

政府と市民社会は、社会経済的原動力および心理精神的原動力に取り組むうえで重要な活動主体になる必要がありますが、多宗教的な対応が特に有用です。多様な宗教団体が宗教上の相違を尊重したり、共通の関心事を共有したり具体的行動に一緒に取り組む意思があることを示すことができれば、連帯を構築し、宗教的「他者」を敵ではなく精神的な味方と認識できるでしょう。

三、共通の幸福：平和に関する新たな多宗教的ビジョン

どの宗教も、平和とは個人や社会が繁栄することであり、単なる暴力的紛争がないだけということではない状態であることを知っています。

重要なのは、厳しい矛盾、ひどい個人的失敗、人間としての経験を傷つける残酷な社会的疎外を浮き彫りにすることです。闇に照らして初めて、平和に対する「脅威」が見えてくるのです。

ここで、平和に関する共通の多宗教的ビジョンはあるのか、という疑問が生じます。答えは「イエス」です。これは世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）で数十年にわたって発展し続けているビジョンです。世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）は、１９７０年にここ京都を皮切りに５～７年ごとに世界会議を開催、最大千人の宗教指導者が世界中から集まり、平和の共通の「積極的」要素や平和に対する共通の「脅威」を慎重に見定められるようにしています。

平和の要素に関しては、１９９４年の会議のテーマが「共通の癒し」でした。この会議は、問題を深く考えれば「被害者」と「加害者」の両方が傷ついているという意味で、傷というのは実は常に「双方向的」であることを明確にしました。したがって、私たち全員が癒しを必要と

している点で結びついているのです。お互いが、そして社会が癒える手助けをすることができるし、そうしなければなりません。

1999年の会議のテーマは「共生」です。この会議では、すべての社会で「利他」を促進する重要な役割に焦点を当てました。2006年にここ京都で開催された注目すべき会議では「共通の安全」がテーマでした。あの会議では、私たちを他者の危険から切り離せるほど高い壁はないことを明らかにしました。私たち全員の「安全」は、私たちの中で最も危険な状態に置かれている人々と同じ水準でしかありません。あなたの安全は私の安全であり、私の安全はあなたの安全なのです。つい最近の2013年会議では――過去の会議を足場に――積極的平和を「共通の幸福」の状態と呼びました。

共通の幸福は、この会議の見地からすると、ありとあらゆる人に、すべての側面――文化、社会、経済、政治、感情、知性、美学、宗教――で自分の個人の尊厳を広げるよう促す、内なる「呼びかけ」があることを認識しました。それは人間が所有や蓄積にではなく、存在や生成に意味を見いだすという宗教的な考えに基づいています。

同時に共通の幸福には、個人的な発展に対する呼びかけは自然界の尊重・保護を含む「利他」を促進する義務と直接関係している、という確信が含まれます。この会議は、人間は利己的なエゴイズムを超えて連帯を目指し、紛争を超えて協力を目指すという信念を共有しました。そして、人間は他者との思いやりのある関係を通して本当の意味を見いだし、最終的に万人はひとりに、ひとりは万人に責任を負うことを確認しました。各人が他者への貢献を求められると同時に、今度は各人が他者に支えられるのです。

人間の尊厳を広げると同時に利他への実践を促進する相互関係は、時間を超えて広がっており、環境と調和した生活への関心を含んでいます。そのためには、個人的な美徳と社会的な美徳の両方を育成する必要があります。これらの美徳は人類の繁栄に不可欠だからです。

共通の幸福は、文化、政治、経済および社会システムが相対的な妥当性を評価する枠組みを与えてくれます。これらのシステムが、人間の尊厳の拡大と利他行への促進との深い相互関係を阻むならば、改革する必要があります。

しかし、「共通の幸福」は、理想主義的な夢、慰めとなる虚構にすぎないのでしょうか。私たちの宗教的な考えは、人間の誤りを認めることに関してかなり具体的で

す。宗教的な考えは、人間の尊厳があまりにも頻繁に侵害され、他者への思いやりが個人的または集団的な利己的エゴイズムによって頻繁に骨抜きにされてきたことを知っています。

これらの傷に対応し、宗教的な考え方は、他者の幸福のために自己犠牲を払い、平和のために無実の苦しみに耐え、善をもって悪に報い、許しを与え、普遍的な愛情や思いやりを示すことを求めます。これらの非常に貴重な精神的美徳は、傷付けられた人間の尊厳を強力に回復させ、大きく損なわれた他者への思いやりを再建することができるのです。

私たちは暴力的な宗教的過激主義を強く拒絶します。しかし、それぞれの宗教に過激主義を治療する独自の薬局があることを示す、ナギー博士のような人々の身上話に心から励まされることがあります。第二に、暴力的過激主義がどうしてひきおこされるのか？　その社会経済的原動力および心理精神的原動力を深く理解し、それらに取り組む必要があります。第三に、今日の宗教は、人間の尊厳の拡大と利他行を結びつける、共通の平和という新たな概念を促進しています。このビジョンは、いわゆる政治社会の積極的要素を確認すると共に、それを超えるものを指し示してもいます。

「現代」政治社会の主要な美徳が「寛容」であるとすれば、共通の幸福は寛容の価値を認めると同時に、それを超えてさらに深い組織力を持つ美徳の達成も要求します。宗教は私たちに「連帯」を求めます。それは非常に深く包括的な連帯です。あなたの「幸福」は私の幸福でもあり、同時に私の「幸福」はあなたの幸福でもあるのです。各人は生まれた瞬間から、共同体に全面的に依存しています。同様に、私たち一人ひとりは、深い思いやりによって、狭量で利己的な自己の監獄を「超える」ことで、存在の最も深い喜びを味わいます。誰もが傷ついていることが事実だとすれば、私たちの宗教が自己を無にする配慮を要求することによって私たちを癒し、回復させることもまた事実なのです。

ご清聴ありがとうございました。

比叡山宗教サミット30周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

シンポジウム

テロと宗教

―暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか―

平成29年8月3日（木）国立京都国際会館

シンポジウム

テーマ：テロと宗教 ～暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか～

進行役……宮下亮平師
日本宗教代表者会議事務次長

コーディネーター　杉谷義純師
日本宗教代表者会議事務局顧問

パネリスト……

アブドル・アジーズ・トゥルキスターニ師
世界イスラーム連盟顧問（イスラーム）

ミゲル・アンヘル・アユソ・ギクソット師
ローマ教皇庁諸宗教対話 評議会（ＰＣＩＤ）次官（キリスト教）

デビット・ローゼン師
米国ユダヤ人協会 諸宗教対話部長（ユダヤ教）

ベランウィラ・ウィマララタナ師
スリジャヤワルダナプラ大学学長（仏教）

エマニュエル師
ギリシャ正教会フランス府主教（キリスト教）

ムスタファー・ツェリッチ師
前ボスニアイスラム共同体最高指導者（イスラーム）

ファイサル・ビン・アブドゥルラハマン・ビン・ムアンマール師
ＫＡＩＣＩＩＤ事務総長（諸宗教対話組織）

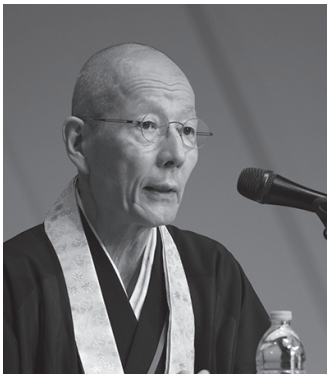
宮下（進行役）　それでは、これからシンポジウムを始めます。

私は日本宗教代表者会議事務次長の宮下亮平と申します。今回のテーマは「テロと宗教～暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか～」であります。

コーディネーターは日本宗教代表者会議事務局顧問であり、世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）日本委員会理事長の杉谷義純先生におつとめいただきます。

それでは杉谷先生よろしくお願い申し上げます。

杉谷（コーディネーター）



ただ今ご紹介いただきました杉谷義純です。これからシンポジウムを開催させていただきますが、テーマについては司会者の方からご紹介したとおりでございます。

テロリズムと宗教を並べますと、その目的と手段はまったく正反対の存在であります。しかし近年テロリズム、すなわち暴力的過激主義イコール宗教的暴力過激主義と一般人にうけとられつつあることは大変残念であり、また宗教者として憂慮するところであります。

そしてテロはたびたび、あちこちで引き起こされ人々に大きな不安を与えています。この世界各地でのテロを冷静に分析しますと、その背景にはそう単純に決めきれない、様々な要素があることはご承知のとおりです。

宗教的過激主義といわれるテロについて、宗教者はどう考え、分析し、どのような姿勢をとってゆくのがよいのか。

本日は、ここにキリスト教やイスラーム、仏教、ユダヤ教等の世界的な宗教指導者がお集まりです。その先生方に単に現象的なものでなく、宗教教義的、哲学的な解明もあるとは思いますが、具体的にどのような姿勢をとるのがよいのか、そういう面まで踏み込んだご意見をいただければ大変ありがたいと存じます。時間に制約がありますので、まず最初にお一人10分程度の見解をいただきまして、そのあと時間があればさらに補足をと考えております。

それでは最初にトゥルキスターニ先生、よろしくお願

いします。

トゥルキスターニ（イスラーム）

私は１９８０年に日本に留学し、早稲田大学に通いました。最終的には早稲田大学大学院で博士号をとり、いったんサウジアラビアに戻りました。私はもともと平和関係の仕事をしたかったのです。しかし、当時、日本にとってサウジアラビアはまだまだ石油の国であり、砂漠の国でしかなかったのです。ずいぶん勉強したという記憶があります。

今回、私は世界イスラーム連盟57国の代表として（代表代理ですが）の立場でお話します。今回のシンポジウムは「テロと宗教」ですが、テロと宗教は関係ありません。しかし残念ながら、われわれは宗教の名を使ってこれまでいろいろとやってきたことも事実です。

世界イスーラム連盟の考え方は、この世のことだけでなく、来世のことも考えないといけないから、宗教はとても大事だという立場です。それゆえにテロに対して「あれは、われわれとは関係ない」と思っても、その対策を一生懸命やらないといけない。

皆さんもご存知と思いますが、イスラームの世界人口は15億7千万人です。そのなかで、テロをやっているのはわずかの人です。だから、イスラームとテロとは関係ない、宗教は関係ないということを理解してもらえればありがたいのです。もちろん専門の人は理解してくれていますが、テロをイスラームと結びつけるがゆえに、最近は我々の社会、経済にも大きな影響がでています。

我々イスラームは、それぞれの宗教を尊敬し共存共栄したいと思っています。しかし誤解を受けていますから、その誤解を払拭するためにやらなくてはならないことがあります。今回、天台宗のおかげで集まることができたことは大変ありがたいことです。

もう一点は、今後、何をどうするべきかのロードマップをつくってほしい。そうすれば、我々も参加できます。イスラームを名乗って悪いことをしている人は、イスラームと関係ないのです。そのことを世界が知るために、我々もがんばらないといけないと思います。実は来年、そのための会議を開きます。皆さんにも参加して欲しいと思います。宗教とテロは関係ない。テロはテロです。

ジハードという言葉があります。ジハードは今、悪い

意味で使われています。

酒を飲まず、勉強しようと努力する、それがジハードです。戦争とは関係ない、がんばって我慢して正しい人間になろうというのがジハードです。それを理解してほしいのです。天台宗はじめ他宗教と連携していきたいと思っています。

杉谷　ありがとうございました。テロは宗教とは直接関係ないのだ、ジハードとはお互いよく努力して理解する意味なのだ、とも説明されました。

次にギクソット先生、お願いします。

ギクソット（キリスト教）

第30回比叡山宗教サミットでシンポジウムを企画してくださったことに対して、日本宗教代表者会議の皆様に感謝の意を表明させていただきます。

私からは、どんな地域や場所の人々も平和と対話の真の促進者になり得ることを期待して「テロと宗教――信仰心のある人々は、どうすれば暴力的過激主義との闘いに取り組むことができるか」について、皆様にご考察いただくためにいくつかの要点を提示させていただきたいと思います。

本日、私たちはアッシジで開催された世界宗教者平和の祈りの集いの30周年記念からほぼ1年後に、ここにこうして集まっています。

ローマ教皇フランシスコは1年前、次のように指摘しました。

「私たちは無関心でいることはできません。今日、世界には深刻な平和への渇望があります。多くの国で、人々が戦争によって苦しめられています。忘れられがちですが、戦争は常に苦しみや貧困の原因となっているのです」（ローマ教皇フランシスコ、世界宗教者平和の祈りの集い、アッシジ、２０１６年９月20日）

どうすれば紛争や戦争を回避することができるのでしょうか。

対話は必要不可欠なものであり、対話なくして世界に平和は存在し得ません。このことは、今日において人類の圧倒的多数を占めている宗教信者のあいだでは特に言えることです。

あらゆる宗教に、正義、平和、友愛、繁栄の世界の構

築に向けて貢献できる、価値観が存在しています。必要なことは、世界的な変化をもたらすために、それらの価値観を一つにまとめてすべて受け入れ、世界のあらゆる地域における宗教の信奉者に信じられ受け入れられるようにすることです。私たちが友愛と友情の精神で手を差し出す必要のある、そうした何百万人もの善意の人々に呼びかけて、共通の利益、より良い世界を築くために協力を要請しましょう。

ローマ教皇フランシスコは、次のように確信しています。

「もし私たちが他の人々、他の文化、他の考え方、他の宗教を探し求めるのであれば、私たちは自分自身の殻から抜け出して、『対話』と呼ばれる最も美しい冒険を開始します。…（中略）…対話は、私たち自身の成熟にとって非常に重要です。なぜなら、他の人、他の文化、さらには他の宗教とも正しく向き合っていくなかで、私たちは成長し、発達し、成熟するからです。この対話が平和を創り出す基になります。対話なくして平和が存在することは不可能です」（ローマ教皇フランシスコ、埼玉県の西武学園文理中学校に向けて、バチカン市国、２０１３年8月21日）

出身地に関係なく、過激主義者の性向は、世界の平和と安全にとって最も危険な脅威の一つです。そうした過激派の動きは、妥協のない暴力的方針を押しつけることで、根本的かつ急激な変化をもたらします。彼らは、相互の受け入れと理解ができない環境を作り出します。こうした環境が、異なるイデオロギー、人種、および信仰を持つ人々に対するさまざまな敵意へと変わっていくのです。

私たちは、いかなる戦争も、真の宗教倫理とは相いれないという認識を高めなければなりません。私たちは、真剣で広範囲に及ぶ対話の構成を通じて、それに打ち勝つことができます。そのためには、自らの宗教的イデオロギーで誤った信念や行動をしている人々を特定する宗教指導者や世論形成者による真の努力が必要とされます。

平和というのは普遍的責任です。私たちには、世界宗教者対話への道に沿って一緒に前進すること、すなわち、いかなる紛争も阻止するための真の倫理的価値観の促進者になることが求められています。そしてそれにより、戦争の歴史的概念を打ち破り、自らの信念を維持するため、自国土の防衛、あるいは自分たちの地域社会を守るために、進むことができるようにしなければなりません。

私たちには、暴力の原因を調査するため、それぞれの

信者に各自の心のなかに潜む邪悪との闘い方を教えるため、すべての人々や環境を愛してそれらと仲良く暮らすため、正義なくして平和はなく、許しなくして真の正義はないことを教えるため、紛争の防止と破壊された社会の再構築に向けて協力し合うように促すための、共同事業が求められています。

最後に、私の心からの希望を表明させていただきます。それは、私たちはこの暗い世界を流れる不適切な誤認を正すために協力できるということと、誠実な対話を促進するという私たちの約束に、多くの希望があるということです。

「最も局地的でありふれた状況において、また国際秩序のなかで、非暴力が私たちの決定、私たちの関係、私たちの行動、そしてさらにいえば、あらゆる形態の政治生活の特質にならんことを祈ります」（ローマ教皇フランシスコ、第50回世界平和の日の祝典に向けたメッセージ、２０１７年1月1日）

今日、私たちは「傷ついた人間性」のなかで生活しているということを踏まえ、世界宗教者対話の動機は、平和と正義に対する相互コミットメントのなかになければならず、従ってそれらを私たちのあらゆる交流の基本原則にしなければならないと考えています。実際に、世界宗教者対話は世界平和のための必要条件であり、それゆえに私たち全員に課せられた義務なのです。

対話は人間性の養成所を作り出して統合の手段となり、お互いの尊重と友情に基づいた、より良い社会を構築するのに役立ちます。

私たちが生活している状況の重要な性質を考えると、私たちは無関心でいることはできません。今日、世界には深刻な平和への渇望があります。多くの国で、人々が戦争によって苦しめられています。忘れられがちですが、戦争は常に苦しみや貧困の原因であり続けているのです。

ローマ教皇フランシスコは、慈悲のテーマについて熟考して次のように強調しました。

「至るところで宗教信者たちの平和的な出会いと真の宗教の自由が促進されんことを祈ります。この点において今、神、人類、および未来に誓いをたてる私たちの責任は重大です。そこでは、偽りのない不断の努力が必要とされます。それは、私たちに困難を強いる要求であり、すべての人々のために希望を持って共に歩む道です。宗教が生命の源となり、傷つき困窮した人類に慈悲深い神の愛をもたらさんことを祈るとともに、それらが傲慢と恐怖によって作り出される壁を突き破るのに役立つ

希望の扉とならんことを祈ります」（さまざまな異宗教の代表者に向けたローマ教皇フランシスコ聖下の演説、クレメンタインホール、２０１６年11月３日）

私たちは武器を持っていません。しかし、私たちは祈りの、柔和で謙虚な強さを信じています。私たちがここにいる目的は、１９８７年以来、毎年比叡山で開催されている世界宗教者平和の祈りの集いに参加することと、非暴力への道をともに歩みながら世界平和のために祈ることです。

神にささげる私たちの祈りが、すべての戦争、テロ行為、および暴力の撲滅に役立つとともに、アッシジの精神に基づく平和に向けた世界宗教者対話を促進せんことを祈ります。

ご清聴いただきありがとうございました。

杉谷　ありがとうございました。対話の重要性と対話がないゆえに敵意が生まれる危険性についてご指摘いただきました。そして祈りの重要性について言及されました。

続いて、ローゼン先生、お願いします。

ローゼン（ユダヤ教）

30周年記念行事、比叡山での平和の祈りでお話できることを光栄に思います。

ユダヤ教の伝統に、「そこで何回も何かを繰り返すことは、確認の意味がある」というのがあります。最初の比叡山でのサミットには参加することはできませんでしたが、10回目や20回目の記念行事では講演させていただきました。従って、あなた方とご一緒できることは、私が人々や宗教のあいだの平和や調和に献身している証なのです。同時に、今日ここに米国ユダヤ人協会（ＡＪＣ）のリーダー達が私に同伴しているのも、同じように献身している証なのです。

お招きいただき、私達の時代の大きな問題の一つである、宗教の暴力的乱用についてお話する機会をいただいたことに感謝いたします。

すべての宗教は、平和と人類の繁栄がその目標であると宣言していますが、紛争の解決を手助けし平和や和解を促進するよりも、紛争を悪化させていることが往々に

してあります。

宗教の善なる名の擁護者は、いわゆる「宗教の名のもとの紛争」のほとんどは、民族的、国家主義的な領土紛争であり、単に目的のために宗教を悪用しているのだと答えます。

しかし、たとえそうであっても、なぜ宗教はそのように簡単に悪用されて暴力的な結果を生むのかという質問には、まだ答えが出ていません。

これには多くの理由があるのは確かですが、宗教が与えるものは何であるかについて分析してみると、多くのことが分かります。

社会学者ダグラス・マーシャルは、宗教を「三つのB」、つまり「信仰・振る舞い・所属」で表しています。実際は、さまざまな宗教は、これらのうちのいろいろな組み合わせや、どれかを強調することで成り立っています。宗教の悪用は、このうちのはじめの二つに関係することがよくあります。

宗教の恥なのですが、教義や儀式に関する議論ですら、暴力的な衝突に繋がることがありました。現在でも、同じ信仰や実践を共有しない人々への暴力の口実として使われていることは否定できません。しかし、現在の世界ではとくに、宗教の名における暴力は、「所属」とよりはるかに関係があります。

アイデンティティは、私達が誰であるか確認しますが、同時に、当然ながら誰でないかも確認することになります。区別や違いの感じ方を、ポジティブに見るかネガティブに見るかは、自分たちがいる、あるいは自分たちがどうあるべきかという状況に大きく左右されます。

もし、私たちの特定のアイデンティティを超えるより広い状況を、私たちを歓迎し尊重してくれるものとして捉えるならば、その状況がよりポジティブに受け取られるでしょう。しかし、現実の目に見える脅威のなかで、歴史的にまたは現在損害を受けているという意識で、不屈の精神や安心感のために自分達のアイデンティティに強く注意を向けると、大抵これは独りよがりや「他者」を軽んじ、非合法化する傾向を招くことにもなります。

私たちが、個人、家族、コミュニティ、国民として、誰であるかということを理解するのに、宗教は意味を与えてくれます。言いかえるならば、宗教は人間のアイデンティティすべての要素と密接に関係しています。従って、価値観や目的を私たちに与える上で重要な役割を果たしています。これは、アイデンティティが脅威にさらされたり軽視されたり、またはそのように感じられたりしたときにとくに顕著です。しかし、そうするなかで、

宗教が広く乱用されて、反対者や異なった人々を非合法化することで、先に述べたように独りよがりを強め、紛争を激化させ、宗教の最も高尚な普遍的価値を裏切ることになるのです。

この傾向は、自分の世界観を共有しない者との暴力的紛争のなかで、選民のように自分を感じる心理を起こさせます。そのようなイデオロギーは、社会から疎外された者、とくに自尊心や名声を求める若者を強く引き付けることができます。従って、宗教の名のもとにそのような恐ろしい暴力的過激派と闘っていくには、社会的疎外の根源に取り組むことが重要です。

暴力の脅威には、自己防衛のための必要な手段が取られるのは当然です。そして、ときとして、暴力を抑制するために暴力を使うというパラドックス以外に道徳的な手段はないと、多くの人が主張します。しかし、すべての私たちの宗教は、これだけでは十分ではないと教えています。昔のユダヤ教の知恵は「誰が偉大な英雄であろう？　自分の敵を友にしてしまう者である」と明言しています。

暴力的な過激主義と戦うために、私たちは努力を結集して疎外の沼を排水しなければなりません。そこには、紛争のハマダラ蚊（経済的政治的疎外等）が繁殖しているのです。しかし、示されているように、そのような物質的政治的要因よりも、現在、社会に脅威を与えている疎外の根源には、もっと多くのものがあります。拒否の心理が、疎外のすべての根源のなかで最も強力なものであることは明白です。この疎外感を無視しては、自分達の救済や霊感を宗教のなかに見出す、ある特定の過激な武装集団のなかに存在する敵意を理解することは不可能です。

とくに若者が、物質的社会的に尊厳を持った生活を送ることができることが重要ですが、個人としても、それぞれのコミュニティの一部としても、より広い社会と積極的に繋がり、社会に対して責任を持っていると感じることが、同様に重要です。

この意味で、諸宗教間のつながりは、重要な役割を果たすことができます。歓待するという価値観は、すべての宗教的伝統の中心です。他者を歓迎するために手を差し伸べることは、コミュニティやそのメンバーに対して、彼らが他のコミュニティから受け入れられ尊敬されているという感覚を与える上で、決定的に重要な役割を果たします。

そして、そのコミュニティから疎外されるのではなく、より広いアイデンティティの範囲に対して彼らが貢献す

ることを可能にします。他者の霊の中核となるアイデンティティに対する尊敬の念を持って、この歓待が行われたとき、非常に大きな影響や重要性を持つことになります。

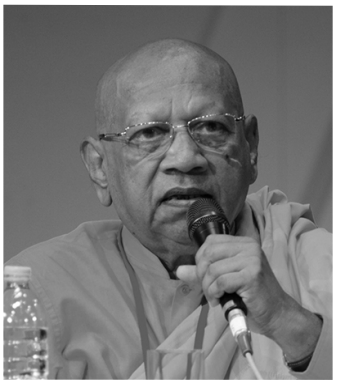
以上、述べましたように、暴力的過激主義に対抗するには、さまざまな手段を用いなければなりません。しかし、さまざまな人々やコミュニティとくに少数派のコミュニティや、異なったコミュニティのなかでの比較的新しく加わった人々が、自分達は本当に受け入れられ、尊重されていると感じられ、そして自分達を広い社会の一部、諸国家共同体の一部、そして宗教的伝統の祝福されたさまざまなモザイクの一部であると見ることができるようにすることが重要なのです。

さまざまな宗教的伝統やコミュニティを積極的に引き込んで、彼らをより広い社会が直面している問題に関わらせることで、疎外、紛争、暴力を防ぐ、重要な役割を果たすことができるのです。そのことで、人々は、自身の宗教的アイデンティティや帰属意識を、社会全体の幸福に建設的に貢献するための手段として見ることができるようになるのです。

杉谷　やはりテロの根源には疎外があるとのご指摘でした。とくに若者がそういうところに落ち込んでいくことが危険なのだ。繋がりの大切さ、いろいろなコミュニティの重要性も指摘されました。具体的なお話でした。

次は、仏教からベランウィラ・ウィマララタナ大僧正様、お願いします。

ウィマララタナ（仏教）



全世界がまるで今もバラバラになりそうな大きな火山の頂上にあって、火山灰を撒き散らし、溶けた溶岩流を噴出しているように見えるのは、紛れもない事実です。私達全員が知り、また見ているように、全世界はひどい混乱のなかにあります。自然災害の発生が急激に増え、その主な原因は自然への人間の不当な介入によるものです。これらの災害は世界のあちこちで起こり、以前よりも頻繁に、また次から次へと起こっています。

この混乱した状態は、新たな脅威のために、生命を脅かすほどに酷くなっており、世界を戦場に変えています。この脅威とは、山火事のように広がる過激な宗教的原理

主義のことです。

それは、思い描く目標を達成する方法として、テロという極めて恐ろしい形を使うことで、ぞっとする様相を呈しています。このテロリストたちの行動により、人々が祖国を離れ、国外に亡命を求めたりするような、他の多くの問題を引き起こしています。その結果、世界中に社会的かつ政治的な波紋が広がっています。

日本の比叡山で開催される宗教サミットでは、この重要な問題を取り上げ、それをテーマとします。

「テロと宗教～暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか～」。確かに、この課題は時宜を得たものであり、この宗教サミットは、この問題を取り上げるのに最もふさわしいフォーラムです。

全世界がこの問題に気づき、注意を向けています。世界中のリーダーがさまざまな方策を採用して、この問題に取り組むための効果的なメカニズムを考え出そうとしています。私個人としては、問題の複雑さや不安定な性質からくる突発性には、注意深く将来を見据えたアプローチが必要だと考えています。

これには、二つの異なったレベルで取り組まなければなりません。一つは政治的レベル、もう一つは宗教的レベルです。この二方向は、互いに支援、信頼しながら協調すべきものです。

政治的権威は、「目には目を」の政策を取りながらテロリズムに対抗し、テロを破壊します。宗教のリーダーは、宗教的レベルでテロに取り組まなければならず、暴力や武器を使う状態に戻してはなりません。宗教的指導者は、刑罰を使うことなく、武器を使わずに問題を解決するように、権威に助言するべきであるとブッダは常に説いています。ブッダは「転輪聖王」にまで、このような助言を与えたのです。

刑罰や武器を使うこともある政治的権威に導かれた狂人的原理主義者たちは、正気に戻って降伏をすることでしょう。効果的な宗教的アプローチは、何も傷つけません。それは和解を促し、人々が安らかに調和して生きられる、より平和な世界の構築に役立つのです。

「世界平和」という目標は、とらえどころがなく、達成がとても困難です。しかし、それはすべての人類にとって、また人間だけでなく他の「生きとし生けるもの」が生存する環境にとっても有益です。世界平和は素晴らしいのです。それが、全世界が平和を叫び、唱え、祈る理由です。そのなかにさまざまな細かい違いがあるにも関わらず、世界平和が必ず追求され確実に達成されるべき

目標であることに異存はありません。

現在の世界の多くの人々の考え方からすると、2017年8月、比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」を開催することは、すべての国の人々に与えられた「大いなる恩恵」といえます。日本宗教代表者会議の構成機関がこの目的を継続的に遂行していることは、複数の宗教が人類に奉仕することをよく示しており、際立った指導能力を発揮していることを雄弁に語っています。

多くの関係者が世界平和の構築に関わっています。そのなかでも、二つの分野が非常に有力で際立っています。すなわち、宗教的分野と政治的分野です。

宗教指導者と政治的権威が共同で貢献していくことは、世界平和の構築に大きな重要性を持っています。この二つの分野が、世界平和という目的のために、合同の行動計画を起草し実行していけば、その共同での取り組みは大きな助けとなるでしょう。

宗教指導者の組織は、圧力団体のようなものとして機能することができ、常に政治的権威に自覚を促します。非宗教的側面に注意を払うだけでなく、宗教的アプローチを巧みにそれらに混ぜ合わせることで、その取り組みをバランスのとれたものにするのです。

現代の世界の流れからすると、宗教は、その宗教内部や異教間での多くの問題に直面します。すべての宗教指導者や団体は、実用的かつ有益な道徳的生き方を信者に強力に深く教え導かなければなりません。混沌とした社会に秩序を持ち込み、偏狭なものに寛容を、分裂したものに統一をもたらし、戦争のあるところに平和を広げ、環境を保全・維持し、環境と調和して生きることが大事です。残念なことに、そうでないことのほうが多く、模範となるような生き方についての貴重な教えは守られていません。科学技術の規制のない誤った発展は、この痛ましい状態に拍車をかけています。

宗教指導者の基本的な責務は、宗教は何よりも平和と調和のメッセージを伝えるものであるということを信者に教えることです。宗教は他の宗教と戦うための武器ではなく、他の宗教の教えを理解し尊重する手段なのです。また、信者の精神や考え方を向上させ、身業（身体）、口業（言葉）、意業（心）の三つすべての振る舞いを制御するためのものです。

宗教指導者は、いかなる宗教的原理主義も容認すべきではないということは、すべての宗教者が遵守しなければならない基本的な徳です。この宗教的原理主義は、今や全世界にとって大きな脅威となることが分かりまし

た。それは、異教間の紛争も作り出し、生命、財産、貴重なものすべての大量破壊に繋がります。いつどこでも、そのような原理主義が起こったときには、その芽を摘み取らなければなりません。宗教的原理主義は、精神的逸脱や宗教の教えの間違った理解の結果だとして、非難されなければなりません。

宗教の教えの誤った理解は非常に致命的で、まさに蛇を誤ってつかむようなものだと、ブッダもはっきり述べています。実際、現在起こっていることからも、宗教の教えの誤った理解が、蛇を誤ってつかむよりも、ずっと恐ろしいことだと明らかに分かります。普通、前者（蛇）は、誤ってつかんだ人だけを傷つけますが、後者（宗教の誤った理解）は無辜の多くの人々を傷つけます。

比叡山宗教サミット30周年記念のような宗教的集いは、宗教の本当の目的を信者の心のなかに植えつけるプラットフォームにならなければなりません。その真の目的とは、すべての人のあいだに調和、平和、統一を育み、分裂した人々のあいだに一体感を作り出し、相互理解を通して争っている仲間たちを和解させることなのです。

杉谷　宗教の誤った解釈が原理主義を生み、そのことを早く摘み取るために、相互理解と一体感を持つことが大事だとのことでした。ありがとうございました。

次は、エマニュエルさん。

エマニュエル（キリスト教）

テロと宗教という二つの単語が同義語として理解され使われることがあまりに多い今日に、それらについて考察する場にお招きいただいたことを光栄に思います。

宗教的暴力や過激主義につながるそうした混同の課題は何なのでしょうか。

私は、そうした課題のうちの少なくとも次の三つについて熟考することをご提案いたします。

今日の世界における宗教的暴力の現実を踏まえて、私たちは宗教と暴力との関係についての考察を続けるべきです。狂信者やテロリストは、賢明な教えや神の命令を嫌悪しています。本人たちは神を信じていると主張するかもしれませんが、彼らは賢明な教えも知らなければ、

高潔な生活も送っていません。従って、彼らは本当に神を信じているわけではないのです。よく言われているように、宗教の名を借りた犯罪は宗教に反する犯罪なのです。

２０１７年４月にアル・アズハル大学で開催された国際平和会議での講演のなかで、バルトロメオス総主教聖下は、次のように述べました。

「イスラム教とテロは同じものではありません。テロはどの宗教とも無関係だからです。だからこそ、諸宗教対話によって、恐怖や疑念を払拭することができるのです。これは平和の実現に向けた中核となるものですが、相互の信頼と尊重の精神の下でしか成り立ちません」。

総主教のお言葉は、２０１６年６月にクレタ島で開催された正教会聖大会議の回勅で述べられた、次の文言をそのまま伝えたものでした。

「正直な異教徒間対話は、相互信頼の発展と、平和と和解の促進に貢献します。当教会は、『天からの平和』を地上でもっと明白に感じられるようにすべく努力しています。真の平和というのは、武力によって成し遂げられるものではなく、『自らの利益を求めない』愛を通じてのみ成し遂げられるのです。信仰の油は、再び新たな憎しみの炎を燃え立たせるためではなく、他者の傷を和らげて治すために使わなければなりません」。

宗教で暴力を正当化することはできません。宗教的な言葉を使ったヘイトスピーチは、人々に対する攻撃であるだけでなく、宗教に対する攻撃でもあります。過激主義者による宗教の皮肉な利用は、私たちが証言すべき普遍的な愛と平和のメッセージに、人為的な制限を設けようとするものです。こうした条件の下で、宗教の自由という基本的権利が次第に否定されてきています。それでもなお、とくに少数派の場合には、宗教の自由は人類の尊厳に根差しているのです。

今日では、人間の尊厳の保護の問題は、現在の移民危機によって課題に直面している、宗教多元主義と密接に関係しています。宗教には、ここで果たすべき主要な役割があります。宗教によって社会的な包みこみおよび正義がどのように促進され得るかを考察することにより、私たちが追求すべきコミットメントが明らかになります。

私は自らのささやかな経験に基づき、宗教活動の行為者および宗教的奉仕活動団体のほうが、より効果的な移民の包みこみを促進することができると考えています。その例を三つご紹介いたします。

第一に、新たな移民が到着したとき、その移民は必ずしも現地語を話せるとは限りません。宗教的奉仕活動団体なら、その移民が新たな状況に馴染めるように支援し、移民に言語講座を受講させることや、あるいは言語講座を提供することさえできます。

第二に、宗教的奉仕活動団体は、他の現地協会に連絡するのを手助けすることもできます。ここでは、宗教が果たすことのできる仲介の役割を強調させていただきたいと思います。だからこそ、宗教団体が、アントニオ・グラムシが「有機的知識人」と呼ぶものを促進することが不可欠なのです。有機的知識人とは、自らの宗教団体と周辺社会との懸け橋を築くことのできる人々を意味します。

第三に、宗教的奉仕活動団体は、移民の出身地の文化と受け入れ社会とのあいだに親和性があることを示す手助けをすることができます。ここが、偏見や先入観に対処するため、および社会的な包みこみを通じて平和を促進するための手段として、私が諸宗教対話に重要性を見出している部分です。そこでは、出会い、話し、交流しようという意欲が必要とされることになります。

別の表現で言うところの異教徒間対話は、他者の人間性を復活させ、それによって人間の尊厳と安全保障を促進することにより、他者をより深く理解するのに貢献するはずです。私たちの返答は包括的でグローバルなものであるべきです。

このことをよく理解するために、私たちはマタイの福音書25章の最後の審判の強烈な寓話を思い出す必要があります。そこでは、イエス・キリストが次のような明白な言葉を発しています。

「わたしが飢えると食べ物を与え、わたしが渇くと飲み物を与え」。

人間の尊厳に対する共通の理解を共有することなく、宗教と環境保護について語ることは不可能です。危機的状況に陥っている世界の目撃者として、私たちは信仰の意味を再発見する必要があります。

一部の人々はグローバル化を非難しています。しかし、こうした現象の背後で、人類は相互に関係し合う人間としての、あるいは私に言わせれば天地万物との関係で結ばれた人間としての、自らの責任に直面するはずです。もし私たちが、神の形に似せて造られた各個人を尊重するのであれば、そして神の創造物のあらゆる小片を尊重するのであれば、私たちはお互いのことも私たちの世界のことも気にかけなければなりません。

環境汚染の生態学的問題は、常に貧困という社会的問題と結び付けられます。それゆえに、生態学的活動はすべて、とりわけ貧困者をはじめとする他の人々に及ぼす影響と効果によって最終的に測定されて、適切に判断されます。

環境問題は、本日の私たちのトピックと密接に関係しています。実際に、気候変動は、仮に現在はまだそうなっていないとしても、近い将来には、地政学的紛争に関連する移民の流れに、ますます大きな影響を及ぼすようになっていくでしょう。

持続可能な発展の課題に対処するためには、私たちは精神的な課題、すなわちライフスタイルの転換の課題にも取り組まなければなりません。

キリスト教の精神性では、転換の精神は、価値と環境の双方の問題に届くと同時に、それを超える存在の転換に対して、徹底的な変化を要求します。現在および将来の隣人への愛が、身勝手さを押さえこみます。宗教信者の集団行動が、世界の指導者やグローバルな意思決定者に圧力をかけることになるでしょう。節制が、過剰消費主義の欲求に対処することになります。共有によって不平等が制限されます。

最終的に、愛が政治的領域と社会的領域を包み込むのです。祈りとコミットメントを通じて、私たちは新しい生活、持続可能で公正で平和な社会の可能性へと導かれることができるのです。

ここでもまた、聖大会議の回勅が、本日の私たちの考察に役立ちます。

「生態学的危機の根源は、精神的および倫理的な、それぞれの人間の心に内在しているものです。こうした危機は、ここ数世紀のあいだに深刻さを増しています。その原因は、強欲さ、貪欲さ、利己主義、より多くを求める飽くなき欲望といった人間の情熱によって、また今や私たちの共有の家である自然環境を大きく脅かしている、そうした情熱がもたらす気候変動のような地球への影響によって引き起こされているさまざまな相違です」。

誠実で実体のある対話は、原理主義や宗教的暴力を回避するための必須条件です。考えられるあらゆるコミュニケーション手段を用いて、いたるところで実践されるべきです。異なる宗教の信者間における対話は、服従ではありません。誠実な対話は、他者の意思や意見に服従することでも、自分のアイデンティティを失うことでもありません。

私たちは、特定の問題について考えや意見を交換し、

対策や解決策をもたらす対等な合意を目指して取り組むための手段として対話を利用することが、現代の私たちの多文化社会における理想的なコミュニケーション形態であることを、世界に思い起こさせるように努めなければなりません。コミュニケーションを取らなければ、私たちはどうやってお互いのことを知ることができるでしょうか。

対話というのは、討論よりも公平で、礼儀正しい会話よりも正直で、議論よりも合意しやすいということを、私たちは心に留めておくべきです。なぜなら、聖ヨハネが自らの福音書に書いているとおり、『はじめに言葉ありき』という神の言があるからです。

これは、主張と質問の均等なバランスを求めている人々同士の関係における共通の理解を構築するために、ともに思案し考察する継続的な方法です。そこでは、すべての関係当事者を尊重し、想定事項を保留し、観察者を観察し、自らの傾聴に耳を傾け、思考を認識し、集団的知性を求め、共通の理解を構築し、可能性を受け入れます。これは、時間、熱心さ、および正直さを要するプロセスです。

私たちが絶えず繰り返して言うべきであるように、宗教指導者である私たちには、徹底的な相互協力を通じて、私たちがまさに神の形であると考えている人間の尊厳を、国内および国際レベルで促進するとともに、神の保護の下で人類を一つの家族にしている愛の絆を再確認することで、恐怖に対抗するという使命があります。

ご清聴いただきありがとうございました。

杉谷　対話の重要性と同時に、人間の尊厳に対する共通の理解は、環境問題にも視野を広げ、公正な社会建設につながるとのお話でした。

次にツェリッチさん。

ツェリッチ（イスラーム）

私は欧州から参りましたイスラム教徒です。正確に申しますと、ボスニア出身のイスラム教徒です。ボスニアは、面積という点では小さな国ですが、宗教史および文化史における重要性という点では大きな国です。

実は私は、宗教を理由とする大虐殺の生き残りです。私がイスラム教を信仰していることから、私にはテロを

非難することも求められています。そして私は、喜んでこの求めに応じたいと思っています。

私は、大虐殺の犠牲者としてのみならず、全能の神アラーの名において主張されている暴力とは、自らの信仰がまったく異なることを明らかにして、宗教的暴力を非難するつもりです。

こうしたことから、私は本日この高尚な善意の集まりにおいて、純粋信仰批判について忌憚のない意見を述べる決意をしております。実際のところ私は、世界的なテロとその宗教との関係について、皆さんと一緒に検討することが、私にとって最も適切であると考えておりました。

しかし、純粋信仰批判の試みというのは、決して信仰を否定する行為ではないということを言わせてください。それどころか、純粋信仰批判は、観念的で内在的な顕現における信仰の力を測ろうという精神的で認知的な努力なのです。

イマヌエル・カントが考えたように、もし純粋理性批判が「私は何を知ることができるか」「私に何ができるか」「私は何を期待することができるか」といった問いによって導かれるのであれば、純粋信仰批判は「私はどうすれば信じられるか」「私はどのように行動すればよいか」「私はどうすれば救われるか」といった問いによって導かれます。

実際には、純粋信仰批判は、クルアーンの明らかな警告「『信じます、信じます』と言いさえすれば、もうそれで試みられることもなかろうと考えておるのか、人間どもは」に追随しているのです。

私はイスラム教徒として、ドイツの哲学者イマヌエル・カント（１７２４～１８０４年）よりもずっと前に、イスラム教徒の哲学者ガザーリー（１０５８～１１１１年）が、人間の心というのは、自らに対して高いモラルの責務を命じて、自分自身の裁判官と陪審員になるために、自己可測性の力を得ようと努力するものである、ということを実証していたことを指摘させていただきたいと思います。さらに言えば、ガザーリーは、人間の心は地球上における神の尺度かもしれないとほのめかしました。

しかし、信仰は心ではありません。信仰というのは心を上回るものであり、従って心は結局のところ、信仰の尺度にはなり得ないのです。確かに、心は信仰さえも含めたあらゆるものの尺度となることを求められていますが、心が決定的に信仰を測定することはできません。信仰がそれ自身を測定することは、もちろんできません。純粋信仰というのは、その価値の観念的尺度によって左

右されます。これはつまり、信仰は、必ずしも「今」「この場に」いるわけではない、より高位の、というよりは最高位の裁判官の尺度を受け入れるということです。従って、私たち心ある人間は、今この場でお互いの信仰についてお互いに判断し合うべきではありません。

「アッラーは審判の日に、あなたがたがそれについて相違したことに関し、あなたがたを裁かれる」（クルアーン）。従って、心の行為は信仰を超えません。信仰は心よりも高位にあるものなのですが、これこそまさに心があまり理解していないことなのです。心は、自らを信仰の最終的尺度に位置付けることを望んでいますが、心の力が信仰の力に依存しているため、そうはなり得ません。心は、地球上におけるその終わりに関しては信仰の優位性を感じています。なぜなら、信仰は、人間にとって死後の世界における唯一の救いであり続けているからです。

ご存じのとおり、人間は、信仰の観念的力が顕現化される元になる、心の力、精神の力、手の力という三つの根本的な力を持っています。心には人間の信仰の力があり、精神には人間の思考の力があり、手には人間の行動の力があります。これら三つの力が一緒になって、一つの「超人的な力」、すなわち神の純粋信仰となります。人間の精神的、心理的、および物理的存在の全体において、これら三つの力のなかのいずれかが不足すると、人間の成功や救済が不安定化します。純粋信仰批判は、これら三つの力のそれぞれについての問いなのです。しかし、これよりもさらに重要なのは、精神と根本的な人間の魂とからなる観念的な神性の調和された顕現としての、完全なる「超人的な力」についての問いです。

魂というのは、神の御霊の根から生じています。従って、人間の魂というのは神の御霊が反映されたものなのです。「かれ（人間）を均整にし、かれの精霊を吹き込まれ」（クルアーン）。しかし、神の御霊を起源としていても、人間の魂は神の御霊と同じではありません。リンゴの果実はリンゴの木の根を起源としていますが、リンゴの木の根と同じではありません。同様に、リンゴの木の根がなくてはリンゴの果実は存在しないように、神の御霊である人間の魂の根がなくては人間の魂は存在しません。純粋信仰というのは、人間の「心」、人間の「精神」、人間の「手」に作用する「神の御霊」なのです。心の力は信仰の力であり、精神の力は理性の力であり、手の力は道徳の力です。心は正統や異端の力を隠し、精神は知識や無知の力を隠し、手は正義や不正義の力を隠します。

イスラム教の宇宙論によれば、人間は大地（turāb）で、

天使は光（nūr）で、悪魔は炎（nār）です。大地の上には光と炎があり、光は照らされ炎は燃やされます。人間は大地から生まれ、大地の上にいて大地の下にいます。人間は、照らされる天使の光と、燃やされる悪魔の炎の統合体なのです。天使の光は人間の精神で、悪魔の炎は人間の情熱です。人間は、光が照らされ炎が燃やされる大地であり、天使は自らの光で人間の精神に明かりを灯し、一方で悪魔は自らの炎で人間の情熱を燃え立たせます。人間は、天使の光と悪魔の炎のあいだの大地です。

一見したところ、これは単なる言葉遊びのようですが、実は光と炎は人間が辿る二つの道、つまり光の道と炎の道なのです。光の道では、人間は前後を含めた自分の周囲全体を見渡すことができ、炎の道では、目の前の炎と背後の暗闇および灰しか見えません。炎のほうが光よりも強力かつ破壊的であり、炎は刺激的で恐ろしいものです。光は、謙虚で、穏やかで、予測可能で、ときとして退屈なものですが、決して人間に害を及ぼそうとせず、決して人間を暗闇のなかに取り残さず、また灰をまき散らすこともありません。

なぜ人間が炎から創られていないことを悔やんでいるのか、私には決して理解できないでしょう。なぜなら、もし人間がそれを悔やんでいなければ、悪魔が「私は炎から創られたのに対して、人間は粘土から創られたのだから、私のほうが人間よりも優れているのだ」と言って、人種差別的発言で人間を怒らせることはなかったと思われるからです。また私は、なぜ人間は悪魔のまねをするのが好きなのかも、決して理解できないでしょう。悪魔は、神から人間の前ではひれ伏すように指示されたために、ほかの誰よりも人間を憎んでいるのです。さらに言えば、私はなぜ人間が悪魔の命令に耳を傾けるのか不思議に思います。悪魔は人間を火のなかに押し込み、また自分を光へと導いてくれる神の命令に耳を傾けようとしないのにです。

そうです、私がここで理解していただきたいのはこうした真実なのです。つまり、人間は命令を受け入れざるを得ないということです。実際には、命令は人間の運命なのです。それは人間の自立的性質でもなければ自主的意志でもなく、むしろ人間の性質と人間の意思こそが、命令でもあり、これが人間の存在の本質を定義しているのです。そして人間の存在の本質はその知識の力です。それは遺伝的なものではなく、いかなる男性も女性も、最初は読み、学び、自分自身が持つ独自の知識を認識するようになるところから始めます。人間は一つ、または複数の命令を自由に選ぶことはできますが、まったく命

令なしで生きることはできません。

神の信仰という命令としての純粋信仰の考え方は、真偽混在という可能性を排除することが最も困難なものです。純粋な嘘というのは明白で、人間はそれからわが身を守ることができ、純粋な真実というのは純粋で、人間は容易にそれに同意することができます。しかし、真偽混在というのは曖昧かつ不明瞭で、そのため人間がそれから守られることは困難です。だからこそ私たちには、真偽混在との闘い方を学ぶことのできる「純粋信仰批判」が必要なのです。

真偽混在というのは、現在全世界で私たちのイスラム教徒社会を最も苦しめている現象です。イスラム教徒の学者は、そうした現象に細心の注意を払わなければなりません。真偽混在の犠牲者にならないためだけでなく、イスラム教徒の学者自身が意図的もしくは無意識に、私利私欲のために真偽混在の情報を生成してしまわないようにするためにもです。現在、イスラム教徒の学者は、真偽混在の罠に陥る、かつてないほど強い誘惑に駆られています。半分の真実と半分の嘘のどちらが悪いのかは分かりませんが、半分の真実のほうがより有害で危険です。「真偽混在は殺人よりも悪い」（「al-fitnetu ašeddu min al-qatli」）と、理由もなく神聖なクルアーンに書かれたりはしません。イスラム勢力下のアンダルス地域で学んだダンテ・アリギエーリでさえ、裏切り者を『神曲』地獄篇の第9層の悪魔のすぐ隣に配置したのに対して、殺人者は第8層に残されました。真偽混在のときには「純粋な信仰」はもとより「清い心」も保持しておくことが不可欠です。そしてこれが、ここ京都での本日の私の主要なメッセージです。

杉谷　非常に哲学的な発想でみずみずしいお話でした。真偽の混在が私の行く道に大きな問題を投げかけている。そういうことなのかと思いました。

最後にムアンマールさん。

ムアンマール（諸宗教対話組織）

この美しく穏やかな聖地で、私たちはすべての人々のために平和を促す考えや言葉、祈りを一つにします。

本日、私たちは、暴力的過激主義を追放するための役割について考えます。過激主義がもたらす悲

劇のことを考えると、希望を失う人々もいるでしょう。この会合で私たちは決して希望を失わないという約束を交わします。私たちは平和を実現するまで、決して休むことはありません。

私たちが過激主義者やテロリストと共有しているこの世界は、今やテクノロジーによって形作られており、倫理や共感によって形作られるものではなくなりつつあります。この精神の貧困が争いの増加と関係していると思います。

私たちはテクノロジーによってネットワークに接続されていますが、つながってはいません。世界中に広がるネットワークを生み出した技術は、憎しみを拡散し、分断を促し、偏見を奨励し、孤立を生むためにも用いられています。私たちは電子的に結ばれていますが、感情的に、あるいは精神的には結ばれていません。

他人に対する恐怖や偏見を克服するために役立つ技術も存在します。それは対話と教育です。対話は互いの信頼を築くために役立ちます。教育は無知を克服し、固定観念を知識で置き換えるために役立ちます。互いのことを知れば、互いのアイデンティティや伝統を尊重することができます。私たちは互いを尊重し合うとき、互いを守り、争いを避けることができるのです。

この会合は、すべての人々に他者との対話の価値を示します。私たちがこの場に集まったのは、理解が過激主義を消滅させると知っているからです。

私は対話を専門としています。本日は、世界をより良くするための諸宗教間の対話を推進する国際団体、国際対話センターを代表して出席しています。私たちには、過激主義をなくそうとする宗教指導者を支援するというビジョンがあります。

私は宗教指導者、政策立案者、そして市民社会が協力すれば、世界的な対話と教育の基盤を構築できると信じています。世界ではおよそ50億の人々が宗教を信仰しています。対話を通じて他者に対する理解や共感が目覚めれば、世界の人口の80％が過激主義を防ぐことができます。

当然ながら、これは長期的なビジョンであり、成功させるには共有されなくてはならないビジョンであることはわかっています。

このビジョンとは反対に、現在の過激主義者は力を得て社会を破壊するためにテロを推奨しています。私たちは社会の一体性と共通の市民性を守るために、一つにまとまらなくてはなりません。

過激主義者は多くの人々の認識を操作して、宗教の教

えが殺人や暴力を正当化できると信じ込ませています。私たちは、過激主義者が嘘を言っていると人々に教えなくてはなりません。すべての宗教が、慈悲、寛容、そして他者に対する愛を重んじています。すべての宗教が、すべての人々の平和を求めています。

過激主義やテロリズムを防ぐために、対話は何ができるでしょうか。

必要なのは持続可能な解決策であり、すべての利害関係者の関与が必要です。喜ばしいことに、国連や国際社会の多くの人々が、宗教指導者と政策立案者には共通の理念があることを現在では認識しています。両者とも、平和的な共存を守る必要があるのです。両者とも、過激主義者の憎しみや暴力というウィルスに対する社会の抵抗力を醸成する必要があるのです。

宗教指導者と政策立案者はともに過激主義に立ち向かうことができます。両者がともにあれば、対話と教育の基盤を構築して、すべての人々に社会のなかで他者を理解し尊重する機会を与えることができます。

一例として、私たちはおよそ2年前に、「宗教指導者および関係者が残虐な犯罪につながりうる暴力への扇動を防止しこれに対抗するための行動計画」の策定に向けて国連との協力を始めました。この計画は今月ニューヨークにて、国連事務総長により立ち上げられました。これには70ヵ国以上の宗教指導者200名以上の関与を得ることができました。

この計画は宗教指導者や、彼らが必要とする社会のパートナーを一つにまとめ、暴力につながりうる過激主義に対抗するものです。彼らは礼拝の場や公共の場、ソーシャルメディアにおけるヘイトスピーチに反対します。また、他の宗教の信者や多様性の尊重を推進するための教育を提供します。

杉谷　科学技術のおかげで、ネットワークで繋がっているようでも、心は繋がっていない。そのことによって新たな問題が生まれている。しかし、過激主義に対して、対話を通じていろいろな実践が行われている。解決には未来があるとのことでした。ありがとうございました。

●

杉谷　それでは、追加のご意見を承ります。

テロのなかでもホームグラウンドテロ、いわゆるその国で育ったテロリストのことです。外国からきてテロを起こす人が少なくないといわれていました。その根底には差別があるといわれますが、どういう解決策があるのか。そのあたりから。

トルキスターニさん、どうぞ。

トルキスターニ（イスラーム）

テロリストは宗教なんか持っていません。そのような人達は、我々が本当に戦う相手ではないのです。世界ムスリム連盟は、大いに努力して，イスラムだけではなく人類すべてに尽くしていこうとしています。私達もアッシジのフランシスコの精神を引き継いで、仕事をしてきています。バネリストの何人かも言及していましたが、私達はすべての信者の面倒をみる必要があるのです。メディアも協力して平和を弘めていく必要があります。

宗教の意味において、平和を弘めるとはテロを撲滅するということです。ムスリム連盟は、あらゆるプログラムでこの仕事をしています。反テロのセンターをマレーシアに作り、サウジにも作りました。これからも皆さんとともに頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

杉谷　ありがとうございます。ギクソットさんどうぞ。

ギクソット（キリスト教）

私達の最大の敵は恐怖なのです。対話に対する敵は恐怖です。互いを理解する上において、恐れがあってはなりません。攻められるのではないかという恐怖があってはなりません。どこから来たのであれ、いつであれ、どんな道をたどってきたのであれ、テロと暴力は宗教と無関係です。

我々は将来に対する責任があります。そのためには教育が必要です。教育によって無知から離れることが大事です。我々が、完全に宗教的価値を生かしきれてないから暴力が入り込むのです。それは無知だからです。教育を通じてこのような問題から逃れられる可能性があります。

宗教と過激主義、暴力は関係ありません。関係あるように見せかけているのは誤解です。我々の世代で、このことを解決しなくてはなりません。

杉谷　続いて、ローゼン先生。

ローゼン（ユダヤ教）

我々は互いに異なった伝統を持っていますが、同時にそれぞれに持つ祈りの力を信じています。我々のあいだには友愛があり、諸宗教のあいだには連帯と友情があります。我々はお互いを受け止め、他者が悪魔であるかのような受け止め方はしません。これは昔、他宗教に持っ

ていたイメージとまったく違います。他の宗教は邪悪なものとして見られていました。そのイメージからは脱却しています。

テレビや新聞は悪い記事で埋まっています。センセーショナルに。しかし、我々はともに認め合い、強くなってゆきます。分裂は宗教と宗教とにあるのではなく、ある宗教の内部にあるのではないでしょうか。絶縁する働きは内部にあります。伝統宗教のなかには個別主義になった人がたくさんいます。

新しい現実、新しいリアリティに目覚めてゆく必要があります。多くのものが我々を寿(ことほ)いでいます。新しい人類の流れがあり、協調があり対話があります。以前、歴史に何があったにせよ、私達は楽観しています。悲観だけということはありませんし、また実際に現実的なのは悲観主義者たちなのです。悲観主義の底の底から楽観主義が出てきます。過去に大きな悲劇、苦しみがあったにせよ、より大きなスケールで祝うべき歓びがやってくるのです。

杉谷　ウィマララタナ大僧正、よろしくお願いします。

ウィマララタナ（仏教）

仏教の実践方法から捉えますと、テロや原理主義と呼ばれるものには原因があります。宗教の誤った解釈だけが原因ではありません。政治も大きな役割を果たしているでしょう。テロリストや原理主義者を、政治指導者が自らの目的のために利用しているケースがあります。世界の政治指導者たちは、本当の犯罪者が誰なのか言わないことがよくあります。根本原因を見つけたならば、それを取り除いて解決策を見つけることが必要です。

仏陀は「四諦」を教えています。苦諦、集諦、滅諦、道諦のことです。これに従っていけば、力強い解決に至ることができるでしょうし、人類に大きな貢献ができるでしょう。

杉谷　エマニュエルさん、どうぞ。

エマニュエル（キリスト教）

私達の主張していることが正しいのなら、なぜ世界は良くならないのでしょうか。我々の主張を、もっと一般社会に広める必要があります。そして世界を変え、よりよい未来を開く必要があります。テロや過激主義に対抗するには、そうした大きな広がりが必要です。そのため

には、我々が主張してきたことをきちんと実践することが何より大事です。実践、実践、実践です。よりよい世界のために実践することが求められているのです。

杉谷　ありがとうございました。次はツェリッチさん。

ツェリッチ（イスラーム）

いろんな人が声を合わせて力強く語られたことを、嬉しくありがたく思います。

私は戦争と平和を体験しました。そして、そのような体験をもう誰にもして欲しくないと思っています。私はその体験から学んだ事が二つあります。

一つは、不寛容と暴力は弱さの表れであり、寛容と平和とは力の表れであるということです。不寛容な人は臆病で弱い人です。

二つ目は、法律は本のなかに書いてありますが、実施されるのは人の心のなかにおいてということです。だから人の心に働きかける必要があります。戦争や暴力は銃のなかにあるのではなく、それを使う人の頭のなかにあります。

我々は混乱した社会のなかで暮らしていますが、人と人との信頼作りに取り組む必要があります。問題はどこまで相手を信用しているかです。宗教者同士ではありません。友人、子ども、親との関係においてです。我々は信頼の欠如という危機にあります。同じ部屋のなかで他人と共存できない人が多い。人よりもペットとともにいたいという人が増えています。

テロリスト達だって自分たちの成功を祈ります。神はより誠実な祈りに耳を傾けられます。相手に慈悲を注ぎ、誠意ある祈りを行い、互いの信頼関係を取り戻す必要があります。信頼こそ、恐れを克服するカギなのです。

杉谷　それでは最後にムアンマールさんに。

ムアンマール（諸宗教対話組織）

今、私達は宗教協力の革命を目の当たりにしています。宗教対話のセンターは１９９０年では世界に50ほどでした。今は４７０あります。また過激主義と闘うセンターもあります。それでも充分とはいえませんが。

世界には政治とメディアと宗教があります。それぞれをうまく繋ぐことができないと失敗します。それに私達は頭でっかちというか、理想主義に傾いているように思います。それを実践主義に戻す必要があります。

私達は2日前に国連と協定を結びました。それは宗

教間対話をヘイトスピーチに生かすという取り決めです。暴力過激主義に対して宗教者の役割が認められたのです。この部屋のなかだけで話し合うのではなく、世界中津々浦々まで我々のメッセージを広げる必要があります。メディアや政治の関与も必要です。政党は恐怖を煽る傾向があります。選挙が近づくと政治は公約を言いますが、その前に我々が働きかける必要があると思います。

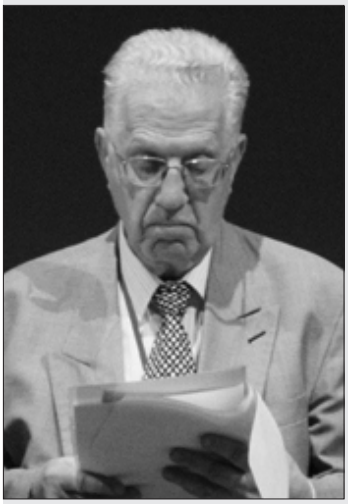
杉谷　皆様、ありがとうございました。

時間を守り紳士的に運営していただきましたことに感謝申し上げ、これで今回のシンポジウムを終わります。

ありがとうございました。（拍手）

緊急提言

シリアからのメッセージ



ファローク・アクビック名誉教授（シリア）

人類は過去２世紀の間に多くの分野で偉大な科学的発展を遂げ、私たちは祖先の絶望的な苦しみから程遠い地上の楽園で生きることが可能になりました。

しかし同時に、人類の道徳や価値観は急激に悪化し、戦争が起こって数千万という無辜の命が刈り取られています。貧困や貧しい人々も大幅に増えています。麻薬、武器、ポルノの取引、そして世界の腐敗が隆盛を極め、世界の資源の最も重要な要素となっています。

これらはすべて、人類が力や政治的目的、金銭的利益のために、道徳的な価値観や行動を捨て去ったことが原因です。

私たちは、日本やアメリカ、北極から南極に至るまでのすべての人々に共通する人道的価値観に基づいた国際的組織を強く必要としていると、固く信じています。

価値観を広める団体の活動を促し、価値観を支えるような組織、国、人が私たちには必要です。

これは、人道的価値観や慈悲を支持するイスラムのメッセージの一部です。その最も重要な柱は、このメッセージが日の目を見るようにするための、全人類による協力です。

神が預言者ムハンマドに伝えられたコーランには、次のような一節があります。

「我々はあなたを人類に対する慈悲としての役割を控えるために遣わしたのではない」

他の一節には「言いなさい、『主は私を正しい道に導いてくれた。アブラハムの善き宗教に』」とあります。

さらに、「正しさと神への畏れの下に協力しなさい。不道徳や敵意の下に協力してはならない」とあります。

慈悲や人道的価値観を世界に広めるというイスラムのこの教えやメッセージを知れば、現代の悪の唱道者が、悪しき愚かな人々という道具を使って、第一に価値観を否定するために、第二に腐敗を拡大させるためにメディア戦争を仕掛けている理由に気づくことができます。

私は献身的な人々にお願いしたいと思います。価値観を守るために立ち上がり、あらゆる場所のあらゆる人間を、その存在を脅かすような迫りくる危険から守ってください。

私は祈りを捧げます。私たちのこの会合が、善の力を集結させ、その力に活気を与えて目標達成への道を歩ませるための一歩となりますように。

私の話は、再度この言葉で締めくくりたいと思います。

平和と神の慈悲と祝福が、すべての皆様にありますように。

比叡山宗教サミット30周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

分科会

分科会1：核廃絶と原子力問題を考える
分科会2：貧困の追放と教育の普及

平成29年8月4日（金）国立京都国際会館

分科会1

核廃絶と原子力問題を考える

進行役……**田中朋清師**
日本宗教代表者会議会議部次長

コーディネーター　**黒住宗道師**
日本宗教代表者会議常任副委員長

基調発題……**杉野恭一師**
世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）国際副事務総長

パネリスト……

アンデシュ・ウェジリド師
世界教会協議会（ＷＣＣ）ヨーロッパ総幹事（キリスト教）

髙見三明師
日本カトリック司教協議会会長（キリスト教）

戸松義晴師
全日本仏教会理事（仏教）

ペニエル・ラジクマール師
世界教会協議会（ＷＣＣ）プログラム部長（キリスト教）

春　光師
韓国仏教宗団協議会上席副会長（仏教）

田中（進行役）　これより分科会を進めてまいります。

本日、司会進行をつとめます日本宗教代表者会議会議部次長・田中朋清です。

それではコーディネーターの日本宗教代表者会議常任副委員長の黒住宗道先生、よろしくお願い申し上げます。

黒住（コーディネーター）　本分科会のテーマは「核廃絶と原子力問題を考える」であります。重要かつ深刻なテーマであり、限られた時間で簡単に解決ができるようなものではありませんが、宗教者としてどのように発信できるかを、ともどもに分かち合いたいと思います。

先月、採択されました核兵器禁止条約につきましては、120ヵ国以上で採択され、「ヒバクシャ」という文言も盛り込まれ、希望の光を見いだす思いもしましたが、日本を含む不参加もあり今を迎えています。同時に不穏な動きのある北朝鮮の問題について我々はどうするのか。本日の基調発題は世界宗教者平和会議（WCRP）国際副事務総長の杉野恭一様です。よろしくお願いします。

基調発題――杉野恭一（WCRP）

I 原子力と核兵器――安全と抑止力という神話の恐ろしい類似点

私たちが今結集している国日本は、人類史上初めて核兵器が広島・長崎で使用され、福島において破滅的な原発事故が発生し、多くの人々の生命が奪われ、生活が破壊された場所である。原子力と核兵器には何の関係もないと考える人もいるが、これら二つには恐ろしい類似点がある。

福島原発事故によって、日本は「安全神話」を再考せざるを得なくなった。同様に、核兵器に関して、国連軍縮研究所は、核抑止の「運が尽きた」ときには、「破局的」な結末をもたらすであろうと、偶発的・故意の核兵器使用による甚大なリスクを強調している。

昨年7月に二つの出来事が相次いで起きたことで、核

兵器事故のリスクがより現実的なものとなった。第一は、英国の原子力潜水艦がジブラルタル沖で商船と衝突事故を起こしたことである。第二は、トルコで起きたクーデター未遂で、NATO最大の核兵器貯蔵施設のあるインジルリク空軍基地で電力供給が止められ、封鎖されたことである。

国連軍縮研究所の報告では、核保有国間の不和が、こうした核兵器による偶発的あるいは故意の事故のリスクを高める一因であるとも指摘している。また、サイバー戦争やハッキングの増加により、核兵器システムの技術的脆弱性が、国家やテロリストグループから狙われているとの報告がなされている。さらには、「核抑止が機能するのは、もはやそれが機能しないことが明らかになるまでであろう。リスクは内在しており、運が尽きれば壊滅的な結果になる」と警鐘をならしている。

北朝鮮およびカシミールをめぐって係争中のインド・パキスタンでは、核抑止論が破滅する最大の危機に直面している。北朝鮮は、さまざまな国家や国際機関による厳しい制裁を受けているにも関わらず、核兵器開発実験を継続している。領土係争中のカシミールでは、パキスタンが核搭載可能な巡航ミサイルを潜水艦から発射する実験に初めて成功し、危機が高まっている。また、2014年のロシアのクリミア編入以来、西欧諸国とロシア間の緊張が高まっている。プーチン大統領は、十分な脅威を感じた際には、ロシアが核兵器を使用すると主張してきた。

〈核兵器と環境〉

国連気候変動に関する政府間パネルにより行われたコンピューター・モデリング・プログラムによって明らかとなったのは、限られた地域における紛争による核兵器使用であっても、農業に壊滅的な影響があり、地球全体の食糧供給を脅かし、結果として最大10億人が餓死しうると予測している。

〈核兵器と持続可能な開発〉

保健・社会保障費の予算緊縮や大幅な削減がなされる一方で、年間1000億米ドルが核兵器システムに費やされている。例えば、隔年の国連通常予算は51億ドルであるが、それは全世界で年間核兵器に使用される費用の5%に過ぎない。このような核兵器維持に必要な支出は、国家や国際機関が対応すべき経済的・社会的ニーズと矛盾している。

Ⅱ核兵器禁止条約：二つの世界観の衝突

核兵器禁止条約に先立つ交渉で、国際社会が二つの異

なる世界観とそれに伴う政策に分断されていることが明らかになった。

〈一つの世界観：核兵器禁止条約の支持国〉

2017年7月7日、ニューヨークの国連において、120ヵ国以上が賛同し、核兵器を禁止する初の国際条約が採択された。国連加盟国のおよそ70％以上が条約交渉に参加し、オランダの反対、シンガポールの棄権があったものの、122ヵ国が賛成し、採択された。

同条約の禁止対象は、締約国の核兵器の開発、実験、製造、保有、使用や使用の威嚇の禁止など広範囲に及ぶ。また、締約国の核兵器移譲・受領を禁止する。さらに同条約では、核保有国が核兵器関連施設を廃棄し、核兵器廃絶の約束を履行するプロセスも規定している。

ヒバクシャ、市民団体、首長、議員、宗教コミュニティらの長年の粘り強い努力によって、条約の前文にいくつかの重要な条項が盛り込まれた。

①核兵器の使用がもたらす破局的な人道上の結末に憂慮し、ヒバクシャが受けた「受け入れ難い苦痛と危害に留意」する。

②核兵器の全廃は、「核兵器がいかなる状況においても二度と使用されないことを保証する唯一の方法である」。

③この条約は、ヒバクシャ、政治家、市民団体とともに、「人間性の原則」と「公共の良心」を推進する上での宗教指導者の役割を強調している。

本条約は、核兵器の保有および使用を国際法で禁ずる歴史的な規範宣言である。生物兵器、化学兵器、地雷、クラスター爆弾を禁止する条約によって、かつて容認されていた兵器が、普遍的ではないにしろ、現在では幅広く非難されている。それが、核兵器禁止条約の支持者が追求する結果である。この条約によって、時間をかけて、核兵器がさらに非合法化され、使用を禁止する法的・政治的規範が強まると一部専門家は予測する。

〈もう一つの世界観：核兵器禁止条約の反対国〉

核兵器禁止条約に反対し、核抑止論を支持する国々は、まさに核抑止が70年以上の間、悲惨な世界戦争を回避することに役立ってきたと主張する。

9ヵ国の核保有国（アメリカ、ロシア、イギリス、中国、フランス、インド、パキスタン、北朝鮮、イスラエル）は、その他のNATO加盟国とともに、核兵器禁止条約の交渉に不参加であった。ヨーロッパの5ヵ国がNATOの「核兵器共有協定」の一環としてアメリカの核兵器を自国に配備している。また日本を含め20ヵ国以上が安全保障のためにアメリカの核の傘の中にあると主張して

いる。

7月7日、核兵器禁止条約が採択された直後に発表された共同声明において、アメリカ、イギリス、フランスは「我々は、署名・批准はしないし、条約締約国になる意志はない」と明言した。また核兵器禁止条約は、「国際的な安全保障の環境を明らかに無視している」として、条約に参加する余地を否定した。日本政府も同様の見解を示している。

核兵器禁止条約に対する大きな懸念として、核保有国ならびに核の傘にある国々は、本条約が北朝鮮による核開発の深刻な脅威への解決策を与えるものではないと指摘する。北朝鮮は、大陸間弾道ミサイルの二回目の実験を2017年7月28日に行ったと発表した。専門家によると、すでにニューヨークやワシントンまで攻撃射程に入ったのではないかとされている。また北朝鮮は、2006年から5度の核実験を行っており、6度目の実験の準備中である。米英仏共同声明は、核兵器の禁止は、核抑止を未だ必要とする安全保障上の課題への対応に資するものではないことを強調している。「核兵器禁止条約は、核兵器一つを排除することも、いかなる国の安全保障、国際的平和・安全の強化にもならない」と結論付けた。

核保有国および同盟国は、核兵器を禁止して北朝鮮による攻撃のリスクを高めるよりも、1968年にほぼすべての国が署名した核兵器不拡散条約（NPT）の強化を求めている。この条約は、米露英仏中5ヵ国の「核兵器国」以外の諸国の核兵器開発を防ぐものである。その代わりに、5大国は、核軍縮へ踏み出し、非核兵器国のエネルギー供給を目的とした核技術の利用を約束してきた。その一方で、核兵器禁止条約の支持国からすると、核兵器国は核軍縮へ踏み出すことがなく、NPTの条項に違反していると非難する。

さらに、これらの核兵器国は、核兵器を現代化、最新化させている。ストックホルム国際平和研究所によると、核の威力を維持し、包括的に強化することを目指したアメリカの核兵器現代化プロジェクトでは、今後30年で1兆ドルか必要とされる。イギリス政府もまた、540億ドルの費用が見込まれる新たな原子力潜水艦の建造を決定した。こうした試みに対して、核兵器禁止条約の支持国は、核兵器現代化、最新化計画は、核軍縮の努力を求めるNPTの条項に違反していると主張している。

Ⅲ日本の果たすべき特別な役割と世界の宗教コミュニティの責任

〈規範的、パストラルな行動を通して 核兵器廃絶への

架け橋に〉

日本政府は、核兵器保有国やいわゆる核の傘下の国々とともに、核兵器禁止条約の交渉不参加を決めた。この決定は、ヒバクシャや日本の市民団体を深く失望させた。

前述したように、核兵器不拡散条約の下で締約国は、核軍縮を目指して「誠意をもって交渉する」ことが求められている。核兵器禁止条約は、核保有国がこうした核軍縮の約束を果たせずにいることへの不満の高まりの表れでもあった。

二つの異なる世界観とそれに伴う政策における対立を乗り越えるには、日本のような国が果たすべき役割の重要性は明確となってきた。それは、核保有国、核の傘の下にあるとされる国々、そして核兵器禁止条約に賛同した国々の架け橋となり、核兵器廃絶に向けた建設的な取り組みを開発することである。

〈「規範的」「パストラル」なアプローチ〉

宗教的、倫理的議論は二つのレベルで展開する。規範的レベルと、パストラル（信者や個別な事柄、状況に対する支援や指導）レベルである。ユダヤ教の例で言うと、『十戒』のひとつに、「人を殺すなかれ」とあるが、例外を認めていない。不都合が生じた時や特定の状況を除いて殺人をしてはいけない、とは言わず、絶対的に殺人を認めていない。

しかし、多くの宗教において例外が存在する。例えば、非常に限られた状況下における自己防衛の際に、殺人は不本意ながらもやむを得ず擁護されることもあると認識されてきた。従って、道徳的矛盾があっても、いわば「許されて」いる。ここで重要なのは、いわゆるパストラルなレベルは決して規範とはならないということである。例外それ自体が「善」として規範にされることはない。「殺すなかれ」という絶対的な規範は、すべての状況に適用される。従って、殺人は、たとえ悲劇的にも正当化されることがあったとしても、決して善ではなく、常に道徳的、倫理的過ちである。

一部の伝統宗教には、核保有国が積極的に核廃絶に向けた取り組みを遂行することを条件に、消極的、制限的、一時的に核抑止を黙認するものもある。重要なのは、核抑止はそれ自体が善ではない。規範にはなりえない。それは客観的、道義的に秩序を乱している。

核兵器禁止条約に反対する諸国による現在の安全保障論は、核抑止が実際には道義的に極めて異常であっても、それを事実上の規範として示している。核軍縮に対する核兵器国の無行動は、核抑止を事実上の規範にしているも同然である。これは、倫理的無秩序である。

規範的レベルにおいては、核兵器の非合法性という国際的規範を確固たるものにするために、我々は宗教コミュニティをさらに参画させ、ヒバクシャ、市民団体、議員、首長、その他と協働して、新たに採択された核兵器禁止条約の署名、批准を促進する必要があろう。それと同時に、NPTなど既存の法的枠組みのもとで、核保有国が核軍縮のための義務を果たすべく働きかけることが必要である。

その一方で、我々の最終目標を達成するために、パストラルなアプローチ（仏教では「方便」と呼ぶかもしれない）を用いる必要がある。以下は、その重要な具体的ステップである。

世界の諸宗教コミュニティは、

1) 2018年に開催される国連ハイレベル会合において、核兵器国および同盟国、核兵器禁止条約を支持した120以上の諸国を戦略的に結集し、核軍縮に向けて相互に合意できる具体的なステップを展開する。

2) 抑止論に基づく現在の安全保障のパラダイムに挑戦する。第一に、レリジョンズ・フォー・ピース第8回世界大会で採択された「Shared Security（支え合う安全保障）」の概念を促進する。この概念は2006年に、ここ国立京都国際会館で開催された同大会において、8000名以上の諸宗教指導者によって採択された。第二に、国連設立および広島・長崎原爆70周年で宗教指導者、議員、首長による共同声明で示された「Common Security（共通安全保障）」の重要性を促進する。元国際司法裁判所副所長のクリストファー・ウィラマントリー判事は、今年1月に亡くなる前の公の場における最後の声明となったレリジョンズ・フォー・ピース特別会合へのメッセージの中で、「現在の安全保障の概念は、我々を支配する短期的な視点に突き動かされている。私たちは、世界の宗教がもつ智慧の宝庫から学ぶ必要がある。」と述べられた。

3) 核兵器禁止条約およびその他の既存の法的規範を宗教者および一般の教育手段として活用する。核軍縮にむけて、特に国家、地域、グローバルなレベルでの青年の動員、参加に重点を置く。

4) 複数の関係者が参画する各界・各層とのパートナーシップを進める。とりわけ、「人間性の原則」や「公共の良心」の提唱者として、国民を代表する宗教指導者・議員・首長との間で、戦略的、行動志向のパートナーシップを強化する。

5) 南北朝鮮、中国、日本、アメリカ、ロシアにおいて、

諸宗教間やその他のステークホールダー間の外交、対話、信頼醸成を継続、強化する。その際に、レリジョンズ・フォー・ピース加盟の当該6ヵ国にすでに諸宗教評議会、すなわち、韓国宗教人平和会議（韓国）、朝鮮宗教人協議会（北朝鮮）、中国宗教和平委員会(中国)、WCRP／RfP日本委員会(日本)、RFPアメリカ委員会（アメリカ）、ロシア諸宗教評議会（ロシア）が存在することに着目する。

6)

核兵器の使用と破滅的な原子力発電の事故のどちらも経験した唯一の国である日本には、特別で、極めて重要な役割が存在することを認識する。日本において、宗教コミュニティが、世界の諸宗教コミュニティと連帯して、すでにこれまで行われてきた議員、首長、ヒバクシャ、その他の市民団体との戦略的で行動志向なパートナーシップをさらに発展させ、日本政府に対し、日本にしかできない特別で、重要な役割を果たし、核兵器の全廃に努めるよう促す。このような日本にしか果たせない特別で、重要なリーダーシップを発揮する具体的方法の一つとして、核兵器保有国、同盟国、核兵器禁止条約支持国との橋渡し役となり、2018年の核軍縮 に関する国連ハイレベル会合の特別会合を広島で開催することも検討されるべきである。

黒住　ありがとうございました。日本の果たすべき役割をパストラル、仏教でいうところの「方便」と表現されましたが、要は駄目なものはダメといっていける宗教的信念で、核による抑止力などあり得ないというメッセージでありました。

それでは、これから5名のパネリストの皆様にご意見を頂戴します。

最初に、アンデシュ・ウェジリド様よろしくお願いします。

ウェジリド（キリスト教）

「不確かな安全にだまされている」。

これが私たちが生きている状況です。国も不確かな安全にだまされている。個人も同じようにだまされている。破壊する力が、安定、繁栄、平和の上に乗っている安全は、不確かな安全であり、本当の安全ではありません。

私たちの多くは歴史に欺かれています。冷戦は40年以

上も続いていたのです。多くの国が核を保有していましたが、そのどれも使われることはありませんでした。抑止力が機能していたのです。不合理のなかに、いくらかの合理性があったというべきでしょう。核による侵略は、核による反撃があるとの了解がありました。そして、広島や長崎の記憶は、まだ生きていました。

しかし、記憶は永遠ではありません。戦争による日本国民や国家の大きな被害は、１９３９年から１９４５年までのヨーロッパでの戦争の記憶と同じように、次第に忘れ去られていきます。それは広島や長崎で起こったことも同様です。もし、世界がすぐに行動しなければ、私たちは、新しい破滅的状態に陥る危機に直面しています。次の悲惨な状況の後では、記憶を留めていられるどころか、人間が誰もいなくなるかもしれません。

私たちは、いわゆる国際的人道法や国際法を所有しています。それで解釈すると、核兵器の入る余地はないように思われます。核兵器は無差別で、桁外れで、私たちの存在そのものの基盤を脅かします。けれども核兵器は合法です。

核兵器の全面的廃止を目的として、核兵器を禁止するための法的拘束力のある手段を協議するために、国連の多くのメンバー国が行動しています。それは勇気ある知恵の兆しです。２０１７年７月７日、メンバー国のかなり多数の支持を得て、協定が作成されました。次は批准されなければなりません。ですが、予想通り、核を保有する国は一つも加わりませんでした。自分達を守っていると思われる核の傘に自分達は依存しているのだと考えている国の多くも参加しなかった。これら全ての国々も、この協定の実施に参加するべきです。それでも、少しは喜びましょう、

私たちの伝統の中心には、黄金律（Golden Rule）と呼ばれるものがあります。「あなたが自分にして欲しいと思うことを他人にもなしなさい」ということです。黄金律や、それに類似したルールには、希望があり道徳的判断力やよき意思があります。黄金律は善が勝つという思想の上に成り立っています。

つながり、相互依存、友情は信頼の前提条件です。とくに信頼は平和に必要です。私たちの宗教的伝統は全て、相互依存、つながり、友情に関わるものです。信仰を持つということは信頼するということです。

国家間の寛容とつながりこそが、未来を存続させるものであることを、人々に分からせるために、私たちは最大限の努力をしなければなりません。失敗することもあるでしょう。しかし、その努力こそが本当の安全、本当

の安心を構築する方法なのです。敵のモカシン（革靴）をはいて少なくとも1マイル歩くことで、信頼と友情が育つのです。

歴史的に見ると宗教的リーダーが、国家主義者や、好戦的な言葉や行動に手を貸してきたことがよくありました。私たちの時代の長続きする国家とは、国際主義、信頼、国際法の更なる発展、国際法の尊重なのです。どちらの側につくとか誰に味方するとかは、違いを生み出します。

私たちは「人新世に生きている」といわれています。人が地球のエコシステムに決定的影響を与えている時代です。その際たるものが核兵器です。これは私たちの文明を一掃し得る力を持っています。私たちは、途方もない力を持ち、自分におびえ、自分にとって危険なものになっているのです。時として、力は人を無力にするだけでなく、麻痺させることがあります。麻痺されないようにしましょう。私たちは、命に奉仕する責任を持つように造られているのですから。

黒住　ユニークなご意見ありがとうございます。続いて髙見三明様、お願いします。

髙見（キリスト教）

1　原子爆弾の非人道性

1945年8月6日と9日に広島と長崎に原子爆弾が投下された。原子爆弾は非人道的な兵器であり、その兵器を用いる人間は、人間としての道を大きく踏み外している。なぜなら、「都市全体または広い地域をその住民とともに無差別に破壊するための戦争行為はすべて、神と人間自身に対する犯罪であり、ためらうことなく断固として断罪されなければならない」（第二バチカン公会議『現代世界憲章』80項）からである。

原子爆弾とその使用は、以下のような諸点において非人道である。

(1) 大量虐殺

広島市の公式ホームページによれば、当時の広島人口は約35万人、1945（昭和20）年8月6日の原爆でその年の12月末までに約14万人が死亡したと推定される。重軽傷者は8万3000人。また同市原爆死没者名簿登載者数は、2016（平成28）年8月6日の奉納時点で

30万3195人である。

長崎市の公式ホームページなどによれば、当時の長崎の人口は約24万人、8月9日の原爆でその年の12月末までの死者数は7万3884人、負傷者7万4909人。市内の戸数の約36%にあたる1万8409戸が被害を受けた。同市原爆死没者名簿登録者数は、2016（平成28）年8月9日の奉安時点で17万2230人である。長崎の原子爆弾ファットマンは広島のリトルボーイより強力だったが、より少ない人口と、山で囲まれた地形のために犠牲者が少なかった。

いずれにせよ、原爆は一瞬にして10万単位の人間のほかあらゆる生物の命を奪い、住まいや建造物、文化財や自然などを破壊する恐ろしい兵器である。

(2) 熱線と爆風による被害

長崎で原爆が炸裂した時、火球の中心温度は100万度、直径約280mの火の玉ができ、表面の温度は太陽と同じくらいになったと推定されている。近くでは、燃えるものすべてが火を噴き、人々の皮膚は焼けただれて剥がれ落ち、身体が炭のように黒焦げになるなど、悲惨だった。翌年になると、火傷が治ったあとが盛り上がる、〝ケロイド〟症状が現れた。また、原爆の徹底的な破壊力は、家族から親兄弟や親戚、知人、多くの子どもや女性のいのちを奪った。爆風によって押しつぶされた建物の下敷きになって死ぬ人たち、吹き飛ばされた窓ガラスの破片が体に突き刺さった人たちも多く、熱線と爆風によって火災も広がった。

(3) 放射線による甚大かつ深刻な被害

原子爆弾は、通常の爆弾では発生しない大量の放射線を放出し、人体に深刻な障害を及ぼした。被爆直後から短期間に現れた熱線・爆風・放射線による一連の症状を「急性障害」といい、吐き気や食欲不振、下痢、頭痛、不眠、脱毛、倦怠感、吐血、血尿、血便、皮膚の出血斑点、発熱、口内炎、白血球・赤血球の減少、月経異常などが見られた。また爆発した時の燃え残りの物が地上に降り注ぐ、「死の灰」と呼ばれるものや、それが雨となった、「黒い雨」による放射線の被害もあった。

放射線は、また長期にわたって人体の奥深くまで入り込んで、細胞を破壊し、血液を変質させ、骨髄などの造血機能を破壊し、肺や肝臓等の内臓を侵すなどの深刻な障害を引き起こした。被爆後5、6年が経過した1950（昭和25）年ごろから白血病患者が増加し、1955（昭和30）年頃からは甲状腺ガン、乳ガン、肺ガンなど悪性腫瘍の発生率が高くなり始めた。胎内被爆児は出生後も死亡率が高く、死を免れても小頭症などの

症状が現れることもあった。

原爆による心身傷害は時が経過しても癒えることがなく、被爆者はケロイドや伝染患者との理由で差別や偏見に苦しみ続けた。原爆は、人間の尊厳を残虐に損なう殺傷方法にある。

(4) 広島と長崎の異なる種類の原子爆弾は人体実験のためでもあった

長崎の原爆は、プルトニウム239を使用した爆弾で、インプロージョン方式で起爆する。TNT火薬換算で2万2000t（22kt）相当の規模にのぼる。この規模は、広島に投下されたウラン235の原爆（TNT火薬1万5000t相当）の1.5倍の威力であった。米軍は日本の科学者も動員して、両市で被害状況を詳細に調査分析して、さらなる兵器改良に役立てていった。

2 核兵器廃絶を実現する努力

上記のような非人道性極まりない核兵器はこの地球上から徹底して廃絶すべきである。

(1) 核兵器禁止条約

2017年7月7日、核兵器を非合法化する「核兵器禁止条約」がニューヨークの国連本部での条約制定交渉会議（Nuclear Weapons Convention［= NWC］）で、20年越しに採択された。その骨子は次の通りである（『長崎新聞』2017年7月8日、1面）。

一、核兵器使用による被害者（ヒバクシャ）の苦しみに留意（前文）
一、平和、核軍縮についての教育を普及させる。
一、核兵器の開発や実験、製造、保有（Development, Testing, Production, Stocking）を禁止
一、核兵器の使用、使用するとの威嚇（Use and Threat of Use）を禁止
一、核兵器の移譲（Transfer）を禁止
一、被爆者らの医療、リハビリを支援
一、50ヵ国の批准で90日後に条約発効

その一方、交渉には193ヵ国のうち120以上が参加したが、核保有国や米国の「核の傘」に頼る日本および北大西洋条約機構（NATO）諸国は、オランダを除き参加しなかった。

(2) 北東アジア非核兵器地帯

たとえばNPO法人「ピース デポ Peace Depot」のなかで宗教者もそのための活動をしている。これは市民の手による平和のためのシンクタンクで、核兵器の廃絶と軍事力に頼らない安全保障の実現を目指して調査研究活動を行っている。

(3) 平和市長会議

1982年に当時広島市長の荒木武の呼びかけにより設立された、反核運動を促進する世界の地方自治体で構成される国際機構。2017年7月1日現在、162ヵ国、7392（うち国内1679）都市が加盟。

(4) ヒロシマ・ナガサキ議定書

「平和市長会議」が2008年4月に発表「2020年までの核兵器廃絶の実現に向けた核不拡散条約（NPT）の補足」。

(5) ヒバクシャ国際署名

「核兵器の全面禁止と廃絶」をアピール（Appeal for a Total Ban on Nuclear Weapons）するために被爆者たちが国際的に展開している署名運動。署名の訴え先は、世界のすべての人、特に核保有国とその同盟国の国民。目標数は2020年までに世界数億筆。期間は2016年4月～2020年。その間毎年10月に国連総会に提出する。

3 原子力発電の問題に対して

2011年3月11日の東日本大震災によって発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故の8ヵ月後、11月8日、日本カトリック司教団は、司教団メッセージ「いますぐ原発の廃止を ～福島第一原子力発電所事故という悲劇的な災害を前にして」を日本に住むすべての人に向けて発表した。その中でわたしたちがなすべきこととして以下のことを述べた。

(1) 神の被造物であるすべてのいのちと自然を守り、子孫に、より安全で安心できる環境をわたす責任を果たすために、人間の限界をわきまえる英知によって、科学技術を過信せず原子力発電の「安全神話」の虚偽を見抜くこと。

(2) エネルギー不足やCO2（二酸化炭素）削減の課題については考えなくてはならないが、利益や効率を優先する経済至上主義にではなく、何よりも人間の尊いのち、美しい自然を守る立場に立つこと。

(3) プルトニウムをはじめとする放射性廃棄物を多量に生みだし、その危険な廃棄物の保管責任といった負の遺産を将来世代に負わせることを、倫理的な問題として捉えなおすこと。

(4) 原子力発電に代わるものとして期待される再生可能エネルギーとエネルギー消費の削減について研究し、そこから福音の精神に基づく単純質素な生活様式を選び直し、「清貧」の生き方を新たに模索すること。

それから5年半後の2016年11月11日、日本司教団は、以下についての認識も新たにして、再度メッセージを発表した。(1) 地球上ではほとんど起こらない核分裂を人工的に起こして取り出す核エネルギーは、生命体を維持するエネルギーや、燃焼などによって取り出される通常のエネルギーなどに比べ、桁違いに強大であること。(2) 核分裂によって生じた原子核は不安定であり、それを安定させる技術（放射性廃棄物処理技術）を人類はいまだ獲得してはいないこと。(3) ひとたび原子力発電所で過酷事故が起これば、市民生活が根底から破壊されること。また放射能による環境被害の影響は、国境も世代も超えて広がること。

4 カトリック教会の主張

教皇ヨハネ23世（在位1958～63）は、その最後の回勅『パーチェム・イン・テリスー 地上の平和』（1963年）で次のように述べている。

「正義、英知、そして人間の尊厳の尊重のためには、軍備競争に終止符が打たれること、既成の軍備が同時かつ平衡的に縮小されること、核兵器が禁止されること、そして最後に、有効な監視をともなっての軍備全廃達成が切実に要求されます。（……）軍備の均衡が平和の条件であるという理解を、真の平和は相互の信頼の上にしか構築できないという原則に置き換える必要があります」（カトリック中央協議会、2013年、60、61項）。

教皇ヨハネ・パウロⅡ世は、広島での平和アピール（1981年）のなかで次のように述べた。

「過去を振り返ることは将来に対する責任を負うことです。（……）あの悲劇の日以来、世界の核兵器はますますふえ、破壊力も増大しています。核兵器は依然として製造され、実験され、配備されつづけています。（……）核兵器のごく一部だけが使われたとしても、戦争は悲惨なものとなり、その結果、人類の滅亡が現実のものとなることが考えられます。（……）広島を考えることは、核戦争を拒否することです。広島を考えることは、平和に対しての責任をとることです」（『広島平和アピール』三と四、中央協議会、2011年）。

さらに『カトリック教会のカテキズム』（カトリック中央協議会、2002年）にも次のように述べられている。

「軍備拡張競争は、平和を保証するものではない。戦争の原因を除去するどころか、かえって増大させる危険をはらんでいる。新しい兵器製造に用いられる巨万の富の消費は、貧しい国の人々を救済する妨げとなり、諸民族の発展を阻害する（2315項）。武器の製造や売

買は、諸国家ならびに国際社会の共通善に抵触する」（2316項）。

最後に、第二バチカン公会議は平和について次のように述べている。

「平和とは、人間社会の創立者である神によって社会の中に刻み込まれ、つねにより完全な正義を求めて人間が実行に移さなければならない秩序の成果である。（……）したがって、平和は永久的に獲得されたものではなく、絶えず建設されるべきものである。（……）平和獲得のためには、各自が絶えず激情を抑えることと、正当な権力による警戒が必要である。しかし、それだけでは十分ではない。個人の福祉が保障され、人々が信頼をもって精神と才能の富を互いに自発的に分かち合わなければ、地上に平和は獲得できない。他人および他国民と、また彼らの尊厳を尊重する確固たる意志および兄弟愛の積極的な実践は、平和の建設のために絶対に必要である。こうして平和は、正義がもたらしうるものを越える愛の実りでもある」（78項）。

黒住　ありがとうございました。

引き続きまして、全日本仏教会理事、戸松義晴様にお願いします。

戸松（仏教）

全日本仏教会では、2011（平成23）年12月1日に「原子力発電によらない生き方を求めて」と題する宣言文を出しております。

東京電力福島第一原子力発電所事故による放射性物質の拡散により、多くの人々が住み慣れた故郷を追われ、避難生活を強いられています。避難されている人々は、やり場のない怒りと見通しのつかない不安の中、苦悩の日々を過ごされています。また、乳幼児や児童をもつ多くのご家族が子どもたちへの放射線による健康被害を心配し、「いのち」に対する大きな不安のなか、生活を送っています。

広範囲に拡散した放射性物質が、日本だけでなく地球規模で自然環境、生態系に影響を与え、人間だけでなく様々な「いのち」を脅かす可能性は否めません。

日本は原子爆弾による世界で唯一の被爆国であります。多くの人々の「いのち」が奪われ、また、一命をとりとめられた人々は現在もなお放射線による被曝で苦しんでいます。同じ過ちを人類が再び繰り返さないために、

私たち日本人はその悲惨さ、苦しみをとおして「いのち」の尊さを世界の人々に伝え続けています。

全日本仏教会は仏教精神にもとづき、一人ひとりの「いのち」が尊重される社会を築くため、世界平和の実現に取り組んでまいりました。その一方で私たちは、もっと快適に、もっと便利にと欲望を拡大してきました。その利便性の追求の陰には、原子力発電所立地の人々が事故による「いのち」の不安に脅かされながら 日々生活を送り、さらには負の遺産となる処理不可能な放射性廃棄物を生み出し、未来に問題を残しているという現実があります。だからこそ、私たちはこのような原発事故による「いのち」と平和な生活が脅かされるような事態をまねいたことを深く反省しなければなりません。

私たち全日本仏教会は「いのち」を脅かす原子力発電への依存を減らし、原子力発電に依らない持続可能なエネルギーによる社会の実現を目指します。誰かの犠牲の上に成り立つ豊かさを願うのではなく、個人の幸福が人類の福祉と調和する道を選ばなければなりません。

そして、私たちはこの問題に一人ひとりが自分の問題として向き合い、自身の生活のあり方を見直す中で、過剰な物質的欲望から脱し、足ることを知り、自然の前で謙虚である生活の実現にむけて最善を尽くし、一人ひとりの「いのち」が守られる社会を築くことを宣言いたします。

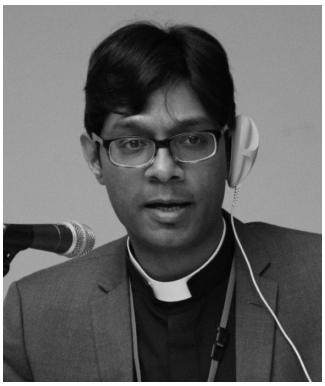
このような宣言文を出しましたら「宗教のプロはいつもよいメッセージを出される。しかしそれが何なのだ」という批判を受けました。

日本は、学者や宗教者たちの組織がエコな活動を始めました。ソーラー発電など、成長の家や立正佼成会や伝統仏教からもです。インドや東南アジアでもその活動は認められエコな寺院のシステムができています。

黒住　ありがとうございました。東日本大震災での全日仏でのアピールを踏まえてのご発言でした。

ではペニエル・ラジクマール様にお願いします。

ラジクマール（キリスト教）



広島・長崎への原爆投下から、ほぼ72年が経過した今日、原子力時代の継承者である私たちはこの場に集まりました。この時代は希望の時代でもありますが、危険をはらんだ時代でもあり、大きな機会を秘めた時代でもあり、責任が拡大する時代でもあります。

核エネルギーを推進せよとの主張に、環境、倫理、経済の観点から疑問があることは歴史が教えてくれます。途方もない投資コスト、誤りの生じる可能性、安全対策の妥協を余儀なくする経済的便宜主義、責任の免除を前提とした核エネルギーへの投資を望む政治指導者、電離放射線が特に女性や少女に与える大きな影響、そして核兵器が悪しき者の手に渡る可能性。これらは核エネルギー問題を検討する際に、慎重に考慮するべき問題です。スリーマイル島、チェルノブイリ、福島の原子力事故により、核兵器だけでなく民生用の核エネルギー源も原子力災害を引き起こす可能性があることが確認されています。

核エネルギー関連の諸問題、特に核兵器関連の問題は、私たちの共存という道徳構造の核心を打ち砕くものです。核エネルギーに関する道徳の抜け穴や、核兵器をめぐる道徳の喪失は、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師が何十年も前に指摘した次の言葉を確認するものです。「科学の力が精神の力を追い越すとき、残るのは誘導ミサイルと、誤った方向に誘導された人間である」（「人間」を表す言葉として、性差別的な「men」を使うことをご容赦ください）

いま、世界を核兵器の完全廃絶へと向かわせるために何が必要かを探る中で、これまで以上に必要性の増していることがあります。私はこれを三つの取り組みと呼んでいます。すなわち、頭による取り組み、心による取り組み、手による取り組みです。

過去72年間にわたって、抑止力の名の下に多くの人々の道徳的想像力が人質に取られてきました。大国は核兵器を予算や国家主義的システムに永続的に組み込むことで、核兵器を規範化しています。軍事産業界は政治的衝動や経済的野心に論拠を与えるために、世界を安全にする唯一の方法は、核兵器の供給を増やして抑止力を高めることだという嘘を売り込むことに成功しています。殺

したくないという人間の通常の感情は、先制的暴力という神話により堕落させられています。私たちは、殺す可能性や殺される可能性なしに生きるということを想像できない道徳環境を育ててしまっています。

このような背景では道徳的想像力が必要となります。人を「我々」と「彼ら」に分けて他者を非人格化し、自身の人間性を失わせる二元論を拒絶する想像力です。人間の幸福を、「インター・ビーイング」、すなわち人間同士の相互関連性という観点から理解するための想像力が必要です。すべての命が互いにつながっているという考え方を中心に持つ伝統的諸宗教は、このような想像力を生み出すことができる源です。この想像力は「内なる命」だけでなく「外なる命」、そして「私たちの間にある」命にも価値を与えます。

私たちは道徳的想像力を育てることで、私たちが共通して持つ人道より兵器を信頼して自らの人間性を失わせることを拒絶しなくてはなりません。この想像力は、ローワン・ウィリアムズ前カンタベリー大主教の言葉を借りれば、「このような兵器を中心に戦略を立てるのは、このような兵器に敗北したということだ」と指導者たちに理解させるために役立つでしょう。核戦争は、破壊された者と破壊した者、両者の魂を破壊する魂の戦いだということを理解する必要があります。ひとつ核兵器が製造あるいは実験されるたびに、私たちは人間のままでいる能力や責任を浪費しているのです。

「頭による取り組み」は、「心による取り組み」、すなわち思いやりを原動力とする信念との整合性がなくてはなりません。

核兵器完全廃絶の先延ばしは、その多くが核兵器を将来的な脅威と考える姿勢から生じています。私たちの生きる時代においては核兵器の脅威から逃れることができるという理解が、往々にして「いま」行動しようという意思を鈍らせています。

核兵器は私たちの生きる現代を脅かしているのだと考えれば、行動しようという信念を推進することができます。そのためには、核兵器の備蓄という病的な中毒の途方もない対価を、最も弱い立場にある人々が払っているのだと気づく思いやりの心が必要です。知的資源や財源、政治的意思を核兵器の建造や実験に流用するのは、悪化する現代の傷口に塩を塗る以上のことです。この傷口とは、想像もつかないような貧困、広がる食糧不足、安全でない飲料水のことであり、これらすべてが、私がこの文を言い終える間にも何人もの人が亡くなる原因となっ

ています。毎分、何百人もの人が、防ぐことのできる理由で亡くなる世界において、核兵器開発競争は最悪の形の「血のスポーツ」であり、無辜の人々の死と血が娯楽に供されているにすぎないことを理解する必要があります。毎分、大量死に寄与しているという道徳的な恐れは、死ではなく命に投資しようという方向に私たちの心や精神、意志を動かすはずです。

ここまでは頭による取り組み（道徳的想像力）と、心による取り組み（思いやりに基づく信念）についてお話ししました。次は「手による取り組み」、すなわち献身的協力についてお話しします。

いま、私たちは希望の扉の前に立っています。今年7月7日、122ヵ国の賛成により「核兵器禁止条約」が採択されました。この条約は核兵器を禁止し完全な廃絶へと導く法的拘束力のある手段です。この希望を現実にするには「手による取り組み」、すなわち団結して作り上げる献身的協力が必要です。宗教団体には、政策立案者、市民社会、外交界との連携が求められますが、より重要なのは、核の暴力に対して最も脆弱な末端の人々の声と団結することです。私たちが耳を傾けるべきは、原爆により家族を全員失った原爆生存者のサエキ・トシコさんのような人々の声です。彼女は次のように話しています。

「戦争は物を壊し、人を殺すだけでなく、人の心も粉々にするのです」

手による取り組みとは、核兵器に関する諸宗教間の幅広い合意を共通の行動へと変えることです。私たちは協力の技術を身につけなくてはなりません。一部の宗教団体は共通の問題への対応計画において、自身が主導的役割を果たさなければならないと考え、いまだ他の宗教との協力に苦心しています。このような障害を、韓国人神学者のキム・ヒョプヤン氏は「主催の敵意」（host-ility）または「主催の意志」（will-to-host）と呼んでいます。

「手による取り組み」のためには、常に変化を生み出す主役になろうという誘惑を振り払い、変化を生み出す人を支える役割を果たせるようになることが必要です。主役になろうと望むことが、支配力を行使する方法になりうることは、あまりに多いのです。この望みは、他者からの贈り物を受け取って協力すれば、自分は無力になるかもしれないという恐れから生じるものです。人間は自分に関わることの支配力を失うことを心から恐れます。しかし、いま必要なのは、手を取り合って協力を全世界に広げることです。

親愛なる兄弟姉妹の皆様、もしかすると、「問題にな

っていることに沈黙するようになったとき、我々の命は終わりに向かい始める」という名言が文字通りの意味で真実になるのは、核兵器に関してかもしれません。私たちは沈黙を続けていてはなりません。いまこそ有言実行のときです。世界には人を憎しみ合わせるに十分な宗教が存在し、愛し合わせるには不十分であるように感じられることも多々ありますが、私たちはこの世界で共に歩まなくてはなりません。私たちは手を取り合って歩み、思いやりに動かされる心を持ち、一部の命ではなく、すべての命が重要となる世界を作る新しい想像力に満ちた頭を持つことが求められます。

黒住　ありがとうございました。

最後になります。韓国仏教宗団協議会上席理事の春光様、お願いします。

春光（仏教）

1987年に、世界の宗教指導者たちが記念すべき最初の「比叡山宗教サミット」を開催してから30年。本サミットは、仏陀の教えに基づき、人類の平和のために大変有意義な取り組みを行ってきました。

「宗教者は常に弱者の側に立つことを心がけねばならない」と誓ったメッセージは、今日も生き続けています。本日お話しする内容は、このメッセージにも関連する「核廃絶と原子力問題を考える」です。

今日、核兵器の存在は、人類の平和にとって最大の脅威だと言えます。北朝鮮がミサイルの発射試験や核実験を推し進める中、世界は核の脅威に直面しています。一方で、核の問題は多くの国の政治的関心や安全保障の問題と深く関わっているため、北朝鮮の核開発を阻止することはそう簡単ではありません。

北朝鮮における核の問題は、朝鮮半島だけでなく、世界平和に関する問題でもあります。さらには、各国の外交政策や経済政策といった、軍事的な領域を超越した、

様々な問題とも関連しています。したがって、核拡散条約および国際原子力機関に抵触しているにも関わらず、北朝鮮の核保有を規制することは容易ではないのです。

歴史的にみれば、核の発明と開発は、20世紀科学の飛躍的な前進でありました。原子力は、化石燃料の欠点を補うことのできる、とても効率の良いエネルギーだからです。原子力発電所を建設した31ヵ国のうち、ドイツ、スイス、ベルギー、台湾を除く27ヵ国は、現在も原子力発電を行う、または、発電量を拡大しています。また、新たに17ヵ国で原子力発電所の建設が予定されています。それは、医療や生活の分野における、平和的かつ人道的な核エネルギーの利用の重要性を物語っています。

しかし、核エネルギーの利用については、良い面と悪い面とがコインの裏表のように共存しています。この優れた科学技術は武器に転用され、人類にとって最大の脅威にもなりました。また、1986年のチェルノブイリ原発事故や2011年の福島第一原子力発電所事故にみる、ずさんな管理による放射能漏れや自然災害は、大惨事をもたらすだけでなく、環境汚染をもたらす悪の根源にもなります。このような、原子力の負の要素も議論される必要があるでしょう。核兵器と原子力の問題は、軍事的立場や産業開発の側面からだけ取り扱われるべきではないのです。

私たち宗教者は、この問題を幅広い観点から考察し、議論する必要があると考えます。宗教者にとって核の問題が重要なもう一つの理由は、宗教とは常に教えを追求し、個人の幸福と人類の平和のための善行を実践するものだからです。

私たちは、核兵器と原子力の問題を、仏教徒の視点から捉える必要があるのです。そして、太陽光エネルギーのような、生態系への負担が少ない再生エネルギーを通じて、自然と環境の調和を生み出すために、仏教に何ができるかについて思いを馳せるべきなのです。

仏陀の重要な教えに「縁起」があります。『阿含経』に書かれた「縁起の法」は、「此があれば彼があり、此が生ずれば彼が生じる」と説いており、物事はお互いに関係し合っていて、全体は個からなり立っていることを示唆しています。

個と全体は別の存在ではないという仏教の教えには、共存することの実用的な価値を見出すことができます。各国の政治、外交、経済といった様々な問題の有機的な関係性を生み出すためには、相互扶助が必要であると、切実に感じています。今、世界秩序は自分のことだけを考えることを止めるべきです。相互扶助と互いを尊重し

合うことを通じて、共存への道筋を探らなければなりません。

通信、交通手段が飛躍的に発展した現代社会に生きる人々は、私たちが皆、仏陀の教えのもとに兄弟であることを認識する必要があり、その気付きを促すことが、世界中にいる仏教指導者の役目でもあります。人類の平和は一国の問題ではなく、世界全体の問題です。したがって、共存と繁栄を追求する一方で、常に「縁起の法」を理解しようと心がけ、慈善を行うよう心がけることが重要なのです。

核兵器および原子力に対する制裁措置に関しても、共同体意識のもとに議論されるべきです。産業開発に専心してきた人類の歴史を忘れてはならない一方で、自然がひどく汚染され、その結果として深刻な気候変動と自然災害が生じていることも忘れてはなりません。

人類の幸福のため、世界の宗教指導者は、核兵器の廃絶、原子力の適切な管理、代替エネルギー源の開発、自然環境の保護をはじめとする諸問題に、より実践的な関心を持つことが必要だと考えます。

今日の神聖なる集まりが、人類平和を脅かすあらゆる要素を克服する知恵と勇気を共有し、広く伝えていく場になることを期待しています。

ご静聴ありがとうございました。

黒住　北朝鮮に隣接する韓国というお立場、さらに仏教者という立場から大乗的な視点で縁起的秩序に基づく実践を訴えられました。冒頭に、最初の集いで「宗教者は弱者の側に立つことを心がけねばならない」というスタンスは今もきちんと生きているということでお話をしていただきました。私も核問題を考える上でその通りだと思いました。

さて、時間に限りはありますが、せっかくのパネルディスカッションですので、さらにコメントをいただければと存じます。

最初にウェジリド先生お願いします。

ウェジリド（キリスト教）　過小評価してはいけないということだと思います。我々は理想主義者だと思われていますが、現実にも直面しています。抑止力といいますが、長期的には現実的ではないのかもしれません。国際的な宗教団体として我々には大きな責任があると感じます。それは人々と人々を会わせるということ、そして他国の人は他者などと考えてはなりません。同じ人間なのです。

我々は国際的な宗教団体だからこそ、それができると

考えています。我々がどれほどのことを共有しているのか、それを示すこともできます。それこそが我々ができることです。お互い、ほとんど変わりはないということを理解してもらうことが重要です。

春光（仏教）　人間の貪欲さによって環境破壊、秩序崩壊、人命軽視などの現象が起きています。どんな小さな生き物でも我々が大事にすることで、自分の心、他者の心が浄化され、ひいては人類平和へとつながると思います。他人を尊重することは自分への尊重、他人への破壊は自分への破壊なのです。

髙見（キリスト教）　核兵器を持つことで自分が強いのだと思うことは愚かです。他人を破壊することで、自分をも破壊するからです。国のリーダーがそんな愚かな考えを持つことは考えられません。宗教者は智恵を持つように説得すべきです。核をつくるためには莫大なカネがかかり、多くの国民が餓死しようとしています。苦しむ人を救うよう、宗教者は努力すべきです。

戸松（仏教）　仏教の中心的な教えは、慈悲と智恵です。苦しみの根源を理解するならば、精神的のみならず社会構造を検討しなくてはなりません。暴力には見える暴力と見えない暴力があります。慈悲は行動的であって初めて慈悲といえます。それで、社会は、我々が単に教えたり語ったりしているわけではないことを見守っています。

ラジクマール（キリスト教）　数ヶ月前ワシントンDCの航空博物館に息子を連れて行きました。そこにはヒロシマ、ナガサキに落とされた原爆も飾ってありました。10歳の息子は少し考えて「我々はもっと進化しないといけないね」ということでした。革命ではない、進化だと。我々や信者がいかに自己開発して高みに登れるかが重要なのです。

黒住　それでは杉野先生にご意見というかまとめをお願いします。

杉野（WCRP）　大司教様が理想主義と現実主義の対立ということをいわれた。現実主義者の国々は、理想主義者の国は今回の核兵器禁止条約に対して非常にナイーブだと、無知だと、現実の安全保障の厳しさを知らないといっています。また理想主義グループは、やはり核兵器は無差別に人を殺戮する決して許されるものではないと主

張している。我々の宗教的なアプローチがもしかしたら、日本の果たすべき役割と同じような意味をもっているのではないか。宗教的なアプローチは規範的なものを確立していくことも大事です。しかし現実の人々を救っていかなくてはならない。それも宗教者の役割です。パストラルな部分とノーマティブな部分融合できるのが宗教者であり、もしかしたら、それが日本の役割ではないかと感じました。

黒住　ありがとうございました。（拍手）

分科会2

貧困の追放と教育の普及

進行役……**國富啓二師**
日本宗教代表者会議会議部長

コーディネーター　**西原廉太師**
世界教会協議会（ＷＣＣ）中央委員
立教大学教授（キリスト教）

基調発題……**ジョン・オナイエケン師**
アブジャ大司教区大司教（キリスト教）

パネリスト……

テップ・ボーン師（代理）
カンボジア仏教会会長（仏教）

ロベルト・カタラーノ師
フォコラーレ・ローマ本部諸宗教対話事務局共同代表（諸宗教対話組織）

エラ・ガンジー師
ガンジー財団創設者（ヒンドゥー教）

ホミ・ダラー師
世界ゾロアスター教徒文化財団理事長（ゾロアスター教）

ディン・シャムスディーン師
アジア宗教平和会議（ＡＣＲＰ）実務議長（諸宗教対話組織）

シルベストロ・ベハン師
フランシスコ修道会諸宗教対話局長（キリスト教）

國富（進行役）　本日の司会進行をつとめさせていただきます、日本宗教代表者会議会議部長・國富啓二と申します。よろしくお願い申し上げます。

これより分科会を始めさせていただきます。

コーディネーターをおつとめいただきますのは、世界教会協議会（ＷＣＣ）中央委員で立教大学教授の西原廉太様です。

それでは西原様、よろしくお願い申し上げます。

西原（コーディネーター）　分科会2は「貧困の追放と教育の普及」であります。

２０１６年１月に国連がすべての国に適用される普遍的な目標としてＳＤＧｓを打ち出しました。これは、誰もが置き去りにされず、あらゆる貧困に終止符を打ち不平等と戦うとともに、気候変動などにも対応するものです。

すべての国に真の豊かさを追求しながら、貧困に終止符を打つためには、質の高い教育が必要であるとの確認がなされています。ＳＤＧｓに対して我々宗教者はどのような貢献ができるのか、分科会を通じて確認できればと願っています。

まずは基調発題として、ジョン・オナイエケン・アブジャ大司教区大司教様にご発言をお願いします。

基調発題――ジョン・オナイエケン（キリスト教）

貧困の追放と教育の普及

この集いは、軽視されがちな、しかし重要な二つの点に重きを置いています。それは今、世界がしなければならないこと、つまり「祈り」と「対話」であります。多くの人にとって、「祈り」は時間の無駄でしかないでしょうが、さまざまな宗教者が集まり、それぞれの伝統に則ってともに祈ることは、人類が直面する問題をかたくなに人間の力だけで解決しようとして、目に見

える成果をほとんどあげていない今の世界に対して、非常に強いメッセージとなるはずです。さまざまな宗教の人々が集まることで、多様な境界線を超えたコミュニケーションの力が明らかになるでしょう。

本来なら避けられるはずの苦しみや破壊の種を、世界のいたるところで貧しい人々にもたらし、この世界を分断している紛争は、対話なくして解決はできません。ここで私たちがやっていることは、無用なお喋りに過ぎないと一顧だにしない人もたくさんいるでしょう。しかし、ここに集まった私たちは、より良い世界を創るために努力することは価値があることだと、自分たちがやっていることを信じなければなりません。この世界には戦争屋があまりに大勢いるので、平和を愛する者は黙っているわけにはいかないのです。

このフォーラムで、私は上記のテーマを与えられましたが、私には聞き慣れない「underserved＝サービスが十分でない」という言葉を修正させてもらい、もっとありふれた「underdeveloped＝十分開発されていない」という言葉を使うことにします。もっとも、この言葉も、ここで立ち入ることはしませんが、論争を呼ぶ要素を含んでいます。従って、私のテーマは「いかにして貧困をなくし、十分開発されていない地域に教育を普及させるか」となります。このテーマは、今から私が簡単にお話する開発、貧困、そして教育という三つの概念を提起しています。では、この順番で今から説明していきます。

1 開発

開発という課題においては、今日、私にとって歓迎すべき点が重視されています。つまり、一般大衆の個人、また社会レベルでの、また物質面および精神面での健康と幸福、つまり全体的な人類の発展を目指すという点です。

これは、従来の「開発」の概念にとって代わる新しい考え方です。これまで私たちは生活水準やGDP（国内総生産）といった物質的な基準で、開発の度合いを測定していました。その結果、世界は先進国と開発途上国（非開発国もあるかも知れません）とに分けられました。この筋書きに則れば、世界の不平等は必然となります。貧富の差が広がるなかで、私たちにできるのは、この状況をほんの少し和らげることくらいでしょう。貧しい者は、国際的なマスメディアが報じる豊かな人々の富を謳歌する姿を見ながら、苦しみにじっと耐えることを学ばなければなりません。ですから、国連で採択された有名な「ミレニアム開発目標（MDGs）」が、貧困の「消滅」ではなく「軽減」を目標としているのは、驚くべきことで

はないのです。

しかしグローバリズムが広がるなか、この「世界村」の極端な不公平が永遠に続くことは耐えられないということから、現在の新しい考え方が出てきました。これはもはや、富める者が貧しい者に慈善の手を差し伸べるという倫理的な問題ではないのです。これは、地球という（フランシスコ教皇が言う）「共通の家」を共有する人類一家の平和と協調のための地政学上の緊急の課題なのです。世界の幸福に向けて努力することは、富裕層も貧困層も関係なく、自己啓発された者であれば誰にとっても利益となるのですから。その結果として、すべての人が利害と関心を共有するこの世界が、全体としてより良い場所となることを目指す新たな「持続可能な開発目標（SDGs）」が出てきたのです。これは消費物資ばかりを優先する物理的な幸福の問題ではないのです。平和な人類社会が精神面、また感情面での幸福を実現するにはどんな事柄やどんなプロセスが有効なのかを、私たちは理解しなくてはなりません。この包括的開発プロジェクトの対象は、いわゆる「後進」、「途上」、「サービスが十分でない」地域にとどまりません。今では私たち全員が、人類の開発において主体であると同時に客体でもあるのです。

2貧困

貧困は、従来の「開発途上」の概念を目に見える形にしたものといえます。貧困とは、「衣食住や保健衛生といった基本的な生活必需品が量・質ともに足りない状況である」と、よく説明されます。もちろん、貧困とは相対的なものといえましょう。ひとりの人間にどれだけの食料が必要か？　どんな住居であれば十分なのか？　身綺麗であるには、どれほどの衣類が必要か？　こういった点について、どのような人もそれ以下のレベルに落ちてはならないという最低限の基準があります。私たちは安易に過剰な基準に慣れてしまい、すぐ隣にいる人たちの差し迫った困窮状態に目を向けません。

貧困にもさまざまな形がありますが、「所有する」ことと「存在する」こと、生活の「量」と「質」を区別する必要があります。現代の過剰消費という生活様式は、私たち自身、またこの世界に大きなダメージを与えています。分け合い、団結することが、私たちの緊急の務めなのです。人類という家族のなかで、正義とフェアプレイが求められています。これについては、政治的な意志を奮い起こすことさえできるなら、地球上からみじめな貧困を消滅させる技術的、物質的な資産はあると科学的に証明されています。つまり、「持続可能な開発目標（S

DGs）」は夢のような理想ではなく、実現可能な目標なのです。実現可能なことであれば、実現しなくてはなりません。

主イエスは「貧しい人たちはいつもあなた方と一緒にいる」（マタイ福音書26:11）と言っておられます。また、「人はパンだけで生きるものではない」（マタイ福音書4:4）ともおっしゃり、「心の貧しい人たちは、幸いである」（マタイ福音書5:3）と言明されました。しかし同時に、当時の貧しい人たちに哀れみを示し、空腹の貧者らに食べ物を与えるという奇跡を起こされたのです。極度の貧困は解消できますし、解消しなくてはなりません。

3教育

教育は、人々を無知の世界から引き出すプロセスであり、正規の意味でも非公式の意味でも生涯にわたるプロジェクトでしょう。教育というと、通常は知識に重点を置きますが、人生の智慧を授けるというさらに難しい務めも忘れてはなりません。現代社会において、知識と技術は爆発的に増加しています。私たちは非常にたくさんのことを知り、たくさんのことができるようになりましたが、科学技術に捧げられた巨大な力を制御するのに必要な智慧について、人類は立ち遅れているのではないでしょうか。この地球の将来は、いま必要とされている制御能力にかかっているのです。

技術が発達している先進国では、研究者が最高レベルの研究を推進しているというのに、一方で私たちは、人類のかなりの部分を占める人たちにいかにして基本的な教育を提供するかという問題に向き合っています。多くの貧しい人にとっては、読み書き、計算といった最低限のことも、ロケット技術のような高度なことに思えるのです。私たちは、教育の欠如がさらなる貧困を産むという悪循環に直面しています。この悪循環をどこかで断ち切らなくてはなりません。ユニセフは、貧困のために学校に通えない子どもが何百万人もいると報告しています。世界の軍事費のごく一部で、こういった子どもたち全員に学校教育を提供できるというのに。私たちは、あとどれくらい待てばいいのでしょうか。

結論

いかにして貧困を追放するか？　教育サービスが十分でない地域に、どうやって教育を普及させるか？　この疑問から話を始め、この問題について私が考えるところから、いくつかの点を提起しました。すべての人にとっての幸福、人類の幸福が改善されることが、私たちの目標でなくてはなりません。つまり、基本的な生活に必要なものが十分にあり、社会が安定し、同時に環境も保護

されている状態です。世界では現在も争いが続いていますが、私たちは「共通の家」の存続をかけ、同じ船に乗っている運命共同体なのです。

西原　オナイエケン先生、ありがとうございました。

先生からは教育の欠落が貧困を生み、またそれが負の連鎖を超こしている。それをいかに我々が断ち切るのかということをお話いただきました。またＳＤＧｓは夢物語でなく実現可能であることをご指摘いただきました。ありがとうございました。

ここから6名のパネリストの先生にお話をいただきたいと思います。

最初にカンボジア仏教界を代表してテップボーン様（代理・アンサン・アート様）よりお願いをいたします。

テップボーン（仏教）代理

貧困撲滅は主なテーマの一つであり、過去も現在も、あらゆる国の指導者、国際機関、その他の利害関係者の協議の的となっています。貧困撲滅についての話をする時、私たちは人間が持たなければならない四つの必需品のことを考えます。四つの必需品は、お釈迦様が2500年以上前に考えたものです。それは何でしょうか。

その四つの必需品とは、

1衣服
2食事
3居住地
4薬

です。

1衣服

人間は恥じらいを持つ高等生物で、人間社会の中で尊厳のある生活を送る必要があります。ゆえに、体を晒さないように覆う衣服が必要です。いずれにし

ても、人間は寒さや暑さといった気温の変化から体を守るため、また昆虫や動物に噛まれたり刺されたりしないように、衣服を身に着ける必要があります。

2 食事

生活を維持して生きていくには、食事が必要です。人間が生き延びるには、非常に高価で買えないような特別な食品は不要です。まずまずの品質で、日々の生活に十分な量の食事があればよいのです。

3 居住地

生活のために日夜働いたら、疲れ切った仕事の後に休息と安息（睡眠）を取り、そして雨風から身を守る居住地を必要とします。人間が必要とする居住地は、生活を送り、身を守ることのできる十分な場所で構いません。

4 薬

人間に生まれると、どのような姿でも病気や老化の対象となるため、病気から逃れることはできません。そのため、病気になった時に治療できる薬が必要です。人々は病気になってようやく薬物療法を探し始めるだけでなく、健康を維持するための何らかの薬を備えておくこともできます。

人々はこれまで、そして現在も同様の貧困の状況に直面しており、適切な解決策が施されなければ今後もそうなるでしょう。以前は、1日に1ドルのお金を稼げなければ、貧しい、または貧困線上で暮らしていると見なされていました。しかし、月日の流れとともに世界が変化し続けるのに伴い、生活水準も変化しています。現在は、1日に1.5ドルを稼げなければ、貧困線上で暮らしていると見なされます。

貧困の根本的な原因は何でしょうか？

貧困につながる理由は数多くあります。ただし、ここに挙げるのはそのうちのごく一部です。

1 無知
2 資源を利用できない／誤った方法で利用する
3 一部の豊かな人々と国が富を分け与えない
4 市民戦争／社会紛争

1 無知

後発開発途上国や発展途上国では読み書きできない人々の比率が非常に高いため、これらの国々はより良い経済へと発展できず、貧困を撲滅できていません。国民が教育を受けていない、あるいは教育水準が非常に低い場合、これらの大半は脱却の方法が分からないのです。

2 資源を利用できない／誤った方法で利用する

一部の後発開発途上国や発展途上国は天然資源が豊富ですが、これらの国のなかには、国民がこれらの天然資源を使ったビジネスのスキルを持たないために、何もできずにいます。また、国民に一切の利益をもたらさない誤った方法で、天然資源が利用されている場合があります。これらの場合、一部の豊かな国の人間が一部の後発開発途上国や発展途上国の天然資源が非常に豊かであることを知り、これらの国の利己的な政府首脳や高官と共謀して、これらの天然資源をすべて搾取しようとします。

3 一部の豊かな人々と国が富を分け与えない

貧困率が高く識字率が低い国々、とくに後発開発途上国または発展途上国の一部の人々は非常に裕福であるものの、国内の人々の発展、教育促進、または雇用創出を助けるために富を分け与えたがらず、むしろ国外の銀行に資金を預けています。いずれにしても、世界の一部の裕福な国々はこれらの後発開発途上国または発展途上国の教育促進のために富を分け与えません。

4 市民戦争／社会紛争

人々の無知さと貧困さの度合いが非常に高いことから、後発開発途上国や発展途上国の人々のあいだの利益相反は注意を要する問題です。一方、無知で貧しいと、人々は貪欲な人々やあくどい政治家によってたやすく利用され、悪行へと誘導されます。

貧困撲滅に向けた解決策

貧困を撲滅するためには、次のことが必要です。

すべての人々に適切かつ十分な教育を施す

教育は、人々の全面的な社会参加を可能にし、暮らしの向上に寄与するものです。教育は持続可能な発展の原動力であり、貧困撲滅の最善の手段です。南アフリカ共和国のネルソン・マンデラ元大統領は、「教育は社会と世界全体を変える潜在力が最も高い武器である」と言いました。シンガポールのリー・クアン・ユー元首相は「ある国が強固である。その国は全国民の優れた頭脳に強く頼っている。国民の頭脳が優れているとは、すべての国民が優れた教育と技能を施されていることを意味する」と言いました。したがって、特に後発開発途上国や発展途上国の政府はそれぞれに、教育を政府および行政の最優先事項とする政策および活動を策定すべきです。

・児童の早期保育・教育を通じて強力な基盤を築く

・すべての児童に優良な基本的教育を施す
・生涯学習の重要部分として、青年・成人、および識字率の向上に向けて教育レベルを上げる
・基本的な読み書きの能力と技能のない青年・成人のために機能的識字率を上げる
・技能の低い人々向けに職業訓練を実施する
・識字環境を向上する

資源は慎重に利用する

貧困の罠から抜け出すために、後発開発途上国および発展途上国は資源を慎重に利用しなければなりません。資源には、人的資源と天然資源の2種類があります。

【人的資源】

人的資源は、国の発達に利用できる最も重要な資産です。後発開発途上国および発展途上国では、自国の将来の発展のために、自国の人的資源を開発することが非常に困難です。しかし、もう一つの大きな問題は、これらの国々が人的資本を効果的に利用できないことです。国の指導者のリーダーシップが不十分であり、また職場での汚職や縁故ひいきにより、後発開発途上国および発展途上国の人的資源では以下のことが実現し得ません。

・技能と適正のある分野で仕事させる
・プロセス全体に関与させる
・最良の仕事をするよう動機づける
・人材そのものではなく、すべての優れた業務または成果を高く評価する
・優れた仕事ぶりに対して報酬を与える
・信頼する

以上の点が欠けているために、優れた知識と技能を持つ人々は国内で生活できず、自由を与えられ、知識と技能を活かせる別の国に移住することを決断します。人的資源の能力を開発しても、これらの人材を国内にとどめることができなければ、国を発展させ、貧困を撲滅することはできません。後発開発途上国および発展途上国において頭脳流出は最も恐れるべき問題です。

【天然資源】

天然資源には非常に多くの種類があります。

〈土地管理〉

一部の後発開発途上国および発展途上国には膨大な土地があり、人口が少なく、人々の識字率が非常に低く、有能な労働者はあまり多くないため、大半の人々は農業で生計を立てています。したがっ

て、政府は、豊かな人々や企業に土地を配分するのではなく、十分な農地を持たない世帯や地域により多くの土地を与えた方がよいでしょう。

〈森林管理〉

森林は経済発展と貧困の緩和も極めて重要な役割を果たします。森林（多雨林）は季節や天候の規則性を保ち、土地の侵食（地質、池・河川・海などの地滑り）を予防し、持続可能な環境の生態系を維持する役割も果たします。天候が規則的であるとき、地質は良好に保たれ、環境の生態系は適切に維持され、農家は十分な栽培ができます。

〈水管理〉

後発開発途上国および発展途上国では、多くの人々の知識や技能はなお極めて低い水準にあります。よって、できることと言えば農業です。農業をするためには、農地に灌注するための灌漑システムが必要です。

すべての国の政府が上記のような優れた資源管理を行っていれば、数々の点で有益です。具体的には以下を実現できます。

・食品の安全
・農産物の販売を通じた収益性
・リスク回避と将来起こり得る紛争の減少
・貧困の軽減
・将来世代の福祉
・環境保護
・社会・経済の持続可能な発展

豊かな国／人々は余剰の富を雇用創出や教育支援のために分け与えるべき

これまでも現在も、世界の国々は教育の向上よりも軍事に多くの資金を費やしてきました。今日まで貧困がなお世界の問題となっているのはこのためであり、あまりに多くの人々が正しい方法、より良い暮らしにつながる十分な知識と技能をもたないため、社会および世界で多くの紛争を招く結果になっています。過去十年を見ると、世界は年間1兆5千700億ドルまたは1兆6860億ドルを軍事に支出しています。一方で、教育の強化および進展のためにはいくらの資金が使われたでしょうか。これよりも極めて少額です。つまり、将来の貧困、紛争、戦争を撲滅するには、

・（後発開発途上国および発展途上国の）国内の豊かな人々は資金を海外の銀行に保管し、何もせず持て余すのではなく、教育支援や雇用創出に配分すべ

きです。

・かつて貧しい国々を軍需品で支援していた豊かな国々は、教育分野に資金を振り向けるべきです。

・世界の豊かな人々、一部の豊かな人々は世界の一部の貧しい国のＧＤＰよりも多くの富を有しています。よって、これらの人々は資金や財産の一部を貧しい国々の教育分野の促進に寄付すべきです。

人々が進んで教育促進や他の社会サービスの支援をするよう仕向ける

現在、後発開発途上国および発展途上国には、教育分野で働くべき十分な教師、人員、技能に長けた知識人がいない学校や地域が数多く存在します。よって、仕事のない人々や定年退職した人々は、何もせずに過ごしたり、価値のない物事に時間を費やしたりするよりも、志願して有益な時間を後発開発途上国および発展途上国におけるこれらの学校・地域社会のために費やし、知識や技能を持てるよう生徒や地域社会の指導を支援すべきです。例えば、米国はＵＳ－Ｃｏｒｐと称して、国民を絶えず世界の多くの国々に派遣し、教育を必要とする学校や地域社会で英語やその他の技能を指導しています。世界は、こうした行動をするより多くの組織や個人を必要としています。

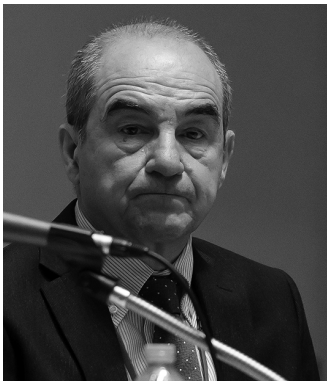
貧困を撲滅するには、十分かつ正当な教育を施すことが非常に重要です。我々は十分な資源管理を整備する必要があり、豊かな国や人々には余剰資金を教育支援や雇用創出の支援に分け与えてもらう必要があります。最後に、高度な知識と技能を持つ人々には、これらの知識と技能を持つ術を知らない人々の指導に能力を使ってもらう必要があります。そうなれば、貧困の撲滅は確実に実現するでしょう。

ありがとうございました。

西原　ありがとうございました。貧困をなくすためには、すべての人々に十分な教育を施す必要性と資源を大事に使うこと、富める国が資源を提供することなどをご指摘いただきました。

続きましてフォコラーレ・ローマ本部諸宗教対話事務局共同代表・ロベルト・カタラーノ先生にお願いします。

カタラーノ（諸宗教対話組織）



フォコラーレ運動を代表して、本日ここに出席していることを光栄に思います。フォコラーレ運動は、独創的でカリスマ的な山田恵諦師の元に組織された第1回大会以来、この比叡山での取り組みにずっと加盟してまいりました。

「森の中の奇跡」と言われてきた本当の物語をお伝えすることで、私の思いを話します。主人公は、カメルーンの英語圏にあるブジャ地方の森の中央部に住んでいるバングワ族です。1960年代、この部族はひどい貧困のなかで生きており、アフリカ睡眠病という難病によって、絶滅の危機に瀕していました。その部族の人たちは、彼らの王であるフォンとともに、地域のアフリカ伝統宗教の神に祈りました。しかし満足な結果を得られず、地域のキリスト教の司教に神に祈るよう頼みました。キリスト教は、その地域ではわずかに進出していただけでしたが、司教は医者を呼んでこの貧困地域で働かせました。彼らはフォコラーレ運動に属していましたが、そのことは何も言わず、キリスト教についても決して触れませんでした。彼らは、愛、共感、慈悲の精神で医者としてただ働いたのです。後に、彼らは地域の学童のために学校を開き、数年後、それはカレッジになりました。それに続く数十年で、状況は全く変化しました。この地域の生活水準は急激に上がり、同時に人間的尊厳も向上しました。現在では、カメルーンのこの地域は、行政官のいる文明化した地域になり、病院が地域の健康プロジェクトの戦略拠点となっています。また、このカレッジを卒業した多くの学生が、このアフリカの国の他の地域や国外で職業を見つけ、家族に送金をしています。

フォンテム族やバングワ族の成功した話の一つです。私たちの多くが、自分たちの属する宗教組織が成し遂げた、こうした例のいくつかを共有できると確信しています。そのことが、公式や非公式の教育プロジェクトを促進することを通じて、貧困問題を解決するのに役立つのです。事実、世界の抑圧された地域で、貧困をなくし教育を振興することが急務であることを、私たちはみな経験しています。いつもそうだとは限りませんが、社会的な分断や憎しみが、貧しい者と豊かな者との間の、あるいは教育にアクセスできる者と教育から遠ざけられている者との間のずっと続いている二分化から起きるこ

とを、私たちはよく知っています。近年でいえば、宗教的原理主義やテロリズムは、まさに貧困のただ中や適切な教育の欠如にそのルーツがあります。つまり、解決のための持続可能な提言を持って、貧困や教育の欠如に適切かつ効果的に取り組まなければ、社会全体は混沌として不安定さを増し続けます。私たちが現在経験している集団全体としての強制的な退去や前例のない移住の波のような、大規模で克服できそうにない問題は、決して縮小することも解決することもできないということなのです。

カトリックとして、ローマ法王フランシスコの、最近の示唆に富む考察を振り返ってみたいと思います。彼は機会をとらえては強調しています。グローバル化した世界は、はるか昔や少し前よりも、金や富がずっと遠くまで循環するのに役立っています。それと同時に、さまざまな国のなかに、さまざまな民族、宗教、言語集団のなかに、いかに多様な種類の壁や差別を生み出しているか、そのことを強調しています。その上、多くの場合、豊かさは、不法な活動や人間の尊厳を恐ろしいほどに搾取することで生み出されています。さらに貧困は、この世界の多くの社会的領域や多くの国で広がっていながら、それを明らかにするのが困難なように見えることは驚きです。それは、ほとんどの場合、目には見えず無視されているようだと、最近ローマ法王フランシスコは論じました。

しかし、無数の方法で、貧困は毎日、私たちに挑戦してきます。苦痛、疎外、抑圧、暴力、虐待、投獄、戦争、自由や尊厳の剥奪、無視、無知、医療的緊急事態、仕事の不足、密輸、奴隷状態、亡命、極端な貧困、強制的移住といった特徴をもった外見をしています。貧困は、卑しい利害関係者によって搾取され、力や金の陰謀によって踏みにじられた人々のことです。

世界レベルや国家レベル、そして地域レベルで見られるこの大きな格差は、子どもや若者が、教育から妨げられているという事実によって、さらにひどくなっています。教育を受けることで、彼らは自分たちの不利な状態を克服するための、人間らしい、心理的、精神的契機を見つけることができるのです。差別の犠牲者である人の集団がどんどん増えており、それは現代世界における支配的な風潮だと、ローマ法王フランシスコはしばしば言っています。教育を受けることが恐ろしく高価な場合も多く、社会の多くの場所では、夢見ることすらできないでいます。宗教指導者として、ローマ法王フランシスコとともに、私たちは「この社会の現実を恥じている」

と繰り返し言わなければなりません。最悪なことは、イデオロギーが自分たちの考えを広げるために教育を利用していることです。

ローマ法王フランシスコは、現在の危機的状態を変化させるために、取るべき幾つかの手段を提案しています。世界的レベルでも地域的レベルでも、今明らかに私たちが必要としているのは、「教育をより人間的なものにすること」に関わることです。それは、全体的な人格を形成するために働くことです。同時に、新たな自己中心的男性、女性を作り出すという罠にはまらないようにすることでのみ可能なのです。教育は、壁や差別を作る人間のクローンを作るのではなく、より平和的で正しい世界を築く者となれるような、全体的な人間を作り出すことを目指すべきです。

私たちが取り組むべき第二の要素は、「対話の文化」に貢献するために献身することです。対話とは、人生における基本的態度であり、それをどのように利用し、実行すべきか学ばなければなりません。私たちの世界はグローバルな村になりましたが、それはまた、大きな家族でもあります。私たちの宗教の聖書や創始者は、やり方は様々ですが、常にそう述べてきました。私たちは同じ起源からやってきて、同じゴールに向かっているのです。この観点からすると、私たちはみな、真実に向かって、また正義や平和に向かって、ともに歩むことを命じられています。もし、対話をする精神構造になるよう心を形成することに努めれば、異なった世界にも貢献できるのです。どんな状況のなかであれ、自分を「他者」と関係付けることができる人だけが、本当に対話の文化に向かって自分たちを作り上げていくものなのです。

三番目に、私たちは、教育を通じて「希望の種をまく」ように命じられています。事実、教育は未来に希望を生み出します。異なった社会を築くための希望、子どもたちや次の世代のための希望、より健康でより健全な存在になるための希望等です。

貧困や教育の欠如に根付く問題に対する積極的かつ建設的な答えになり得る、こういったやり方やプロジェクトを実行するために、どこから始めたらよいのでしょう？　私たちはそれぞれ、また、それぞれの宗教コミュニティーや集会は、すでに数千、恐らく数百万の人々の苦難を和らげるために、非常に多くの活動に取り組んでいます。個人的には、私たちが住んでいる、まさにその環境を見逃すべきではないと感じています。時には、そこが行動する場所、持続可能なプロジェクトに早急に取り組むべき場所だったりするのです。二番目に、苦痛を

和らげ、本当の教育を進めるために活動することが、いかに宗教間の対話を効果的に実行するための素晴らしい方法であるかを、私たちはみな経験しています。

個人的な経験をお話しして締めくくりたいと思います。約20年前、インドのムンバイをひどい洪水が襲いました。当時、私はそこに住んでいました。水が町に浸入してきて、あちこちで大被害が出ました。私が自分の宗教コミュニティとともに住んでいた周辺のスラムも被害に遭いました。友達と一緒に、災害にあった家族を訪問するために歩き回りました。目の前の絶望感を目撃して、そこの数人の人と一緒に、急を要する問題のいくつかを解決するのに役立とうと、足を踏み入れることを決心しました。「ウディシャ・プロジェクト」はこうして、ムンバイのはずれにある私たちの地区で生まれました。それは小さい事業ですが、私たちが住んでいるその場所で活動を始めました。そこが私たちが変化を起こせる場所だからです。今は、4歳から22歳までの子どもや若者120人を支援していますが、20年を経て、もっと多くの人の生活を変化させるのに貢献しようとしています。最初から、このプロジェクトは子どもたちに本物の健全な教育を保障することに重点を置きました。競争の非常に激しいムンバイの学習環境では、この地域のスラムの子どもたちは試験に合格するチャンスはありません。「ウディシャ・プロジェクト」は、100人以上の子どもたちに対して、午後の授業が受けられるように努力をし、今では最終試験を受けられるようになりました。彼らは試験に合格できるということだけでなく、素晴らしい成績をとることで優秀であることを証明しています。これにより、市のよいカレッジに進学することができ、なかには卒業まで進むことができた子もいます。1997年に勉強を始めた子どもの多くは、今では雇用され、その中には、自分の生計や両親のために国外で働いている者もいます。このことは、スラムの子どもたちと周囲の豊かな地域出身の子どもたちとの間に対話の文化を生みだし、未来の生活に大きな希望を与えています。

これはミクロレベルの小さい例ですが、私たち一人ひとりが、問題の側よりも、解決する側に常に立つことができるということを、非常によく表しているのです。

西原　フランシスコ教皇様のメッセージなどを引用しながら、教育をより人間的なものに、また対話の文化に貢献すること、また教育を通じて希望の種をまくことを命じられていることを思い起こす、そのことが宗教間対話の目的であるとのことでした。ありがとうございました。

続きまして、ガンジー財団創設者のガンジー様からお話をいただきます。

ガンジー（ヒンドゥ教）

このテーマを考える上で重要なファクターは、「貧困」と「教育」です。この二つは互いに関連しています。教育がなければ、貧困から抜け出すことが難しく、貧困に苦しんでいる状況では、質の良い教育を受ける機会が制限されてしまうからです。

では、この悪循環を打破するためにはどうしたらよいのでしょうか?

経済・貧困・教育の間に関連性を見出したマハトマ・ガンジーは、人々の文化、生活、ニーズに根ざした教育に重きをおく新たな教育プログラムを提唱し、心身と体と精神の発育に力を注ぎました。この新しい制度は、性別や階級、カーストといったに障壁に関わらず、あらゆる人が享受することのできる普遍的なものでした。ガンジーは、「知性ある真の教育は、手足や目耳鼻をはじめとする身体器官の適度な運動と訓練によってのみ実現される。子どもの教育は、役に立つ手仕事を教えることから始め、学び始めてすぐから生産的な仕事ができるようにするのがよい。こうした教育システムによってのみ、心と精神は最大の発展を遂げる。一方、あらゆる手仕事は、今日のように機械的に行われるのではなく、各プロセスがなぜ、何のために行われているかを子どもたちが科学的に理解できるよう、正しく教えられなければならない。こうしたことを確証もなく提案しているのではなく、私自身、サンダル作りや糸紡ぎを教える中で、よい手応えを感じている。村の産業を媒介とした基礎教育の伝播という私の構想は、極めて広範囲にわたる影響をはらむ、静かな社会革命の原動力となるだろう」と言っています。

園芸、農業、酪農、紡績、その他の村の工芸といった経済的生産活動と連携することで、各村の学校が自立することができます。さらには、算数や理科や音楽や文学、レクリエーションと融合することで、労働を楽しいものにすることもできます。

何年か前に、イタリアの子どもたちが書いた『イタリアの学校変革論―落第生から女教師への手紙』という本を読みました。彼らが住んでいるのはバルビアナという小さな村です。本のレビューによれば、「この本は、貧

しい農家の子どもたちが、学校という教育システムで経験する窮状の物語。中産階級や裕福な家庭の子どもたちが、難なく学校生活に溶け込み、担任の先生に気に入られる一方で、貧しい家庭の子どもたちは無知だというレッテルを貼られて、からかわれることへの怒りの声でもある」と書かれています。

著者である貧しい田舎の子どもたちは、現行の教育システムに一石を投じようと、勇気を出して、富裕層のニーズに合わせて設計された教育システムに馴染もうとする中で直面してきた、自分たちの困難について書いています。色々なことが書かれている中で印象に残っているのは、多くの教師たちが、貧困層の子どもが抱える生活上の困難や学校に通う大変さを理解していない、ということです。授業内容も、貧困層の子どもたちの経験値を視野に入れておらず、富裕層の子どもたちのニーズに見合うことが重視されているそうです。したがって、貧困層の子どもたちは明らかに不利な状況に置かれ、そのことが原因で、学習意欲を失うという連鎖が起きています。

異なる対象者に異なる教育を提供する必要はあるのでしょうか？　すべての人に有効な、一つの教育システムを確立するべきなのでしょうか？これは、多くの国で議論されている難しい問題です。南アフリカでは、アパルトヘイト時代に人種間で異なる教育が行われていました。ただし、これは一つの人種に所属する子どもたちには、学習内容や学習法において多くの機会を提供する一方、別の人種に属する子どもたちには学習機会を制限することで、前者の子どもたちを優遇するよう意図された抑圧的なシステムでした。しかし、すべての人にとってよりよい成果をもたらすことを目的に、教育を差異化することもできるのではないでしょうか。この本では、新しい革新的な教育システムが導入され、学習を強要されなくなったとき、学習者に学習意欲が芽生えたという興味深い例が紹介されています。

入学する時点で、富裕層の子どもと貧困層の子どもとの間に知識の差があるにも関わらず、教育システムには富裕層の子ども向けのバイアスがかかっているため、貧困層の子どもには明らかに不利な状況がある。そこで著者らは、学校のカリキュラムに彼らの状況も汲みとること、教育は彼らのニーズや状況にも見合う必要があると学校側に提案します。さもなければ、自分たちが学力不足で劣っていると感じるためだけに、学校に来ても仕方がない、知識の多様性がきちんと理解されれば、彼らの持つ知識や知恵も、富裕層の子どものそれと同じ価値を有しているはずだと。

ここからわかることは、学習は学校だけで生じるものではないということです。子どもたちは空っぽの器で、学校がそこに知識を注ぎ込むわけではない。教育を考える上で、この考え方は極めて重要です。子どもたちはいつか学校を卒業していきます。その時に、自分の能力に誇りを持ち、これから待ち受ける困難に自信を持って立ち向かうことができなければなりません。本に書かれた子どもたちは、彼らが享受するべき理解と評価を得られなかったために、自分に対する否定的なイメージと落胆、不安を抱えたまま卒業していくことが読み取れます。

子どもの思考形成において、両親、教師、友人、親戚たちは、とても大きな影響力を持っています。多くの場合、大人が手本を示すことで学習は喚起されます。自分たちが実践していないことを、子どもに教えることはできません。ですので、よい教師または親が最初にするべきことは、教えようとしていることを自ら実践し、子どもたちが一挙一動をみていることを意識し、話す言葉一つ一つにも気をつけることです。周囲の大人の手本こそが、子どもたちの未来の行動規範となるのです。

次にするべきことは、学習者である子どもの関心と彼らがすでに持っている知識を、カリキュラムに反映させることです。また、既に持っている知識が間違ったものであれば、修正する必要もあるかもしれません。教育の現場には、繰り返し引用される多くの神話が存在しています。よい教育者は、こうした神話の存在を認識し、適切な対応をとる必要があります。学習とは、高収入や社会的地位を得るために取得する学位のことではなく、知識の泉をより豊かにするプロセスであるべきです。

三つ目にするべきことは、心身と精神のバランスを意識することです。もしお腹が空いていたら、その子は学習に集中することができないでしょう。きちんと休息を取れていない子も、集中することはできません。ですから、子どもの栄養と身体的および精神的なニーズにも気を使う必要があります。たとえ1日1回の学校給食だったとしても、栄養バランスのよい食事の提供やストレス・疲労とうまく付き合う方法を伝授することは、子どもの心と身体をケアする一助になります。本には、遠方から徒歩または交通機関を乗り継いで登校する子どもたちの様子も書かれています。そうしてやっとたどりつた学校で、尊重されることなく扱われたら、彼らは落胆し、学校が嫌いになってしまいます。そんな時こそ、子どもの知識欲を発達させることが重要になってきます。子どもの関心を刺激するには、教師によるインタラクティブな指導法が最も効果的です。

また、子どもの悪い面を叱るより、よい面を褒めることの方がはるかに効果的です。さらには、子どもがしてしまうであろう間違いを気にするよりも、やろうとしている気持ちを認めてあげることも重要です。よい教育者は、子どもをたしなめるのではなく、どうして間違いが生じたのか、その原因を解明することでしょう。

四つ目、そして最後にするべきことは、あらゆる教育が有意義であるためには、常に倫理と道徳の視点を持ち続けることが必要です。それらは各授業を通して教えることもできますが、別途、話の読み聞かせや、よい倫理実践を通して学ぶこともできます。暴力を抑えるのは心で、心を決めるのは教育です。教育では宗教間の相互尊厳をうながすべきです。信仰、尊敬、道徳が重視される教育に変えていく必要があると思います。

西原　ありがとうございました。貧困と教育の悪循環を打ち破る具体的な方策をご指摘いただきました。

それでは、世界ゾロアスター教徒文化財団理事長のホミ・ダラー先生からお話をいただきます。

ダラー（ゾロアスター教）

インドは新時代の入口に立っています。さまざまな分野で目覚ましい進歩を遂げてきました。２０１７年２月２日には１０４基の人工衛星の打ち上げに成功し、世界記録を塗り替えました。ハーバード大学国際開発センターの最新報告（２０１７年７月）によれば、インドは経済成長率が最も高く、二〇二五年まで７・７％で成長する見込みです。インドはイノベーションでアジアのトップに立ち、世界でも第３位につけています。大富豪も23万６０００人いますが、貧富の差が広がっています。オックスファムの研究（２０１７年１月）によると、インドでは現在、上位１％の富裕層が総資産額の58％を保有しています。これはインドで所得不平等が悪化している徴候でもあります。

貧困の問題がいかに重要であるかを示すために、三つの重要な報告を取り上げます。２０１６年９月に『ランセット』誌が発表した持続可能な開発目標の評価によると、インドは１８８ヵ国中１４３位です。高度経済成長

にもかかわらず、インドは衛生や大気汚染、死亡率の面で劣っており、他の多くの国々の後塵を拝しています。2016年10月に提出された別の報告、世界飢餓指数を見ると、インドは118ヵ国中97位です。インドは世界最大級の2つの子ども栄養プログラム、すなわち、6歳未満を対象とする統合的乳幼児発達サービスと14歳までの児童・生徒が対象の昼食プログラムを実施していますが、栄養不良は今日に至るまで何百万人もの子どもを悩ませ続けています。

インドは幼児期における脅威の大きさを示すグローバル指数で116位と振るわず、他の多くの国々に後れを取っています。この指数は、2017年6月にセーブ・ザ・チルドレンが発表した最新報告「奪われた子ども時代」に掲載されています。この報告書によると、インドでは毎日3200人を超える子どもたちが、たいてい予防可能な原因で、5歳の誕生日を迎える前に亡くなっています。780万人の子どもたちが学校に通いながら働かされ、822万人が児童労働者として働いています。0～59ヵ月の子どもたちの38.7%が深刻な栄養不良です。5歳未満の子どもたち4800万人が十分に成長しておらず、8400万人が学校に通っていません。これは非常に暗い見通しです。この悲惨な状況は我が国の赤貧と直接関係があります。アメリカの人権活動家ジェシー・ジャクソン師は2014年3月にインドを訪れた際、「貧困は大量破壊兵器だ――貧困と闘う必要がある」と述べました。ジャクソン師はさらに「資本と技術はグローバル化しているが、人権や労働者の権利、女性の権利、子どもの権利はグローバル化していない。それは私たちが成し遂げなければならないグローバル化だ」と語っています。

インド政府は、幼児死亡率の低下と女性の福祉向上のために、いくつかのプログラムを開始しました。2014年9月、インド新生児行動計画が実施されました。インドでは毎年5歳未満の子どもが133万人、生後1ヵ月以内の乳児が75万6000人も死亡しているからです。ビル&メリンダ・ゲイツ財団は、数十億ドルを寄付して村落で貴重な活動を実施しています。この活動のおかげで数百万人の命が救われ、生活状況も変わりました。

不幸にも、人口の時限爆弾が世界に重くのしかかっています。2017年半ば、世界の人口は75億5000万人で、毎年8300万人のペースで増えています。インドの人口は現在13億4000万人と推定され、2030年には15億1000万人に増えるでしょう。インドの貧

困問題を研究するには、人口の爆発的増加といった要因を考慮しなければなりません。年間約1600万人が生まれている中で、政府は追加の住宅や学校、病院、食糧生産などに対処できるでしょうか。毎月100万人の若者が労働力に加わっていますが、彼らの仕事はどこにあるのでしょうか。我が国の人口抑制政策はあまり成功していません。必要なのは多面的な戦略であり、女性の権限を強化すべきです。インドの大部分の地域で、女性は自分が産む子どもの数をほとんど管理していません。これは今も男児にこだわる農村部に特に当てはまります――家族は今後も、まず1人、さらには2人目の男の子を持とうと必死になるでしょう。コンドームを入手しやすくしなければなりません。そうすれば意に反した妊娠の防止に役立つだけでなく、HIV／エイズ対策にもなるでしょう。男女の避妊手術も広く普及させるべきです。タイはコンドームの大規模な使用・普及によって家族安定化を達成しました。

痛ましいことに、インドでは毎日200人の女性が出産の際に亡くなっています。2016年に開始されたPradhan Mantri Surakshit Matriva Abhiyanは、毎月9日に全国の指定病院でかかりつけ医による無料の妊婦管理を提供しています。この制度に基づき、500万人を超える女性が質の高い妊産婦健診を受けています。さらに、560万人以上の妊婦がミッション・インドラダヌシュ・キャンペーンのもとで予防接種を受けました。家族計画はインドで最も重要的な保健プログラムの一つです。インドは目覚ましく進歩しており、過去10年間に出産率が2・7から2・1まで低下しました。政府は保健制度に、注射や週1回の無料のピルといった避妊方法も導入しています。

政府の推計によると、これらすべてのプログラムのおかげで、2017年には1億3700万人近くの女性が現代的な避妊法を利用しています。この利用の結果、3900万件の望まない妊娠が防止され、ほぼ1200万件の危険な妊娠中絶と4万3000件の妊産婦死亡が回避されるでしょう。そうなれば貧困水準も低下するはずです。

貧困を根絶し、飢餓や栄養不良の苦難と闘い、教育水準と就学率を高め、効果的な保健インフラを確保するために、インドは積極的に人口を抑えなければなりません。

中国の一人っ子政策は妊娠中絶の強制によって実施され、これは人権侵害でした。2015年10月、中国は40年近く続いた旧政策を廃止し、夫婦が2人目の子どもを産めるようにしました。以前の政策により、中国全土で

4億人以上の出生が防止されました。中国は、人口過剰を予防して経済成長を促進したと主張しています。

「教育は世界を変えるために利用できる最も強力な武器だ」――ネルソン・マンデラ

インドにおける大衆教育の問題は、他の要因も関与しているため、それだけを取り出して研究することはできません。

ノーベル賞を受賞した子どもの権利活動家カイラシュ・サティーアーティは2016年11月、世界の軍事費は年間1兆6760億ドルを超えていると述べました。この驚異的な予算のうち、子どもたち全員を小学校に通わせるために必要な金額はわずか220億ドル――世界の軍事費の4・5日分にすぎません。彼はさらに、全世界で1億6800万人の子どもが働き、550万人が奴隷状態にあると指摘しています。人身売買ビジネスは、6年ほど前には450億ドルでしたが、最新の数字では1500億ドルに拡大しています。

サティーアーティはさらに、インドは世界で最も急成長している経済だが、児童奴隷や人身売買、危険な職業への従事、麻薬の密売など、最悪の形態の児童労働の汚名を着せられていると指摘しています。インドには、学校に通っているはずの年齢なのに通っていない18歳以下の子どもが2億人います。6000万人の子どもが一度も学校に行ったことがなく、1億4000万人が学校を中退しています。これについてサティーアーティは、負の三角関係（児童労働、貧困、非識字）があると主張しています。親が極貧で失業していれば、子どもは働かざるを得ません。2017年7月にインドを訪れたシンガポールのターマン・シャンムガラトナム副総理は、2017年デリー経済秘密会議で「インドにとって最大の課題は雇用だ」と述べました。

サティーアーティはさらにこう言います。「教育は2009年教育権法に定める基本的権利として認識されている。しかしながら、実施の失敗と政策ギャップが原因で教育効果が低下している」。毎年6月12日を児童労働反対世界デーとして記念するという2012年の国際労働機関による決定は、前向きな一歩でした。インド政府の福祉制度、とくに昼食制度のおかげで、子どもの就学率が大幅に上昇して児童労働が減少した、と彼は指摘します。サティーアーティは、宗教指導者が人身売買と児童労働に反論すべきだとさらに示唆し、児童福祉に取り組もうという政治的意思と社会意識が足りないと述べています。

少女に関する限り、インドは不平等との闘いに惨敗しています。２０１７年７月に国際ＮＧＯオックスファムと開発金融インターナショナルがまとめた不平等指数レポートで、インドは１５２ヵ国中１３２位でした。この指数は、不平等の削減に対する取り組みによって各国を評価しています。インドでは現在も未成年者の結婚が続いており、女児の教育の大きな妨げになっています。２０１４年９月に提出された国連報告によると、インドは世界で2番目に未成年者の結婚が多い国です。未成年者の結婚は違法ですが、２０１１年の国勢調査によると、インドには10～14歳の年齢層で離婚を経験している未成年者が１万２１０５人おり、さらに数千人の未登録者がいます。

女児が直面しているもう一つの災難は、女の胎児の堕胎です。女児の生存のための闘いは子宮のなかで始まります。２０１１年の国勢調査を見ると、合計３８００万人の女性が行方不明になっています。アクション・エイドの報告書「姿を消す娘たちを探して」（２００８年６月）によれば、インドでは過去20年間に１０００万人以上の女の胎児が親に殺されています。

とくに女児向けに政府が開始した重要なプロジェクトは、Beti Bachao Beti Padhao（女児の保護と教育）です。要するに女の子に、生まれ、愛され、成長する機会を与えなければなりません。このプロジェクトの目的は、現在アンバランスな男女比や少女の栄養状態を改善し、適切な教育を提供することです。２０１７年７月９日に元インド大統領のプラナブ・ムカルジー氏が開始した別のプロジェクトは、僻地に教育を導入するための「Swayam」と「Swayam Prabha」でした。この大規模公開オンライン講座（ＭＯＯＣ）プラットフォームは、質の高い教育を提供します。誰でも、どこでも、いつでも利用でき、１００万人の学生が同時に受講できます。今のところ、ポータルで４０８のコースを利用することができます。これらの講座はデジタル教室を通して提供され、オンライン教材を無料で入手できます。

ラトナ・ニディがアリババ・グループおよびクロスワーズと協力し、サービスが行き届いていない地域に教育を提供しているプロジェクトもあります。これは２０１６年８月18日に開始されました。このプロジェクトはミッション・ミリオン・ブックス（ＭＭＢ）という名称で、インド国内の１万の学校や大学に１００万冊の本を無料で寄贈しようとしています。すでに数千人が20万冊を寄贈しました。さらに、21年前に実業家のアナンド・マヒンドラがナニ・カリ・プロジェクトを開始し

ました。このNGOは、これまでにインドの僻地で31万人以上の少女の教育を支援してきました。チャイルドファンド・インターナショナルは、僻地の少女に必要性の高い自転車を与えて通学できるようにし、教育を受け続けられるようにしています。これは現在インドをはじめ11ヵ国に普及しているドリーム・バイク・プログラムです。

西原　インドの具体的状況からお話をいただきました。貧困を漠然とした概念として語るのではなく、具体的なデーターをもってその根源を探らなくてはならないとのことでした。ありがとうございました。

続いて、アジア宗教者平和会議事務議長のディン・シャムスディーン先生にお願いします。

シャムスディーン（諸宗教対話組織）

国家元首・政府首班経験者のグループであるインターアクション・カウンシルによると、いま世界中で被害が蓄積しています。これらの被害は貧困、非識字、後進性、不公正、差別、環境破壊、多様な暴力の形で表れており、貧困と非識字の二つがとくに目立ちます。

貧困と貧困線以下の生活は、世界の多くの地域、特にアフリカ、アジア、ラテンアメリカで一般的に見られる現象です。世界銀行が発表した世界の貧困に関する最新データによれば、約7億6,700万人が国際貧困線（1人当たり1日1・90ドルの所得）以下で生活しています。1日の最低所得を1人当たり1ドルまで引き下げると、貧困者の数は10億人を超えます。Max Roser and Esteban Ortiz-Ospina によると、国際貧困線は極めて低い水準にあります。実際のところ、この低水準以下の生活を表現するには「極貧」という言葉が適切です。極貧はまさに最も困窮している人々を表すがゆえに、この

状態に焦点を合わせることが重要です。しかし、国際貧困線よりかなり上の生活条件も貧困・困窮と表現できる点を指摘しておくことも重要です。したがって、ここでは1・90ドルの国際貧困線より高い貧困線の下で生活する人々のグローバルな分布も取り上げます（"Global Extreme Poverty", Our World in Data, 27 March, 2017）。

非識字も同様で、依然として世界的な問題です。世界の識字率は男性が90・0%、女性が82・7%です。この率は国によって差があり、先進国99・2%（2013年）、オセアニア71・3%、南アジア・西アジア70・2%（2015年）、サハラ以南アフリカ64・0%（Wikipedia、2015年）です。非識字は発展途上国で特に広く見られます。南アジア、アラブおよびサハラ以南のアフリカの国々は、非識字率が約40～50%と最も高い地域です。東アジアとラテンアメリカの非識字率は10～15%ですが、先進国の非識字率は数パーセントです。

この問題のもう一つの側面は子どもの非識字です。読み書き能力は人間の潜在能力を解き放ち、発達の基礎となります。健康状態を改善し、雇用機会を広げ、より安全で安定した社会を生み出します。しかしながら、2013／2014年のユネスコ報告によると、世界中で2億5000万人の子どもたちが読み書き・計算の基礎学力を身につけていません。そのうち5700万人――恵まれない生い立ちの子どもや紛争地域に暮らす子ども、障害児、少女が不釣合いに多い――は、そもそも学校に入学していません（All Children Reading, 2017）。非識字の問題は各国の教育水準と密接に関連しています。実施されている教育の水準が高いほど、非識字率が低くなります。非識字の問題はサービスが行き届いていない地域や僻地で目立ちます。

宗教は、世界の貧困・非識字問題を克服するために役割を果たすべきです。これは、とくに多くの国々で十分なサービスを受けていない地域や僻地に暮らす恵まれない人々のために、人道的行動に関して他宗教が連携することによって達成できます。

〈宗教の役割〉

宗教の最も重要な役割の一つは、国内レベルから国際レベルに至るさまざまなレベルで、貧困、非識字、病気、災害から暴力的過激主義やテロまで多くの問題において、人道プロジェクトや開発プロジェクトの成功を支援することです。宗教は、人道プログラムや開発プログラ

ムが効果を発揮するために必要な、強力な正当化の根拠となることができます。宗教的な教え、宗教指導者、宗教法人・団体を取り込むことによって、多くの人道プログラムや開発プログラムがより大きな成功を達成しています。異教徒間の連絡や協力が急速に深まれば、宗教を真剣に受け止める人々が加わるすべてのプログラムの成功率を高めることができます。

これは一方では、宗教が社会に深く根づいており、宗教が人間の現代的問題の解決に役立つ可能性があることを示しています。他方では、万人にとっての恩恵・慈悲としての宗教の意味を実現する方法や、現代生活において宗教に与えることのできるよりよい役割を教えてくれます。

現代においては、人々は宗教を、開発課題の成功を促進する有意義な教示や価値観とみなしていると言えます。宗教が今なお社会で強力に制度化されている多くのアジア諸国とアフリカ諸国の経験によれば、ミレニアム開発目標、さらには持続可能な開発目標の達成が宗教団体によって強力に支援されています。儀式のいくつかの面に違いはあっても、宗教には繁栄と安全、平和を生み出すという共通の使命があります。宗教のこの普遍的な使命は、世界中のさまざまな信仰の人々に、さまざまな分野の開発行為や人道的行動のために建設的なパートナーシップを構築させました。この文脈において、私見によれば、宗教はまさに人類のために神が与えてくれたものである点を指摘しておくことが重要です。したがって、信仰を異にする人々が協力して共通の行動を発展させ、共通の責任で共通の敵に立ち向かわなければなりません。

近代化の過程の恩恵を受けていない恵まれない人々は、開発の犠牲者です。通常、開発は都市部に集中しており、農村や僻地に暮らす人々は無視されています。その結果、それらの人々は十分なサービスを提供されず、教育を受けず、貧しい状態に置かれたままです。発展途上国や低開発国の開発は多くの場合、非識字と貧困の悪循環を生み出しています。そのような犠牲になっている層、主に貧困層と読み書きのできない人々に配慮することは、社会の責任であるとともに宗教の責任でもあります。すべての宗教が信奉者に人間の救済に取り組むよう教えているため、その悪循環を好循環に変えるのは宗教の高潔な責務です。

そうすることによって、さまざまな信仰の人々が、サービスの行き届いていない地域や僻地でプロジェクトを

実施することによって共同作業に従事することができます。踏まなければならないステップが三つあります。第一に、年齢別に人々のニーズを確認するために実態を調査すること。第二に、戦略計画に従って適切なプログラムを立案すること。第三に、より自発的な方針と持続可能な開発に基づいてプログラムを開始・実施することです。このアプローチは貧困改善プログラムと教育促進プログラムの両方に適用されます。

貧困撲滅プログラムは権限強化戦略を利用し、魚ではなく「釣り針」を与えて人々が経済的に自立できるようにするでしょう。このプログラムには起業家向けの訓練やオリエンテーションを盛り込み、資本や練習、実習によって人々が事業を経営できるよう支援するマイクロファイナンス機関を設立できるでしょう。この経済権限強化プログラムの好例は、社会において協同組合かグラミン銀行モデルを創出することです。この機関は、ひいては人々の自己開発を支援します。けれども、このアプローチは、最初に十分な資本または回転資金と、発展力のある販売網を必要とします。回転資金は出資機関から、あるいは協同組合を通して地域社会内部から調達することができますが、各製品を地域外に販売するためにネットワークを構築する必要があります。インフラの不備が大きな障害になるかもしれないので、他の地域に対して門戸を開くことが不可欠です。

人々が経済的に自立できるようにする権限強化は、サービスが行き届いていない地域で貧困を根絶する効果的な方法です。喜捨や慈善などの宗教的な教えが重要であり、貧困撲滅のためにうまく実施する必要があります。他者への配慮と他者との共有は、この点で二つの重要な宗教的価値観です。宗教的博愛は、資本主義経済に起因する経済格差や経済的不公平の実行可能な解決策です。

人々の経済権限強化は社会の非識字問題を解決する道を開くでしょう。教育の欠如は貧困に影響を与えるかもしれませんが、貧困もまた教育の欠如を引き起こしています。この二つの問題は同時に解決しなければなりません。宗教団体は、地域社会の教育開発に極めて重要な役割を果たしています。さまざまな宗教系組織が世界中で何千もの学校を運営している事実は、宗教が非識字問題の解決策であるという証拠になるでしょう。宗教が問題の一部であってはなりません。ありがとうございました。

西原　シャムスディーン先生からは、教育の欠如というものが貧困をもたらし、同時に貧困が教育の欠如をもたらすというものでした。それにどう立ち向かうかの重要

性を指摘されました。ありがとうございました。

最後に、フランシスコ修道会諸宗教対話局長のシルベストロ・ベハン先生にお願いします。

ベハン（キリスト教）

「主が平和をもたらしますように！」（アッシジの聖フランシスコ）この祝福は、「アッシジの精神」に沿って組織された、日本での比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」に際して、アッシジ市の中心から、聖なる托鉢修道会フランシスコ派の名において、また、全てのコンヴェンツアル聖フランシスコ修道会から、届けられたものです。

ローマ法王、聖ヨハネ・パウロⅡ世は、1986年10月27日アッシジにおいて祝福された祈りの集いから生まれたメッセージを、私たち全員に実現するよう求め、次の言葉を述べました。

「私たちは、本当の〈アッシジの精神〉を生かし続けなければなりません。それは、一貫性と誠実さのためだけではなく、未来の世代に向けて希望の原動力を与えるためです。『貧しき者（Poverello）』の市において、私たちは継続すべき共通の旅を始めました。それは他の道を探すことを排除しませんし、精神的基盤の上に築かれた確固たる平和に向けた新しい手段を模索することも排除しません」（第25回世界平和の日へ向けたヨハネ・パウロⅡ世のメッセージ、1992年1月1日）。

そのために、ローマ法王はアッシジに赴き、神からの平和の贈り物を祈願するのです。アッシジで、平和の構築に自分自身も参加し、全てのよき信仰の人々をも参加させ、地球の平和への道筋を実際に可能にするために、私たちに貧しくあるよう勧めます。つまり、貧困と平和の間には強い関連があるのです。事実、貧困は平和の源のように思われます。「平和を模索する者は、貧しい者に手を差し伸べなければならない」。

人類の歴史を通じて、この世界の富める者は、弱者を犠牲にしてきました。しかし、進んで質素な生活をするという選択をし、貧困の中で喜んで生きている人もいます。アッシジの聖フランシスコは豊かな家庭に生れましたが、貧しくなることを選択しました。

彼は、「貧しい者を熱烈に愛する」ことから始めました。自分の綺麗な衣服を貧しい者の衣服と交換し、彼ら

と一緒にいようと努めました。それを楽しんでやりながら、貧しい者たちの見方で世界を見ることを学びました。父親の織物を売りさばいては、貧しい者にその利益を与えました。

聖フランシスコは、自分のような生活をしたいと欲する者すべてに、次のように語っています。「全ての兄弟は、われらの主、キリストの謙虚さと貧しさとに続かなくてはならない。そして使徒が言うように、〈食べ物と衣服があれば、それだけで満足しよう〉ということ以外、私たちはこの世では何も所有するべきではない」。

これは、アッシジの聖フランシスコの教えで、困難ですが学ぶべき必要な教訓です。「何も自分のものは持たない」生活をするという、彼が選んだ、アッシジの「貧しい小さき男」のクリスチャンの生活の試みは、至上の愛やお互いへの尊敬がゆきわたった町の生きたモデルであり、実際に可能なのです。私たちのような文明では、人々は自分の人生を経験や所有物を追い求めることに捧げており、極端に貧しいことを受け入れるというアッシジの聖フランシスコの選択は、かえって私たちを強く感動させます。なぜなら、自分で選択して公然と貧しくあることは、人の人生に新しい場所を切り開いていくからです。

その書物のなかで、アッシジの聖フランシスコは、所有と超然を表す動詞や単語をしばしば繰り返して使っています。例えば、持つ、所持する、大事にする、独り占めする、所有する、所属する、貪欲、強欲、利害関係、などです。それに対して、放棄する、捨てる、失う、嫌う、与える、寄付する、謙虚さ、簡潔さ、貧しさなどが反対にあります。

聖フランシスコは、彼に従う者たちに、「自分の所有するものを何も持たずに」生活すること、すなわち物質的な所有物から離れ、名誉や自尊心、知識、責任や役割、自分の意志、利点、才能、そして自分自身の人生すら離れることを強く勧めるのです。

フランシスコ修道会の兄弟は、「卑しい、軽蔑された人、貧しく弱い人、衰えた者や世間からのけ者にされる人、そして通りで物乞いをする人と会話するときに喜びを感じるべきである」(Regola non Bollata 9)。貧しいということは、こうした人々との団結心、友情に向けて、心を開くということです。

ローマ法王フランシスコでさえも、2013年の最初の一般謁見のときに、貧しき者に自分の思いをはせて、人々に、「他者と交流する必要性、片隅に追いやられた存在の元に行くこと」を勧めました。これは、力、成功、

効率性、外見の文化を癒すことができる、カウンター（逆向きの）文化でもあります。それは、人間の尊厳を取り戻し、特に貧しいものを救済することを目指す公平無私な奉仕の文化なのです。なぜならば、自分自身の人間性以外に、愛される他の手段を持ってはいないからです。

フランシスコ修道会の貧しさは、経済的、社会的、心理的、神学的、人類学的な側面を持っています。それは、ただ物についてだけではなく、特に、態度、物事をする方法、生き方、あり方、周りの全てのことに対する対処の仕方に関わるもので、それは、人とか物とか、可能性とかは関係ないのです。フランシスコ修道会の清貧は知恵を育てます。なぜなら知恵が、生き方や、人生そのものや、この人生で起こる全ての事をどう処理していくかという方法を生み出すからです。全てのものや所有している全ての財産を捨てることは、やがて私たちに新しい地平線を広げ、新しい見方を開いてくれるのです。

フランシスコ修道会の論理によると、貧しさゆえに、人は神、人、神の創造物との正しい関係を築けるのです。このようにしていると、この見方に立つ人の人生は、人間性は全ての創造物を愛する神に明らかに依存していることを示す証拠となり、物質的な所有は全てのよきものに対する神の贈り物であることがわかります。「自分のものを何も持たずに生きること」で、アッシジのフランシスコは、平和が神の愛や慈悲から賜った贈り物であることがわかったのです。そして、「神、全能の神、何よりも絶大なもの」に立ち戻ります。なぜなら、「すべてのものは主のものであり、私たちは全てについて主に感謝を捧げます。それは、全てが主から始まっているからです」。

フランシスコ修道会の論理によると、愛や友愛は、世界の悲惨さを軽減する努力の実際的な基盤です。何よりも貧しい者を深く愛し、彼らの人間的でない状況をいとわなかったアッシジのフランシスコは、本当に貧しい者の味方なのです。兄弟の中の兄弟として生きることで、会話や友情を築き、日々の喜びや困難を分かち合い、全ての物も全ての人も受け入れるのです。しかし、「申命記」が私たちに警告しているように、私たちは現実的にならなければなりません。「地球上にはいつも貧しい人々がいるでしょう。だから、あなたの土地の貧しく助けを必要としているあなたの仲間に、惜しみなく与えてください」。一方、エルサレムのキリスト教会は、「彼らの中に貧しいものはいなかった」という理由で賞賛されました。なぜなら、彼らは、全てを共有しているからです。

敬虔なクリスチャンに呼びかける中で、ローマ法王フ

ランシスコは次のように言いました。「われらの主に倣って、われらキリスト教徒は兄弟の苦悩を見つけ、それに触れ、対処し、効果的に行動して、その苦悩を和らげるよう命じられています」。貧しい者に与える援助は、常に世界中のフランシスコ修道会全員の重要な務めでした。しかし、十分ではありませんでした。なぜなら、人間の発展のために自分たちの努力を高めることも同じように必要だからです。人々に食物を与えるだけでは十分ではないのです。尊厳のある丁寧なやり方で、彼らが日々の糧を得ることができるようにしなければなりません。こういうわけで、私たちが注目すべきもう一つの重要な側面は、新しい世代の教育であり、それは平和な未来を期待する上で重要なポイントなのです。

世界中での様々なミッションの中で、フランシスコ修道会は、様々な教育プロジェクトを展開して弱者を支援し、直接的に、あるいは地域の政府と協力しながら、新しい世代を形成してきました。彼らは、障害を持った子どもたちや高齢者、貧困家庭、未来の社会を代表する多くの若者を支援しています。

現代は、「豊かさ」の中に多くの貧困が存在していますが、それは、「貧しさ」の中の豊かさによって癒され得るものです。ただ「豊かさ」と「貧しさ」が出会い、お互いを知ることができればいいのです。フランシスコ修道会の理論では、世界の救済は貧しき者によって確かなものとなるでしょう。その貧しき者とは、本物の貧しさです。清貧の誓いを決して立てたことはないが、常にその手に何も持たない貧しき者です。神が彼らの手に穴を開けたため、彼らはその手にどんな富をも持つことができなかったのです。世界を救う貧しさとは不思議な使命です。それは、たとえ金を嫌っていないとしても、それでも本当に金を欲するわけではなく、子どものようにただ金を夢見るだけというものなのです。

神と平和の下僕であるブラザー・フランシスコの例のなかに、今日の私たちは、私たちの使命を、「平和の手段」として再発見したいものです。密かに希望を持つ「貧しき者」のように、分裂させる壁ではなく結合させる「橋」のように、謙虚で貧しい手段として、従順で透明で、傷を与える不正の手段ではないものとして、自分たちの使命を再発見したいものです。

現代世界は、「真摯な平和の預言者」を求めています。恐れや疑念から解き放たれた若い創造的な精神を求めています。全てに平和とよきことを！

西原　教育と貧困の連鎖を我々はいかに断ち切るのか。

全ての国が真の豊かさを追求しながら、貧困に終止符を打つために本物の教育を行う重要性。それに向かって、全ての宗教者が取り組むことの重要性を、本日の分科会を通して確信しました。

ありがとうございました。（拍手）

比叡山宗教サミット30周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

世界平和祈りの式典

平成29年8月4日（金）比叡山延暦寺

主催者代表挨拶

本日ここに世界の代表的宗教指導者の皆様と共に比叡山に集い「比叡山宗教サミット三十周年記念『世界宗教者平和の祈りの集い』」を開催できますこと、神仏に深く感謝を申し上げ、また開催に至るまでご尽力を賜りました関係各位に厚く御礼を申し上げます。

これまで私どもは、毎年の「祈り」とは別に、日本宗教界の総力を結集して「日本宗教代表者会議」を組織しその節目の年ごとに大きな集いを開催してまいりました。今回三十周年の記念の集い開催は誠に感無量なるものがございます。

さて、現在の世界は抑止力が失われ、地域の力関係が全面に押し出されて、国々は自国の利益のみを最優先する国家主義的な方向へと急速に舵を切ろうとしているように思われます。

日本が置かれているアジア極東地域は、核爆弾の脅威にさらされ、その危機を取り除かんとするため、急速に軍事衝突の危機が高まりつつあります。そのことを深く憂慮すると共に人類の叡智によって戦争が回避されんことを心より切に念じます。

人類は、これまでたとえ実現が難しくても、決して捨ててはいけない、捨てることのできない理想を追い求め続けることで明日に希望を持ち、未来を切り開いてきました。それは、例えば自由であり、また人権や平等という理想のことであります。

その実現に努力した人々は時に嘲笑され、時に危険者扱いされました。しかし、それらを求め続ける努力がなければ、世界は未だに暗黒のままであったでしょう。私達の世界平和を求めるサミット三十年の歴史も、それら人類の未来に向けてのひとつの歩

みでありたいと願っております。

日本国憲法の前文には「われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去」という一文があります。

現在のところ、それはまだ理想にとどまっております。

しかし、その「理想」にむけて努力することが、私達の団結と連帯をより一層強固なものとします。

私たちは、それらに加えて地球上のすべて人々が、あらゆる恐怖や差別、貧困から免れるよう、そして世界平和が実現されるように共に手を携えて参りましょう。

今回の「平和の祈り」では世界を覆いつつある「排除と孤立」ではなく「相互理解と連帯」こそが人類に平和と繁栄をもたらすものであることを世界に示したいと存じます。

信仰を持つ者どうしの連帯と信頼がより深くなり、固い絆で結ばれ、そのことが人類の未来と平和の実現に繋がることを心から願ってやみません。

神仏の深いご加護を念じます。

二〇一七年八月四日

日本宗教代表者会議名誉議長
天台座主　大僧正　**森　川　宏　映**

比叡山宗教サミット30周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

資料

比叡山宗教サミット30周年記念
「日本宗教代表者会議」経過報告

・平成28年10月5日（水）国立京都国際会館
第1回常任委員会・運営委員会合同委員会
「日本宗教代表者会議」設立会議
記者会見
「日本宗教代表者会議」発会式

・平成28年12月9日（金）立正佼成会京都教会
第1回事務局会議

・平成29年2月10日（金）天台宗務庁
第2回事務局会議

・平成29年3月29日（月）立正佼成会京都教会
第3回事務局会議
第1回各部会

・平成29年4月27日（木）真宗教化センターしんらん交流館
第4回事務局会議
第2回各部会

・平成29年5月11日（木）天台宗務庁
第3回会議部会

・平成29年5月16日（火）天台宗務庁
第3回総務部会

・平成29年5月18日（木）天台宗務庁
第3回渉外・接遇部会

・平成29年5月22日（月）天台宗務庁
第3回儀典部会

・平成29年6月8日（木）上野寛永寺両大師堂
第1回比叡山メッセージ起草委員会

・平成29年6月9日（金）天台宗務庁
第4回総務部会

・平成29年6月19日（月）真言宗智山派宗務庁
第5回事務局会議
各部部会

・平成29年6月28日（水）ウェスティン都ホテル京都
第2回常任委員会・運営委員会合同会議
記者会見

・平成29年7月20日（木）天台宗務庁
第6回事務局会議
各部部会

・平成29年7月25日（火）東京プリンスホテル
第2回比叡山メッセージ起草委員会

・平成29年8月2日（水）グランドプリンスホテル京都
第7回事務局会議
各部部会

日本宗教代表者会議規約

1．本会議は日本宗教代表者会議（The Japan Conference of Religious Representatives）＝ J.C.R.R. と称し事務局を比叡山延暦寺内に置く。

2．本会議は比叡山宗教サミット３０周年記念世界宗教者平和の祈りの集いの主催団体として設置する。

3．本会議は日本宗教連盟及び日本宗教連盟協賛五団体の協力を得て前条の目的に賛同する代表的宗教者をもって構成する。

4．本会議の運営をはかるため次の役員を置く。

（1）名誉議長	1　名	名誉顧問	若干名
顧問	若干名	相談役	若干名
参与	若干名	議長団	若干名
常任委員	若干名	事務総長	1　名
運営委員	若干名	事務次長	3　名
監事	3　名		

（2）イ、名誉議長・名誉顧問は本会議を代表する。

ロ、顧問、相談役並びに参与は本会議の運営に助言を行う。

ハ、議長団は比叡山宗教サミット３０周年記念世界宗教者平和の祈りの集いにおける会議を運営すると共に常任委員会に出席し助言を行う。

ニ、常任委員は常任委員会を組織し本会議の業務を議決する。

ホ、事務総長は本会議の事務を統理する。

ヘ、運営委員は運営委員会を組織し常任委員会に提案する事項の立案及び議決された事項の執行にあたる。

ト、事務次長は事務総長を補佐し事務を推進する。

チ、監事は本会議の業務並びに会計を監査する。

5．本会議は必要に応じて各種委員会並びに事務局に顧問・担当部を置くことができる。

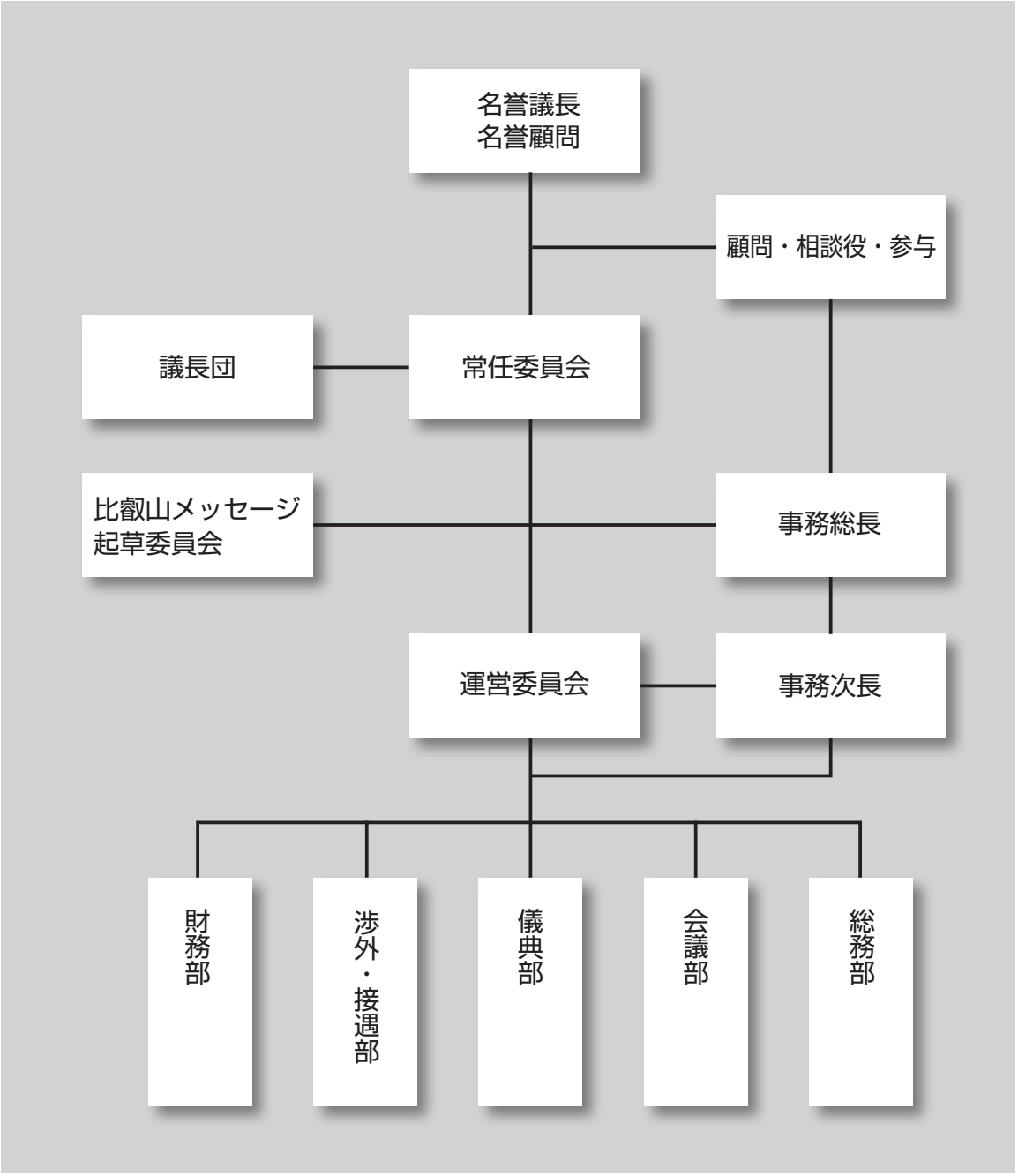
6．本会議の経費は寄付金その他をもって充当する。

7．その他必要な事項は、常任委員会の議決を経て定めることができる。

8．本会議は所期の目的を達成した後、常任委員会の議決を経て解散する。

9．この規約は平成２８年１０月５日より施行する。

日本宗教代表者会議組織図



海外招請者一覧

順不同・敬称略

仏教		
パロップ・タイアリー	世界仏教徒連盟（ＷＦＢ）事務局長	タイ
春　光	韓国仏教宗団協議会上席副会長	韓国
ベランウィラ・ウィマララタナ	スリジャヤワルダナプラ大学学長	スリランカ
キリスト教		
ペニエル・ラジクマール	世界教会協議会（ＷＣＣ）プログラム部長	スイス
アンデシュ・ウェジリド	世界教会協議会（ＷＣＣ）ヨーロッパ総幹事	スウェーデン
エマニュエル	ギリシャ正教会フランス府主教	フランス
ジョン・トン・ホン	ローマ教皇御名代・カトリック香港教区司教（枢機卿）	バチカン
ミゲル・アンヘル・アユソ・ギクソット	ローマ教皇庁諸宗教対話評議会（ＰＣＩＤ）次官	バチカン
シルベストロ・ベハン	フランシスコ修道会諸宗教対話局長	イタリア
ジョン・オナイエケン	アブジャ大司教区大司教（枢機卿）	ナイジェリア
パンザラン３世	世界福音同盟（ＷＥＡ）諸宗教関係担当共同議長	アメリカ
イスラーム		
ムハンマド・ビン・アブドルカリーム・アルイーサー	世界イスラーム連盟事務総長	サウジアラビア
ファローク・アクビック	アブヌール・モスク代表	シリア
ムスタファー・ツエリッチ	前ボスニアイスラム共同体最高指導者	ボスニア
ユダヤ教		
デビット・ローゼン	米国ユダヤ人協会諸宗教対話部長	イスラエル
ヒンドゥー教		
エラ・ガンジー	ガンジー財団創設者	南アフリカ
ゾロアスター教		
ホミ・ダラー	世界ゾロアスター教徒文化財団理事長	インド
諸宗教対話組織		
ウィリアム・ベンドレイ	世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）国際事務総長	アメリカ
杉野　恭一	世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）国際副事務総長	アメリカ
ディン・シャムスディーン	アジア宗教平和会議（ＡＣＲＰ）実務議長	インドネシア
アルベルト・クワトルッチ	聖エジディオ共同体事務局長	イタリア
アゴスティーノ・ジョバニョーリ	聖エジディオ共同体アジア地域担当部長	イタリア
ロベルト・カタラーノ	フォコラーレローマ本部諸宗教対話事務局共同代表	イタリア
ファイサル・ビン・アブドゥルラハマン・ビン・ムアンマール	ＫＡＩＣＩＩＤ事務総長	オーストリア

日本宗教代表者会議役員名簿（順不同）

○名誉議長・名誉顧問

役職名	氏名	所属役職名
名誉議長	森川宏映	天台座主
名誉顧問	出口紅	大本教主
名誉顧問	小峰一允	全日本仏教会会長
名誉顧問	髙見三明	日本カトリック司教協議会会長
名誉顧問	北白川道久	神社本庁統理
名誉顧問	深田充啓	新日本宗教団体連合会名誉会長
名誉顧問	庭野日鑛	WCRP日本委員会会長

○議長団

役職名	氏名	所属役職名
議長団	芳村正徳	教派神道連合会理事長
議長団	石上智康	全日本仏教会理事長
議長団	植松誠	日本キリスト教連合会委員長
議長団	田中恆清	神社本庁総長
議長団	保積秀胤	新日本宗教団体連合会理事長

○顧問

役職名	氏名	所属役職名
顧問	新田邦夫	神道修成派管長
顧問	坂田安儀	禊教教主
顧問	菊池重敏	神道大教管長
顧問	柴田尋之	實行教管長
顧問	黒住宗晴	黒住教教主
顧問	村鳥邦夫	御嶽教管長
顧問	巫部祐彦	神理教管長
顧問	千家隆比古	出雲大社教管長
顧問	中西玄禮	全日本仏教会副会長
顧問	田仲日紘	全日本仏教会副会長
顧問	多川俊映	全日本仏教会副会長
顧問	福山諦法	曹洞宗管長
顧問	大谷暢顯	真宗大谷派門首
顧問	伊藤唯眞	浄土門主
顧問	内野日総	日蓮宗管長
顧問	中西啓寶	高野山真言宗管長
顧問	嶺興嶽	臨済宗妙心寺派管長
顧問	田代弘興	真言宗豊山派管長
顧問	江川辰三	曹洞宗大本山總持寺貫首
顧問	田中昭徳	聖観音宗管長
顧問	森田俊朗	和宗管長
顧問	稲山霊芳	念法眞教燈主
顧問	桶屋良祐	念法眞教燈主代行

顧問	岡野正純	孝道教団統理
顧問	菅原信海	天台宗妙法院門跡門主
顧問	堀澤祖門	天台宗三千院門跡門主
顧問	加藤隆久	神社本庁長老・生田神社名誉宮司
顧問	亀田幸弘	神宮少宮司
顧問	本多和夫	平安神宮宮司代務者
顧問	千家尊祐	出雲大社宮司
顧問	中島精太郎	明治神宮宮司
顧問	力久隆積	善隣教聖主
顧問	岡野聖法	解脱会長老
顧問	仲田順和	真言宗醍醐派管長
顧問	西田多戈止	燈園当番
顧問	安田暎胤	法相宗大本山薬師寺長老
顧問	北河原公敬	華厳宗大本山東大寺長老
顧問	大野玄妙	聖徳宗総本山法隆寺管長
顧問	中山善司	天理教真柱

○相談役

役職名	氏名	所属役職名
相談役	齋藤明聖	全日本仏教会理事
相談役	戸松義晴	全日本仏教会理事
相談役	山北宣久	日本キリスト教連合会顧問
相談役	渡邉純幸	日本キリスト教連合会顧問
相談役	叡南覺範	世界連邦日本仏教徒協議会会長
相談役	樋口美作	日本ムスリム協会理事

○常任委員

役職名	氏名	所属役職名
常任委員長	小串和夫	神社本庁副総長
常任副委員長	黒住宗道	黒住教副教主
常任委員	宍野史生	扶桑教管長
常任委員	千家活彦	出雲大社教東京出張所所長
常任委員	柴田良彦	實行教総務
常任委員	鴨下清司	御嶽教宣教部長
常任委員	鈴木顯一	大本本部長
常任委員	釜田隆文	曹洞宗宗務総長
常任委員	但馬弘	真宗大谷派宗務総長
常任委員	豊岡鐐尓	浄土宗宗務総長
常任委員	小林順光	日蓮宗宗務総長
常任委員	添田隆昭	高野山真言宗宗務総長
常任委員	栗原正雄	臨済宗妙心寺派宗務総長
常任委員	芙蓉良英	真言宗智山派宗務総長
常任委員	星野英紀	真言宗豊山派宗務総長
常任委員	守山雄順	聖観音宗宗務総長
常任委員	瀧藤尊淳	和宗宗務総長

常任委員	一宮良範	念法眞教教務総長
常任委員	小堀光實	天台宗総本山延暦寺執行
常任委員	高地敬	日本聖公会京都教区主教
常任委員	網中彰子	日本キリスト教協議会総幹事
常任委員	大塚喜直	カトリック京都司教区司教
常任委員	吉田茂穂	神社本庁常務理事
常任委員	吉川通泰	神社本庁常務理事
常任委員	藤江正謹	大阪府神社庁庁長
常任委員	泉和慶	兵庫県神社庁庁長
常任委員	森正光	奈良県神社庁庁長
常任委員	山本賢司	滋賀県神社庁庁長
常任委員	九鬼家隆	和歌山県神社庁庁長
常任委員	宮西修治	日枝神社宮司
常任委員	打田文博	小國神社宮司
常任委員	西高辻信良	太宰府天満宮宮司
常任委員	九條道成	明治神宮権宮司
常任委員	宮本惠司	妙智會教団法嗣
常任委員	江口陽一	大法輪台意光妙教会理事長
常任委員	石倉寿一	大慧會教団次代会長
常任委員	川端健之	立正佼成会理事長
常任委員	田澤清喜	松緑神道大和山教主
常任委員	岡田光央	崇教真光三代教え主
常任委員	藤原裕康	妙道会教団常務理事
常任委員	赤銅重夫	円応教理事長
常任委員	田中庸仁	真生会会長
常任委員	力久道臣	善隣教教主
常任委員	深田惠子	円応教恵主
常任委員	庭野光祥	立正佼成会次代会長
常任委員	保積志胤	大和教団統理
常任委員	出居徳久	修養団捧誠会総裁
常任委員	北浦幸代	祖神道教団理事
常任委員	道下三夫	パーフェクトリバティー教団ＰＬ教校長
常任委員	中村憲一郎	立正佼成会常務理事
常任委員	杉谷義純	ＷＣＲＰ日本委員会理事長
常任委員	三宅光雄	金光教泉尾教会教会長
常任委員	徳増公明	日本ムスリム協会会長
常任委員	中田善亮	天理教教会本部表統領

○監事

役職名	氏名	所属役職名
監事	久喜和裕	全日本仏教会事務総長
監事	渋谷宣寛	神社本庁監事
監事	鉢呂神龍	新日本宗教団体連合会理事

○運営委員

役職名	氏　名	所　属　役　職　名
運営委員長	山　田　匡　男	新日本宗教団体連合会総局長
運営副委員長	和　多　善　秀	全日本仏教会総務部部長
運営委員	松　田　　一	大本総務
運営委員	永　澤　　穣	神道大教教務部長
運営委員	黒　住　忠　親	黒住教本部公室長
運営委員	薄　井　秀　夫	禊教総務
運営委員	猪　子　　恒	大本東京宣教センター次長
運営委員	栗　田　幸　子	實行教総務補佐
運営委員	松　原　道　一	曹洞宗人事部長
運営委員	東　森　尚　人	浄土真宗本願寺派所務部長
運営委員	下　野　真　人	真宗大谷派総務部長
運営委員	谷　上　昌　賢	浄土宗財務局長
運営委員	川　口　智　康	日蓮宗総務部長
運営委員	長谷部　真　道	高野山真言宗総務部長
運営委員	上　沼　雅　龍	臨済宗妙心寺派総務部長
運営委員	馬　場　修　任	真言宗智山派総務部長
運営委員	小　島　一　雄	真言宗豊山派総務部長
運営委員	掬　池　友　絢	全日本仏教会国際部部長
運営委員	阿　部　昌　宏	天台宗総務部長
運営委員	獅子王　圓　明	延暦寺総務部長
運営委員	宮　下　良　平	カトリック中央協議会事務局長
運営委員	柳　本　　昭	カトリック京都司教区司祭
運営委員	矢　萩　新　一	日本キリスト教連合会副委員長
運営委員	浦　地　洪　一	日本聖公会京都教区司祭
運営委員	山　本　行　恭	椿大神社宮司
運営委員	南坊城　光　興	道明寺天満宮宮司
運営委員	室　田　一　樹	岩屋神社宮司
運営委員	加　藤　芳　哉	服部天神宮宮司
運営委員	瀬　尾　芳　也	神社本庁教化広報部長
運営委員	伊　藤　守　康	明治神宮権禰宜
運営委員	中　村　史　郎	円応教副理事長
運営委員	斎　藤　謙　次	新日本宗教団体連合会事務局長
運営委員	生　田　茂　夫	新日本宗教団体連合会事務局次長
運営委員	佐　藤　益　弘	立正佼成会京都教会教会長
運営委員	澤　田　晃　成	立正佼成会総務部長
運営委員	鈴　木　裕　治	妙智會教団理事
運営委員	國　富　敬　二	ＷＣＲＰ日本委員会事務局長
運営委員	和　田　恵久巳	ＷＣＲＰ日本委員会総務部長
運営委員	可　児　光　永	世界連邦日本仏教徒協議会理事長
運営委員	田　中　朋　清	世界連邦日本宗教委員会事務局長
運営委員	佐　藤　裕　一	日本ムスリム協会理事

○参与

役職名	氏名	所属役職名
参与	勝部盛行	黒住教教務総長
参与	石原秀則	黒住教教団総務
参与	野口知志	御嶽教教務総長
参与	井上慶山	御嶽教代議員会議長
参与	北川茂廣	御嶽教総務部長
参与	百田吉男	御嶽教企画部長
参与	亀井一秋	御嶽教代議員会副議長
参与	大橋昭夫	御嶽教大本庁主事
参与	横井真之	全日本仏教会評議員
参与	松原功人	全日本仏教会評議員
参与	柴田達也	全日本仏教会評議員
参与	宮林雄彦	全日本仏教会評議員
参与	鈴木英全	全日本仏教会評議員
参与	小寺秀仁	全日本仏教会評議員
参与	坂井智宏	全日本仏教会評議員
参与	杜多徳雄	全日本仏教会理事
参与	深澤照生	全日本仏教会理事
参与	新美昌道	全日本仏教会理事
参与	都築哲二	全日本仏教会理事
参与	木村盛雄	全日本仏教会理事
参与	井桁雄弘	全日本仏教会理事
参与	伊藤正導	全日本仏教会理事
参与	一月正人	全日本仏教会理事
参与	小野貴嗣	神社本庁理事
参与	根津泰昇	神社本庁理事
参与	吉田源彦	神社本庁理事
参与	面山浩康	神社本庁理事
参与	櫻井豊彦	神社本庁理事
参与	加藤治樹	神社本庁理事
参与	川村公彦	神社本庁理事
参与	池田剛康	神社本庁理事
参与	岡村吉明	神社本庁監事
参与	田中安比呂	京都府神社庁副庁長
参与	林秀俊	京都府神社庁副庁長
参与	新木直人	賀茂御祖神社宮司
参与	生嶌經和	松尾大社宮司
参与	尾崎保博	平野神社宮司
参与	森壽雄	八坂神社宮司
参与	高井和大	貴船神社宮司
参与	齋藤昌通	大原野神社宮司
参与	橘重十九	北野天満宮宮司
参与	海部光彦	籠神社宮司
参与	文室隆紀	護王神社宮司

参与	松　原　　宏	建勲神社宮司
参与	吉　田　武　雄	豊國神社宮司
参与	高　松　利　行	愛宕神社宮司
参与	粟田口　幹　男	白峯神宮宮司
参与	田　所　貞　文	大阪府神社庁副庁長
参与	足　立　博　史	大阪府神社庁副庁長
参与	芦　立　幸　正	大阪府神社庁参事
参与	中　東　　弘	枚岡神社宮司
参与	中　山　幸　彦	生國魂神社宮司
参与	水無瀬　忠　成	水無瀬神宮宮司
参与	渡　邉　紘　一	坐摩神社宮司
参与	中　塚　昌　宏	阿部野神社宮司
参与	寺　井　種　伯	大阪天満宮宮司
参与	髙　井　道　弘	住吉大社宮司
参与	柳　澤　忠　麿	大阪護國神社宮司
参与	小　谷　真　功	高津宮宮司
参与	津　江　明　宏	今宮戎神社宮司
参与	垣　田　宗　彦	兵庫県神社庁副庁長
参与	善　見　壽　男	兵庫県神社庁副庁長代理
参与	大　部　昭　彦	兵庫県神社庁参事
参与	本　名　孝　至	伊弉諾神宮宮司
参与	西　井　　璋	廣田神社宮司
参与	脇　　延　秀	長田神社宮司
参与	安　藤　範　和	海神社宮司
参与	長　尾　家　典	出石神社宮司
参与	安　黒　秀　幸	伊和神社宮司
参与	吉　井　良　昭	西宮神社宮司
参与	西　本　和　俊	射楯兵主神社宮司
参与	幸　田　精　久	廣峯神社宮司
参与	久保田　梅　継	兵庫県神戸護國神社宮司
参与	飯　尾　義　明	赤穂大石神社宮司
参与	福　本　賀　郎	多田神社宮司
参与	樋　口　俊　夫	奈良県神社庁副庁長
参与	鈴　鹿　義　胤	奈良県神社庁副庁長
参与	中　川　行　夫	奈良県神社庁参事
参与	鈴　木　寛　治	大神神社宮司
参与	花山院　弘　匡	春日大社宮司
参与	久保田　昌　孝	橿原神宮宮司
参与	上　田　安　德	龍田大社宮司
参与	長　岡　千　尋	談山神社宮司
参与	望　月　康　麿	丹生川上神社上社宮司
参与	皆　見　元　久	丹生川上神社下社宮司
参与	日　下　康　寛	丹生川上神社宮司
参与	河　﨑　　宏	吉野神宮宮司
参与	塩　谷　陸　男	大和神社宮司

参与	宮田康弘	奈良県護国神社宮司
参与	吉村光嗣	石園座多久虫玉神社宮司
参与	馬渕直樹	滋賀県神社庁副庁長
参与	犬上　岳	滋賀県神社庁副庁長
参与	笠島実俊	滋賀県神社庁参事
参与	平尾千藏	建部大社宮司
参与	佐藤久忠	近江神宮宮司
参与	垣内宏之	御上神社宮司
参与	奥田素之	阿賀神社宮司
参与	岳　尋幸	日牟禮八幡宮宮司
参与	三家邦明	長濱八幡宮宮司
参与	上野　顯	和歌山県神社庁副庁長
参与	温井敬忠	和歌山県神社庁副庁長
参与	中谷承平	和歌山県神社庁事務局長
参与	吉良義章	竈山神社宮司
参与	奥　重視	伊太祁曽神社宮司
参与	男成洋三	熊野那智大社宮司
参与	丹生晃一	丹生都比賣神社宮司
参与	長澤好晃	鬮雞神社宮司
参与	利根康教	寒川神社宮司
参与	加納理孝	加納太霊教院院長
参与	齋藤賢一郎	妙智會教団理事長
参与	佐々木堯章	崇教真光事務局長
参与	左藤滋光	澄禅律院住職
参与	宮坂保徳	解脱会理事
参与	山本行徳	八津御嶽神社宮司
参与	井上瑞雄	日蓮宗久遠寺総務
参与	小橋孝一	日本キリスト教協議会議長
参与	深水正勝	カトリック東京大司教区司祭
参与	齋藤郁雄	神宮司廳総務部長
参与	森　元亨	曹洞宗宗議会議員・東昌寺住職
参与	山本俊正	関西学院大学教授
参与	山崎龍明	浄土真宗本願寺派法善寺前住職
参与	森脇友紀子	カトリック東京大司教区アレルヤ会
参与	根本昌廣	立正佼成会時務部主席
参与	藤田隆乘	真言宗智山派大本山平間寺貫首
参与	菅野日彰	日蓮宗大本山池上本門寺貫首
参与	東伏見慈晃	天台宗青蓮院門跡門主
参与	藤　光賢	天台宗曼殊院門跡門主
参与	西園寺昌美	白光真宏会会長
参与	桑原恒明	氣比神宮名誉宮司
参与	三島喜徳	大山祇神社宮司
参与	池田光輝	真言宗中山寺派元老
参与	北川一有	浄土宗総本山知恩院執事長
参与	野下千年	長崎県宗教者懇話会顧問

参与	鴨下　博	御嶽教顧問
参与	納谷智彦	白光真宏会理事長
参与	漆間宣隆	世界連邦岡山県宗教者の会会長
参与	天江喜七郎	元特命全権大使
参与	下窄英知	カトリック長崎大司教区本部事務局長
参与	鶴野重雄	浄土宗総本山知恩院執事
参与	浄見　譲	宮地嶽神社宮司
参与	奥　茂宣	沼名前神社宮司
参与	梶　道嗣	北野天満宮禰宜
参与	水谷栄寛	世界連邦日本仏教徒協議会事務総長
参与	小田義海	浄土宗教誨師会副理事長
参与	三宅善信	金光教泉尾教会総長
参与	坂田安弘	神道禊教教主
参与	林　丈嗣	弓矢八幡副教主
参与	菊地恵祐	世界連邦岡山県宗教者の会専務理事
参与	宮西惟道	日枝神社名誉宮司
参与	福間武子	社会福祉法人太陽の町理事副理事長
参与	神　日出男	八幡朝見神社宮司
参与	小林一朗	久伊豆神社宮司
参与	小林敬直	白山神社宮司
参与	澤井隆男	吉田神社宮司
参与	中田幹男	伏見神寶神社宮司
参与	河合孝俊	浄土宗百万遍瑞林院住職
参与	竹内日祥	日蓮宗妙見閣寺代表役員
参与	武田喚三	竜泉寺東堂慈照園主
参与	曽宮良幸	御嶽教本部事務長
参与	三原照正	扶桑教参元
参与	三宅　修	金光教泉尾教会執行
参与	川本浩司	世界連邦岡山県宗教者の会事務局長
参与	大島幹夫	月ノ宮行院代表
参与	正垣　肇	杜の友社寺の友社代表取締役
参与	鈴木宏明	防府天満宮宮司
参与	鎌田紀彦	大宮八幡宮宮司
参与	矢田部盛男	三嶋大社宮司
参与	八田尚彦	無量寺住職

○比叡山メッセージ2017起草委員会

役職名	氏　名	所属役職名
委員	島薗　進	上智大学グリーフケア研究所所長
委員	竹村牧男	東洋大学学長
委員	吉澤健吉	京都新聞総合研究所特別理事・京都産業大学教授

○事務局

役職名	氏　名	所　属　役　職　名
事務総長	杜　多　道　雄	天台宗宗務総長
事務局顧問	杉　谷　義　純	ＷＣＲＰ日本委員会理事長
事務次長	宍　野　史　生	扶桑教管長
事務次長	中　村　憲一郎	立正佼成会常務理事
事務次長	宮　下　良　平	カトリック中央協議会事務局長

○総務部

役職名	氏　名	所　属　役　職　名
部長	阿　部　昌　宏	天台宗総務部長
次長	斎　藤　謙　次	新日本宗教団体連合会事務局長
事務局員	松　田　　一	大本総務・亀岡宣教センター長
事務局員	澤　田　晃　成	立正佼成会総務部長
事務局員	獅子王　圓　明	延暦寺総務部長
事務局員	三　善　健　雄	立正佼成会総務部渉外グループ広報渉外担当
事務局員	福　井　邦　彦	天台宗務庁総務課長・国際課長
事務局員	梅　山　恵　匡	天台宗祖師先徳鑽仰大法会事務局幹事
事務局員	礒　村　良　定	延暦寺総務部主事

○会議部

役職名	氏　名	所　属　役　職　名
部長	國　富　敬　二	ＷＣＲＰ日本委員会事務局長
次長	田　中　朋　清	世界連邦日本宗教委員会事務局長
事務局員	齊　藤　哲　圓	全日本仏教会国際部次長
事務局員	鈴　木　裕　治	妙智會教団理事
事務局員	和　田　恵久巳	ＷＣＲＰ日本委員会総務部長
事務局員	水　尾　寂　芳	延暦寺財務部長
事務局員	西　村　智　秀	天台宗務庁教学課長
事務局員	星　野　貴　宣	天台宗務庁布教課長

○式典部

役職名	氏　名	所　属　役　職　名
部長	山　田　　歌	大本本部総務課主幹
次長	小　寺　照　依	延暦寺法務部長
事務局員	小　森　文　道	延暦寺管理部長
事務局員	奥　脇　俊　臣	大本本部国際愛善宣教課主任
事務局員	東伏見　光　晋	天台宗青蓮院門跡執事長
事務局員	高　見　昌　良	天台宗務庁社会課長
事務局員	松　岡　順　海	天台宗務庁人権啓発課長
事務局員	志　井　浩　順	天台宗務庁一隅を照らす運動総本部次長
事務局員	山　形　宗　湛	延暦寺法務部主事
事務局員	武　　円　超	延暦寺管理部主事

○渉外・接遇部

役職名	氏　名	所　属　役　職　名
部長	佐　藤　益　弘	立正佼成会京都教会長
次長	中　嶋　茂　博	京都府神社庁参事
事務局員	柳　本　　昭	カトリック京都司教区司祭
事務局員	瀬　尾　芳　也	神社本庁教化広報部長
事務局員	岩　橋　克　二	神社本庁広報国際課長
事務局員	柳　田　季巳江	立正佼成会総務部次長
事務局員	齋　藤　和　子	立正佼成会総務部渉外グループ
事務局員	草　別　善　哉	天台宗務庁庶務課長
事務局員	林　　昌　伸	天台宗務庁財務課長
事務局員	譽　田　玄　樹	延暦寺参拝部職員

○財務部

役職名	氏　名	所　属　役　職　名
部長	甘　井　亮　淳	天台宗財務部長
次長	掬　池　友　絢	全日本仏教会国際部部長
事務局員	林　　昌　伸	天台宗務庁財務課長

※役職については２０１７年８月４日現在の役職を掲載

産経新聞　2017年8月4日

世界の宗教者 平和祈る集い

京都で開会

宗教の垣根を越えてテロや貧困など世界的な問題に向き合い平和を祈る「世界宗教者平和の祈りの集い」（日本宗教代表者会議主催）が3日、国立京都国際会館（京都市左京区）で始まり、キリスト教、イスラム教、仏教など各宗教団体の代表者ら19カ国の約2千人が出席した＝写真。

開会式典では、同会議事務総長で天台宗の杜多道雄宗務総長が「宗教者が対話し、協調しあうことが世界平和と共生社会の実現につながる」とあいさつ。ローマ法王からの「年に一度の宗教サミットは、対話と友情の精神を築くことに大きく貢献している」とのメッセージも紹介された。

元国連事務次長の明石康氏らによる基調講演の後、各宗教の代表者らが「テロと宗教」をテーマに討論。キリスト教の関係者は「対話なくして平和は存在しない。いかなる戦争も受け入れるべきではない」と話していた。

無断転載不可

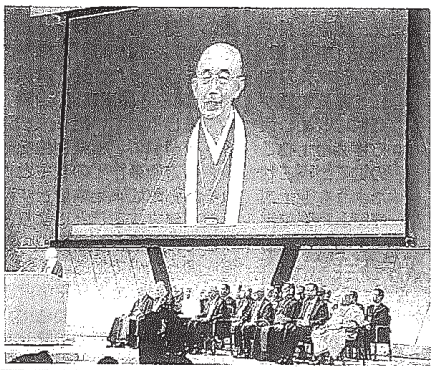
毎日新聞　2017年8月4日

世界の宗教者2000人出席

京都「平和の祈りの集い」開会

比叡山宗教サミットや神道、キリスト教、イスラム教などの宗教指導者ら約2000人が出席した。各宗教の関係者らは貧困や人権、テロなどの問題に協調を～分裂と憎悪を乗り越えて～」がテーマ。海外18カ国からの24人を含め、仏教30周年を記念する「世界宗教者平和の祈りの集い」の開会式典が3日、京都市左京区の国立京都国際会館であった。「今こそ平和のために一緒に立ち向かっていくことを呼び掛け合うことが共生社会の実現につながることを世界に発信したい」とあいさつ。世界イスラーム連盟のムハンマド・ビン・アブドルカリーム・アルイーサー事務総長は「国家間の闘争や文化・文明間の思想的な衝突、宗教的紛争への解決策がこの会合で明示されること、異なる宗教諸派、思想的指導者の間での対話の窓が開かれることを望んでいる」と語った。

集いは2日間の日程で、4日は比叡山延暦寺（大津市）で「世界平和祈りの式典」を予定している。【宮川佐知子】



開会式典であいさつする日本宗教代表者会議の杜多道雄・事務総長＝京都市左京区で

式典では、日本宗教代表者会議事務総長の杜多道雄・天台宗宗務総長が「宗教者同士が互いの誤解を乗り越えるため対話し、協調した。

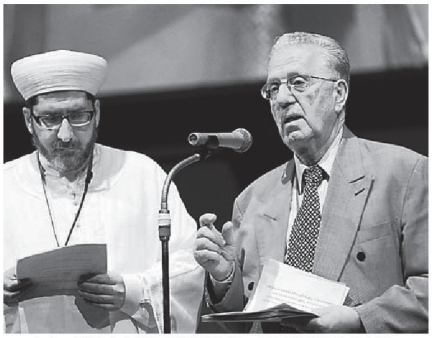
毎日新聞社提供

京都新聞　2017年8月4日

世界宗教者集い

「暴力過激主義 宗教に解毒剤」

出席者らが対話訴え



シンポジウム終了後に急きょ声明を読み上げたファーロック・アクビック氏（右）＝3日午後5時40分、京都市左京区・国立京都国際会館　撮影・山本陽平

京都市左京区の国立京都国際会館で3日開幕した「世界宗教者平和の祈りの集い」では、テロと宗教に関する発言が、会場の関心を引いた。

ウィリアム・ベンドレイ世界宗教者平和会議国際事務総長は基調講演で、暴力的な宗教的過激主義が「社会的な敵意をあおっている」と警告した。一方で、エジプトで1981年にサダト大統領を殺害したイスラム過激派グループのリーダーだったナギー博士が、逮捕後の獄中で信仰を深めた結果、「イスラム国家建設のために暴力に訴えることは、非イスラム的であり間違っている」と「転向」したことを紹介。ナギー博士の信奉者も信念を変えていったといい、「宗教の名において暴力的過激主義が実行されている場合、その宗教の中で『解毒剤』を探すのが賢明であることを示唆している」と説明した。

「テロと宗教」をテーマにしたシンポジウムでは、米国ユダヤ人協会諸宗教対話部長のデビット・ローゼン氏が「宗教の名を使った暴力過激派と闘うには、社会的疎外の問題の根源に取り組むことが重要」と指摘。ギリシャ正教会フランス府主教のエマニュエル氏は「誠実な対話は、原理主義や宗教的暴力を回避するための必須条件だ」と訴えた。

内戦が続くシリアのモスク代表ファーロック・アクビック氏がシンポジウム終了後に急きょ登壇。戦争や麻薬、貧困などの課題を解決するために「世界共通の人道的価値観に基づいた国際的組織が必要」と訴えた。（貴浦成克）

京都新聞社提供

読売新聞　2017年8月4日

世界の宗教者 平和祈る集い

各国の宗教者が一堂に会する「世界宗教者平和の祈りの集い」（日本宗教代表者会議主催）が3日、京都市内で始まった。

天台宗などが毎年開催する「比叡山宗教サミット」の30周年記念事業で、仏教や神道、キリスト教、イスラム教などを信仰する約20か国の2000人が参加。明石康・元国連事務次長による基調講演の後、同市の将軍塚青龍殿で、各宗教の代表者らのメッセージが書かれた折り鶴を球体オブジェに収め、戦争や災害の犠牲者を追悼した。

4日は宗教間対話に関する分科会が行われるほか、各国のコインを溶かして造った「平和の鐘」を突いて世界平和を祈る。

読売新聞社提供

京都新聞　2017年8月4日

宗教連帯 祈る歩み30年

比叡山サミット記念 集い

災害や紛争の犠牲者を追悼する「鎮魂の祈り」をささげる宗教者ら（3日午後8時15分、京都市山科区・将軍塚青龍殿）＝撮影・水沢圭介

比叡山宗教サミットの開催30周年を記念し、宗教、宗派を超えて宗教者が対話し、平和の実現を目指す「世界宗教者平和の祈りの集い」が3日、京都市左京区の国立京都国際会館で開幕した。海外18カ国24人の宗教者を含む計2千人が参加し、4日まで2日間、宗教の果たす役割の重要性を確認し合う。（23面に関連記事）

宗教サミットは1987年、故山田恵諦天台座主の呼び掛けで開かれた。その後10年ごとに、海外の宗教者を招いて大規模な集いを催してきた。

開会式では、国内と海外からキリスト教、イスラム教、仏教、ユダヤ教、ヒンズー教、ゾロアスター教の指導者ら計約50人がメインホールの壇上に並んだ。主催した日本宗教代表者会議事務総長の杜多道雄・天台宗宗務総長は「宗教者同士が互いの誤解を乗り越えるために対話し協調しあうことが、世界平和と成熟した共生社会の実現につながることを世界に発信したい」とあいさつ。ローマ法王と世界仏教徒連盟会長、世界イスラム連盟事務総長のメッセージが読み上げられた。

基調講演では、明石康・元国連事務次長と、ウィリアム・ベンドレイ世界宗教者平和会議国際事務総長が話した。明石氏は「多くの分裂と大きな憎悪の存在する現代社会を乗り越えるには、胸襟を開き、対話の場を広げる地道な努力しかない」と話した。

夜には山科区の将軍塚青龍殿でグレゴリオ聖歌と天台声明、イスラムの聖典コーランの詠唱があり、平安時代から続く「不滅の法灯」の分灯がともる中、宗教者約300人が「鎮魂の祈り」をささげた。

4日午前は分科会があり、午後に会場を天津市の天台宗総本山・延暦寺に移して開催される。

（賀浦成克、浅井佳穂）

京都新聞社提供

中日新聞　2017年8月4日

30周年 各派が平和祈る

京都で世界宗教者の集い

折り鶴を入れたオブジェと「不滅の法灯」を囲み、平和を祈る宗教家ら＝京都市山科区の将軍塚青龍殿で

世界の宗教指導者により「世界宗教者平和の祈りの集い」が三日、京都市で始まり、十八カ国から二千人が集まった。

ローマ法王の呼び掛けに応じ、一九八七年に大津市の比叡山延暦寺で開いた「世界宗教サミット」を記念して毎年開催している。三十周年の今回は、京都市山科区の将軍塚青龍殿で「鎮魂の祈り」と題した式典があった。各宗派の僧侶や信者が、キリスト教のグレゴリオ聖歌、仏教の天台声明、イスラム教のコーランを詠唱した。

会場には、参列者が作った折り鶴を収めた直径六十㌢の地球を模したオブジェを設置。延暦寺で千二百年前から続く「不滅の法灯」も供え、京都市内の街灯りを背景に幻想的な雰囲気の中、日本宗教代表者会議の植松誠議長が「苦しみのうちに命を落としていった弱い人たちのことを忘れず、心に刻んで祈りましょう」と述べ、全員で黙禱をささげた。

この日は、同市の国立京都国際会館でシンポジウムがあり、宗派間の対立を乗り越えて平和な世界を築く方法について討論した。四日は同会館で分科会を開いた後、延暦寺で世界平和を祈る式典がある。

（野瀬井寛）

中日新聞社提供

産経新聞　2017年8月5日

平和への祈り 宗教超え

延暦寺で集い 1300人参列

国内外の宗教関係者が集まる比叡山宗教サミット30周年を記念して、「世界宗教者平和の祈りの集い」が4日、天台宗総本山の比叡山延暦寺（大津市）で開かれた。仏教やキリスト教、イスラム教などの指導者や一般参拝者ら約1300人が参列し、宗教や教義の垣根を超えて平和への思いを新たにしていた。

この日の式典では、開会のあいさつなどに続いて、境内にある平和の鐘が打ち鳴らされ、参列者全員が静かに平和への祈りをささげた。

続いて登壇した森川宏映・天台座主は「国々は国家主義に急速に舵をきり、アジアでは軍事衝突の危機も高まっている」と憂慮し、「人類は、実現が難しくても理想を追い求めることで未来を切り開いてきた」として、相互理解の必要性を訴えた。その後、参列者は隣同士で互いに手をつなぎ、「平和への努力を誓う固い絆を」とのかけ声とともに全員で平和を誓い合っていた。

「世界宗教者平和の祈りの集い」で、諸宗教代表者と参列者が手をつなぎ、平和を願った（寺口純平撮影）

無断転載不可

読売新聞　2017年8月5日

平和 宗派超え

比叡山サミット30周年

比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」（日本宗教代表者会議主催）は4日、大津市の天台宗総本山・比叡山延暦寺で「世界平和祈りの式典」を執り行い、2日間の日程を終えた。

比叡山宗教サミットは1987年、その前年に当時のローマ法王ヨハネ・パウロ2世の呼びかけでイタリアのアッシジで開かれた「平和祈願の日」の精神を受け継ぎ、同寺で開催された。今年は3日から京都市内で講演などが開かれ、毎年集いが行われる同寺は式典会場となった。

式典では、主催者を代表してあいさつした森川宏映・天台座主が、恒久平和の追求などを掲げた日本国憲法の前文を示し、「その理想に向けて努力することが、私たちの団結と連帯をより一層強固なものとする」と訴えた。

その後、キリスト教の代表者らと共に記者会見した同会議の杉谷義純・事務局顧問は「当初は自分の宗教の優位性を相手に認めさせようとするところがあったが30年たって、対話の重要性という共通認識が根付いてきた」と意義を語った。

式典であいさつする森川・天台座主（大津市で）＝菊政哲也撮影

読売新聞社提供

毎日新聞　2017年8月5日

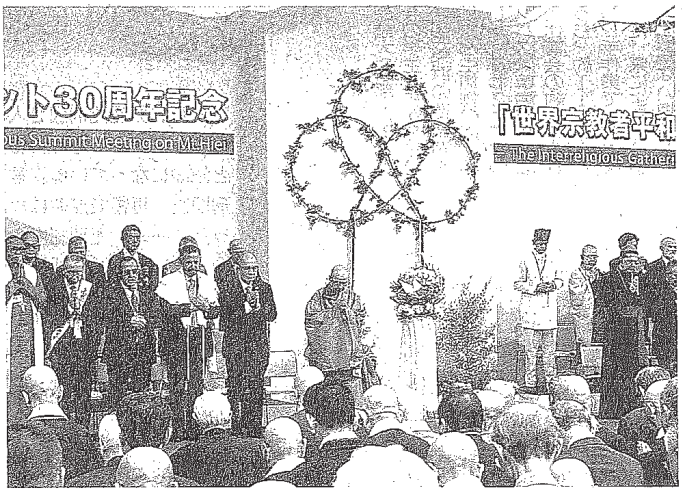
世界平和へ祈り

延暦寺で式典 宗教者ら1300人参加

比叡山宗教サミット30周年を記念して京都市で3日に開幕した「世界宗教者平和の集い」（日本宗教代表者会議主催）は4日、大津市坂本本町の比叡山延暦寺で「世界平和祈りの式典」があった。仏教やキリスト教、イスラム教ら世界の宗教関係者が「平和の鐘」の音と共に世界平和への祈りをささげた。

式典には世界18カ国の宗教者24人を含む約1300人が参加。祈りの後、主催者を代表して同会議名誉議長の森川宏映・天台座主があいさつした。「アジア極東地域は核爆弾の脅威にさらされ、急速に軍事衝突の危機が高まりつつある」などと緊迫する世界情勢に言及した上で、「世界を覆いつつある『排除と孤立』ではなく、『相互理解と連帯』こそが人類に平和と繁栄をもたらすことを世界に示したい」と訴えた。

また、同会議名誉顧問の庭野日鑛・立正佼成会会長は世界の人々に向けた「比叡山メッセージ2017」を披露。「憎悪と排除からは争いしか生まれない。忍耐強い対話と他者の存在を受け入れる努力こそ、平和への近道であることを強く訴える」と呼びかけていた。【衛藤達生】



世界各地から集った宗教者らが「平和の鐘」の音に合わせて黙とうしながら、それぞれの所作で世界平和への祈りをささげた

毎日新聞社提供

朝日新聞　2017年8月5日

世界平和祈る 宗教超え1300人

比叡山宗教サミット開催30周年を記念し、世界18カ国の宗教の代表者らが集う「世界宗教者平和の祈りの集い」（日本宗教代表者会議主催）が4日、大津市の延暦寺などであった。フィナーレの「世界平和祈りの式典」には、宗教関係者約1300人が参加した。

式典では、平和の鐘が鳴るなか、参加者が一斉に核廃絶や世界平和を願って祈りを捧げた。その後、森川宏映・天台座主が主催者を代表し「『排除と孤立』ではなく、『相互理解と連帯』こそが人類に平和と繁栄をもたらす」と訴えた。

「忍耐強い対話と他者の存在を受けいれる努力こそ平和への近道であることを強く訴える」とする比叡山メッセージ2017を拍手で採択し、締めくくった。式典後に会見した宗教の代表者は「宗教間の対話と連帯で大きな成果があった」と異口同音に話した。（岡本洋太郎）

平和の鐘に合わせて、世界平和への祈りを捧げる森川宏映・天台座主（右）ら宗教者＝大津市の延暦寺

17-6973

中日新聞　2017年8月5日

弱い人の救済へ行動を

大津、京都　世界宗教者の集い閉幕

核廃絶に向けた意見を述べるパネリストたち＝京都市左京区の国立京都国際会館で

「世界宗教者平和の祈りの集い」は四日、大津市の比叡山延暦寺での「世界平和祈りの式典」を迎えて閉幕した。式典に先立つシンポジウムの分科会では、核保有国と非核国の溝が深まる中、「理想論だけでなく、現実にいる弱い人を救わなければならない」と、宗教家に平和に向けた行動を求める声が上がった。

分科会は、京都市左京区の国立京都国際会館であった。黒住教の黒住宗道副教主が、七月に採択された核兵器禁止条約の交渉に米国、ロシアや日本など最も重要だ」と指摘した。同協議会のアンデシュ・ウェジリド欧州総幹事は「国際宗教の指導者は、世界の人々が多くの考えを共有していることを広く示そう」と呼び掛けた。

閉会後の記者会見で、今回の成果を各教団に持ち帰り、平和の祈りを人々に伝えることを確認。ボスニアイスラム共同体の前最高指導者ムスタファー・ツエリッチ氏は「銃だけでなく、言葉で戦う戦争もある。宗教家は、人々の心の中にあるものを知り、変えていく力を持っている」と力強く語った。

（野瀬井寛）

中日新聞社提供

記者会見　2017年８月４日

朝日新聞　2017年9月13日

平和へ 理想でなく行動を

「世界宗教者平和の祈りの集い」2000人参加

天台宗総本山の比叡山延暦寺で、世界の宗教指導者らが手を取り、平和を祈った＝8月4日、大津市

比叡山延暦寺（大津市）や京都で8月にあった「世界宗教者平和の祈りの集い」は、核廃絶を訴える強いメッセージを出した。唯一の被爆国である日本が核兵器禁止条約に加わっていないことへの批判の声も上がった。このメッセージが単なる願いにとどまらず、宗教者一人ひとりの行動につながることを期待する。

今回は、宗教・宗派を超えた世界の宗教指導者らが1987年に集まった「比叡山宗教サミット」から30年。約2千人が参加し、テロや貧困、教育について議論した。

明石康・元国連事務次長は基調講演で「平和を保つには互いの文化と伝統を認め合い、相手に対して尊敬と謙虚さをもつこと」と指摘。「分裂と憎悪が存在する現代、自分の世界から外に向かい胸襟を開いて語り合う、対話の場を広げよう」と呼びかけた。

比叡山の森川宏映・天台座主は、アジア極東地域が核の脅威にさらされ、軍事衝突の危機が高まっていることを危惧した。憲法前文の「平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去」という一文を挙げ、「まだ理想にとどまっている。しかし、その理想にむけて努力することが、私たちの団結と連帯をより一層強固なものとする」と語った。

採択された「比叡山メッセージ2017」は多岐にわたった。核やテロなどに加え科学技術にも触れた。動植物のゲノム改変など新たな生命科学によって「人間という種のあり方までも変えてしまう可能性」を危ぶみ、「世界の諸宗教が培ってきた叡智をもって、倫理的な吟味を踏まえた科学技術の発展」を求めた。

さらに国連の持続可能な開発目標（SDGs）を支持し、公平で質の高い教育を訴えたほか、深刻化する格差問題や広がる自国中心主義に警鐘を鳴らした。「平和を考えるとき一番重要なのは、他者の存在を受け容れ、弱者に対する配慮を欠かさないこと」「憎悪と排除からは争いしか生まれない。忍耐強い対話と他者の存在を受け容れる努力こそ、平和への近道である」

閉幕後の記者会見で、非暴力を訴えたインドのマハトマ・ガンジーの孫、エラ・ガンジーさんは「核兵器禁止条約は核廃絶に向けての一歩であり、喜ばしい。だが日本は批准していない。すべての国が取り組むべきだ」と語った。

主催した日本宗教代表者会議の事務局顧問で、天台宗機顧問の杉谷義純さんは「人間の生みだしたものは人間の力で解決する。比叡山メッセージに示した『高齢になった被爆者が存命している今こそ』という一文に、被爆国の日本が条約を批准することへの願いを込めた」と話した。

信教の自由を守るため、国家権力が宗教に介入すべきではない。だが、宗教者は平和と自由のため、もっと発言し、もっと行動してもいいのではないだろうか。（岡田匠）

核禁条約 批准しない日本へ批判も

単眼複眼

17-6973

京都新聞　2017年9月5日

比叡山宗教サミット記念「平和の祈りの集い」

宗教指導者ら 祈り30年

災害や紛争の犠牲者を追悼する「鎮魂の祈り」をささげる宗教者ら（3日午後8時15分、京都市山科区・将軍塚青龍殿）＝撮影・水沢圭介

キリスト教や仏教、イスラム教の指導者らが集まる比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が3日、4日に国立京都国際会館（京都市左京区）などで行われたシンポジウムや分科会で、宗教とテロや貧困、原子力問題について、意見を交わした。3日夜と4日午後は、参加者が将軍塚青龍殿（山科区）や延暦寺（大津市）で平和への祈りをささげた。

テロ憂慮 対話促す

■シンポジウム

「テロと宗教」をテーマにした3日のシンポジウムでは7人のパネリストが登壇し、世界で相次ぐ宗教の名を借りた暴力に憂慮を示しつつ、宗教者同士の対話が平和実現に不可欠なことを確認した。

中東やアフリカ、そしてアジアでも異教徒が対立する紛争が続く、ユダヤ教団体の諸宗教対話部長アビ・ット・ローゼン氏は「宗教の名のもとで起こされている紛争のほとんどが実際は民族的、国家主義的なもの」とし、ギリシャ正教会の主教エマニュエル氏は「宗教を持ち出すこと自体が正当化される訳ではない。宗教的な言葉を使ったヘイトスピーチは教えに対する攻撃でもある」と述べた。

イスラム教の出席者からは、2001年の米同時多発テロ以降、イスラム教とテロに密接な関係があると思われていることを、歯がゆいとする声が相次いだ。

世界イスラム連盟（サウジアラビア）の顧問アブドゥル・アジーズ・トゥヨキ氏は、異教徒との戦いを訴えるジハード（聖戦）という言葉について「聞くほど、お前を敵とは思っていないようだ」と戦うことが本来のジハードに反すると説明。「悪い意味で使われている」と指摘した。

エゴビナ紛争を生き抜いた、ボスニアのイスラム教代表部の事務総長ファイサル・ファーマン・ヤエッチ氏は「神がアブラハムの前に王（仏）を遣わしたのは、互いが知り合うためだ」と、対話と教育しかないと訴えた。

最後に、イスラム教系対話組織の事務総長ファイサル・ビン・アブドゥラハマン・ムジャイル氏が「宗教指導者による宗教対話の宣言」を読み上げ、「宗教は平和と調和のメッセージを伝えるもの」と信者に教えるべきだとし、テロをなくしていくためには対話と教育しかないと、航海した。

▼折り鶴を作りながら交流を深める各国の宗教者ら（将軍塚青龍殿）

◀テロと宗教をテーマに世界の宗教者が語り合ったシンポジウム（3日午後、京都市左京区・国立京都国際会館）＝撮影・山本佑介

◀開会前に献花するローマ法王庁「宗教対話評議会」次官のミルヘム・オク望月康惠（66）＝世界イスラム連盟サウジアラビア事務所長＝（国立京都国際会館）

貧困解決へ 教育普及を

■分科会

貧困の追放と教育の普及をテーマにした分科会では、「天然資源がある国でもその富が一部の層に偏在している現状がある。多くの人の社会参加を可能にし適切な配分をするには、識字率の向上など教育が必要」と述べた。

カトリックの大司教ジョン・オナイエケン氏は貧困の基調発題で「教育の欠如が貧困を生み、貧困のために教育の普及が必要との認識を共有した。

カトリックの大司教ジョン・オナイエケン氏は貧困の基調発題で「教育の欠如が貧困を生み、貧困のために教育の普及が必要との認識を共有した。

貧困と教育の複雑に絡み合った課題の解決策について各地の取り組みも紹介された。キリスト教多の諸宗派による教育が受けられないといった悪循環がある。わだかまりはこれを乗り越えなければならない」と訴えた。

発展途上国の貧困の原因の一つとされる、イスラム教の子ども地域における教育の状況について、カンボジアム教徒の子どもに勉強を教える経験を語った。インド独立の父マハトマ・ガンジーの孫で、ガンジー財団創設者のエラ・ガンジー氏は「ガンジーはふりかえるサンスクリット語の一節を引用し、「天然資源があるこの国でもその富が一部の層に偏在している現状がある。多くの人の社会参加を可能にし適切な配分をするには、識字率の向上など教育が必要」と述べた。

・ガンジーの孫で、ガンジー財団創設者のエラ・ガンジー氏は「ガンジーはふりかえるサンスクリット語の一節を引用し、経済に教育を結びつけることを考えた。国会や農業など目の産業に連携することで、分校は（経済的に）自立でき、文学も音楽などの教育はレクリエーションになり労働を楽しいものにすることができる」と先駆者の教訓を挙げた。

コーディネーターを務めた立教大教授の西原廉太氏は「教育と貧困の不安な連鎖は豊かな国にもある。貧困を乗り越えるためにすべての宗教者が手を携えていかねばならない」と呼び掛けた。

思いを折り鶴に

3日のシンポジウム終了後、夕方からは山科区にある青蓮院の飛び地境内、将軍塚青龍殿に会場を移し「交流の集い」が開かれた。

宗教者たちは、比叡山高校茶道部の生徒によるお茶の接待を受けた後、25ぢ正方の青い折り紙に、それぞれの言語で平和への思いを記し、生徒に教わりながら折り鶴を作った。

折り鶴は透明な球体に詰められ「祈りのオーブ」として、延暦寺（大津市）の「不滅の法灯」とともに同日夜の「鎮魂の祈り」の会場に安置された。鎮魂の祈りに参加した宗教音楽の詠唱者たちは、オーブと法灯の前で声明や聖歌を披露し、戦争や災害の犠牲者を追悼した。

核兵器禁止条約に不満も

■分科会

核廃絶と原子力問題を考える分科会では、仏教とキリスト教の宗教指導者6人が発言した。7月7日、国連が核兵器禁止条約を採択したことについて発言した。核兵器が依然として存在する現状を「すべてに終わりをもたらす」と批判した。

核兵器禁止条約に不満も

方で、日本が採択に加わらなかったことを評価する意見も上がった。

世界教会協議会欧州総幹事のアンティジェ・ウェジ氏は、冷戦期の核抑止について「脅しと核、核兵器が依然としてロリストが保有すれば抑止力が機能しなくなるとし、「すべに核兵器の削減に即かなくては新たな核拡散に関わる。国大限の努力で心を開き、国家間の関係を築くことでしか未来を築くことはできない」とした。

明らかにした日本カトリック司教協議会長で長崎大司教区大司教の高見三明氏は、条約の前文に被爆者の苦難が書かれていることを「大きな励みになる」と評価。「条約の採択に加わらなかった大国や日本に対して「残念きわまりない。むしろ日本が先頭に立って条約を批准すべきだと強く主張した。

韓国仏教宗団協議会上席顧問会長の崔光氏は、北朝鮮が核保有国と主張したとして世界が神威に陥しているこの議論を示したほか、仏教的な観点から核兵器と原子力エネルギーの問題を考える必要性を訴えた。

京都新聞社提供

毎日新聞　2017年9月12日

信仰の垣根越えて　京都・大津で19カ国2000人が対話

混迷の今こそ共に祈らん

比叡山宗教サミット30周年の集い

世界各国の宗教者が一堂に会する「世界宗教者平和の祈りの集い」が8月3、4日、京都市や大津市で開かれた。テロや紛争が各地で広がる中、宗教者は何ができるのか。国内外19カ国約2000人の参加者が宗教の垣根を越えて祈り、語り合った2日間の模様を報告する。【花澤茂人】

「なかなか難しいですね」。独特な装束を着た宗教者たちが円卓に座り、それぞれ1枚の紙と格闘している。折り鶴を作ろうとしているのだ。うまくできず、先に完成させた隣の宗教者に尋ねる姿もある。集められた折り鶴は透明な球体のオブジェに入れられ、京都市内を一望する舞台の中央に置かれた。

3日夜、青蓮院（京都市東山区）の飛び地境内「将軍塚青龍殿」（山科区）で開かれた「交流の会」の一幕。宗教者が互いの知恵を借り合いながら、一つの結晶を作り上げる、行事の象徴的な光景だった。

今回の「集い」は、「比叡山宗教サミット」（※）の30周年記念行事。海外から仏教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、ヒンズー教、ゾロアスター教の宗教者らが参加した。3日に国立京都国際会館（京都市左京区）であった開会式典では、フランシスコ・ローマ法王から寄せられた「皆様と共に、戦争に引き裂かれた世界の多くの地域で協調と調和が新たに開花するよう祈りをささげたい」とのメッセージも読み上げられた。

過激派組織「イスラム国」（IS）によるテロ行為など、宗教の名による暴力が世界的な課題だ。基調講演やシンポジウムでは、宗教者としていかに立ち向かうかがテーマとなった。

世界宗教者平和会議のウィリアム・ベンドレイ国際事務総長は、暴力的過激主義への「最も効き目の強い薬」としてある人物を紹介した。かつてイスラム過激派のリーダーとしてエジプトのサダト元大統領暗殺事件に関わったナギー・ブラヒム氏。長い獄中生活の中で信仰を

折った折り鶴を掲げる世界各国の宗教者たち＝京都市山科区で8月3日、大西誠撮影　❷折り鶴が入れられた球体のオブジェを囲んで開かれた式典で、手をつないでさらなる連帯を誓った＝大津市で8月4日、花澤茂人撮影

暴力的過激主義は教えの悪用／「忘己利他」平和への連帯を

突き詰めた結果、暴力という手段に訴えるのは間違いだという認識に達し、その後いくつかの過激派組織の方針を変えさせた。ベンドレイさんは「どの宗教も例外なく過激主義に冒されやすいが、それぞれの教えに『解毒剤』があることを示している」と話した。

「宗教の名による暴力は、宗教を悪用しているだけ」と主張されることが多いが、米国ユダヤ人協会のデビッド・ローゼン諸宗教対話部長は「そう簡単に悪用されるかという問題をはぐらかしている」と指摘。「宗教は人間のアイデンティティーの要素すべてと密接に関係し、価値観や目的を与えてくれる。しかし自分の存在が脅かされそうな時には悪用され、反対者らを『非合法化』することで紛争を激化させることがある」と分析した。こうして生まれる暴力的過激主義は、自尊心と社会からの疎外感を抱く若者を引きつける。ローゼンさんは「全ての宗教の中心には『敬待する』という価値観がある。他者のアイデンティティーに敬意の念を持ち歩調の手を差し伸べることが重要だ」と力を込めた。

核問題を扱った4日の分科会では、7月に国連で採択された核兵器禁止条約が話題になった。「核なき世界」という「理想」を見据えた条約に対し、核保有国が「国際安全保障の現実を無視している」と批判している状況を踏まえ、世界宗教者平和会議の杉野耕一・国際副事務総長は「宗教者は規範を確立しつつ、現実に即して人々を救う役割がある。核の問題でも、理想と現実を融合し橋渡しをする象徴的な意味を持つことができるのではないか」と提案した。

「人類は、実現が難しくても決して捨てはいけない理想を追い求めることで未来を切り開いてきた。たとえば自由、人権、平等だ」。行事全体の締めくくりとして比叡山延暦寺で4日に開かれた式典で、主催者を代表して森川宏映・天台座主はそう声を上げた。「世界平和を求めるサミットの歴史も、人類の未来に向けての歩みでありたい」。集った宗教者らは手をつなぎ、連帯を強めていくことを誓った。

30年間、会合を積み上げてきた成果はあったのだろうか。

「対話をするということがどの宗教にもしっかり根付いてきた」。天台宗の僧侶で、長年宗教間対話の活動に取り組んできた日本宗教代表者会議事務局顧問の杉谷義純さんは、終了後の記者会見でそう話した。当たり前のようだが、かつては参加者の中でも自分の宗教の優位性を主張する傾向が強かった。「宗高な教理はもちろん大事だが、対話をしないと何も始まらないという理解が広がった」。それには年月が必要だった。

宗教サミットに対して「祈ったり話し合ったりするだけで実践がない」という批判もある。杉谷さんは「ともに祈り、互いの信頼を高めることに意味がある。それぞれの所属する場で具体的な実践が始まり、信頼に基づいて連帯が生まれていくことを願う」と力を込めた。

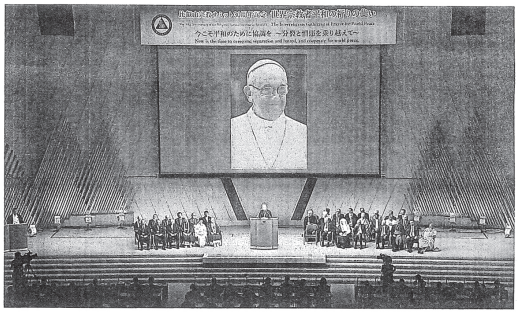
「参加者一同」の名で出された「比叡山メッセージ2017」では「連帯の絆をいっそう強め、『忘己利他』の精神で平和のために献身することを誓う」とうたった。「集い」が終わったこれからが本当の始まりだ。

※）比叡山宗教サミット　1986年、ローマ法王ヨハネ・パウロ2世（当時）が世界の宗教者に呼びかけ、イタリアのアッシジで「平和祈願の日」を開催。その精神を引き継いだ山田恵諦天台座主（当時）が提唱者となり、翌87年、比叡山延暦寺（大津市）に世界の宗教者を招き開催した。以降、毎年開かれている。今回はさまざまな宗教団体で構成する「日本宗教代表者会議」が主催。

毎日新聞社提供

中外日報　2017年8月4日

世界平和へ祈りの輪



開会式で、ローマ教皇フランシスコのメッセージを読み上げるジョン・トン・ホン枢機卿

比叡山宗教サミット30周年

負の連鎖打破呼びかけ

宗教者2千人集い開会

比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が3日、京都市左京区の国立京都国際会館で始まった。キリスト教やイスラーム、仏教、ユダヤ教など20カ国の来賓25人を含む約2千人が集い、「今こそ平和のために協調を～分裂と憎悪を乗り越えて～」をテーマに話し合った。夕方から同市山科区の青龍殿（天台宗青蓮院護摩堂）の大舞台で「鎮魂の祈り」を捧げた。

3日の開会式で日本宗教代表者会議の杜多道雄事務総長が「地球は危機に瀕していると言っても過言ではない。負の連鎖を打破し、世界平和実現のためには、お互いに対話し、相互理解を深め、価値観の多様性を認め、共生の思想を共有することが必要」と呼び掛けた。

また、ローマ教皇フランシスコ名代のジョン・トン・ホン枢機卿が「年に1度のこの宗教サミットは、対話と友情の精神を築くことに大きく貢献し、人類という家族が平和に向かう新たな道を開くために、世界の諸宗教の信者の協力を可能にしています」と教皇のメッセージを読み上げ、同会議名誉議長の森川宏映・天台座主に手渡した。

続いて元国連事務次長の明石康氏が「分裂と憎悪をどうしたら乗り越えられるか」、世界宗教者平和会議国際事務総長のウィリアム・ベンドレイ氏が「暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか」と題して基調講演。

この後、「テロと宗教～暴力的過激主義に宗教者はどう立ち向かうか」をテーマにシンポジウムが開かれ、日本宗教代表者会議の杉谷義純・事務局顧問がコーディネーターを務め、海外の宗教者7人が提言を行った。

4日は「核廃絶と原子力問題を考える」「貧困の追放と教育の普及」の分科会討議の後、大津市の天台宗総本山比叡山延暦寺で1987年の宗教サミットと同じ午後3時半に世界平和の祈りを捧げ、「比叡山メッセージ」を発信する。（河合清治、三宅翔士、丹治隆宏）

きょうの紙面から
▶ 高野山大アーカイブ事業　所蔵資料をHPで公開開始　＝2面
▶「檀家が減少」寺院56%　浄土宗佐賀教区アンケート調査　＝3面
▶ 祇園祭のクラウドファンディング　目標の4倍超す　＝5面
▶ 中外図書室　＝6～7面

広く　深く　つなぐ　創刊120年　hugai
中外日報購読のお申し込みは、フリーダイヤル0120―015―177へ

文化時報　2017年8月19日

比叡山宗教サミット30周年

二つの山上から祈りを重ねて

将軍塚青龍殿「鎮魂の祈り」

3日夜、比叡山宗教サミットで初の試みとなる「鎮魂の祈り」が青蓮院門跡将軍塚青龍殿で行われ、日本の宗教指導者ならびに海外招聘者を中心に約300人が参加した。

これまでの記念大会ではレセプションを2日間行っていたが、最終日のみに限定。シリアで600万人が住む家を無くし、150万人が命を落としている現状や、日本では原爆によって数十万人が犠牲となった過去を踏まえ、紛争解決に向けた祈りと平和への思いをより深める機会とした。

京都市街の夜景を見渡せる青龍殿での交流会に続く大舞台でのセレモニーでは、カトリック京都司教区河原町教会聖歌隊のグレゴリオ聖歌、京都魚山声明研究会の天台声明、日本ムスリム協会の佐藤舞更くんによるクルアーン朗誦が響く中、ろうそくを献灯した参加者が輪を作り、大空に向けて黙祷を捧げた。

小堀光實延暦寺執行は「宗教の教義に違いはあっても、宗教者の祈りは恐怖と苦しみを分かち合える行為となる。心を一つに〝安らかなれ〟と、過去の尊いのちに思いを寄せていただけるひとときとなった」と話していた。

比叡山上「世界平和の祈り」

4日午後からは、比叡山延暦寺において「世界平和祈りの式典」が営まれ、海外招待者ら約1300人が一隅会館前広場を埋め尽くした。

保積秀胤新日本宗教団体連合会理事長、深田充啓同名誉会長の挨拶に続き、国内外の宗教代表者が登壇し、世界の平和を願う祈りの心を、次代を担う子どもたちへ託した。

代表者会議名誉議長の森川宏映天台座主は現在の国際情勢について、「世界は抑止力が失われ、地域の力関係が全面に押し出され、国々は自国の利益のみを最優先する国家主義的な方向へ急激にかじを切ろうとしているように思える。アジア極東地域は核爆弾の脅威にさらされ、その危機を取り除かんとするための軍事衝突の危機が高まりつつある」とし、「今回の平和の祈りでは、世界を覆いつつある『排除と孤立』ではなく、『相互理解と連帯』こそが平和と繁栄をもたらすものであることを世界に示した市民への語りかけに期待し、森川座主の掛け声に合わせ、その場に居合わせた人々が一体となり、人類の明るい未来につなぐ「平和の交歓」では、を祈念した。

仏教タイムス　2017年8月10日

THE BUKKYO TIMES WEEKLY　週刊仏教タイムス　2017年(平成29年)8月10日　第2726号　(6)

「動」と「静」の宗教間対話

共生、共存の文化 構築し共有へ

8月3・4日

「今こそ平和のために協調を―分裂と憎悪を乗り越えて」をテーマに開かれた比叡山宗教サミット30周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」。8月3・4両日にわたり、基調講演やシンポジウム、翌朝の祈り、分科会、比叡山上での平和の祈りなど行事が相次いだ。同テーマのもと議論を重ね、祈りでは静寂の時間を共有した「動」と「静」の宗教間対話から生まれた「比叡山メッセージ2017」は今後、各国政府や世界の諸宗教組織などに送られる。

主催者を代表して挨拶する日本宗教代表者会議の杜多事務総長。共生思想の共有化を訴えた（3日）

基調講演

基調講演者は国連事務次長の明石康氏とNGO R.P.（R.T.P）国際事務総長のウィリアム・ペンドレイ氏。

明石氏のテーマは「分裂と憎悪をどうしたら乗り越えられるか」。カンボジアの和平特別代表時代の経験をはじめ、9・11同時多発テロ以降の国際社会を振り返りながら、根本的に大事なことは、世界中の国々がそれぞれの文化と伝統をきちんと認め合い、相手に対して尊敬と謙虚さをもつことだ」と説いた。同時に「難民などに国籍が違っても人間としての基本的な権利というものがあり、人命の価値と尊さに関しては差別の感覚をもってはならない」と提起した。

明石康氏

明石氏
国籍違っても人間の権利平等
宗教に過激主義治す薬局あり
ペンドレイ氏

ペンドレイ氏

また北東アジアの平和のためには政治家や教育者、宗教者のみならず「より多くの若い人たちの積極的な参加をしていると感じている」と若い世代の交流を促した。

ペンドレイ氏は、暴力的過激主義と宗教者はつながりやすいとし、「宗教者はつながりやすいとし、「宗教者はすべてを『敵』『悪』『力の対決』ではなく『共感』『理解』『和解』『平和』『寛容』『協力』『共生』の言葉で語るべきだ」と訴えた。

開会式典

3日の開会式典は第200代天台座主の山田恵諦大僧正（当時）の「スマイル地球運動」の提唱で始まった。

1・イスラムと3博宗教、暴力と無差別テロの関係性を否定

3日の開会式典では、天台宗宗務総長の杉木孝厚氏が「スマイル地球運動」の提唱で始まった。

1・イスラムと3博宗教、暴力と無差別テロの関係性を否定

3日の開会式典では、天台宗宗務総長の杉木孝厚氏が「スマイル地球運動」の提唱で始まった。

主催者を代表して挨拶する日本宗教代表者会議の杜多事務総長。共生思想の共有化を訴えた（3日）

開会式典

3日の第2部国際会館メインホールには2000人が集まった。

メインホールには2000人が集

あとがき

日本宗教代表者会議常任副委員長
黒住教教主　**黒住宗道**

「憎悪と排除からは争いしか生まれない。忍耐強い対話と他者の存在を受け容れる努力こそ、平和への近道であることを強く訴える。そして我々の切なる願いが神仏に聞き届けられるように祈り、行動していくことをここに宣言する」

排他的傾向が広がり、対立と分裂への動きが深刻化する世界を憂慮する国内外十八ヵ国二千余名の参加者たちは、比叡山上で「相互理解と連帯」を心新たに誓い合いました。

主催団体として「日本宗教代表者会議」が初めて結成され、「比叡山宗教サミット」が開かれて三十年。企画推進のための会議自体が、「侃侃諤々（かんかんがくがく）の前向きな議論というよりも、喧々囂々（けんけんごうごう）の自己主張の場になることが少なくなかった…」という、日本国内においてさえ異なる宗教の指導者が集って一つ事を為すことの難しかった時を経て、「諸宗教の対話と協力・協働は、自然であり当然であり必然」と言える時代を迎えていることは、何はさておき三十年の成果です。まずは先人・先輩方のご苦労に対して、心からの敬意と謝意を表したいと思います。

その上で、今、世界の平和のために心一つに祈り、行動できる国内外の〝同志〟とともに為すべきことは、他者を認めない人々への不断・不屈の働きかけと、「宗教は協力できる」という我々にとっての当たり前を、その事実を知らない多くの一般市民・国民の方々に発信し続けることです。

他宗教を認めない人々に他宗教の者が語りかけることも大切ですが、同じ宗教を信じる〝同志〟諸氏の命がけの説得に対して、常に心からのエールを送って可能な限りのサポートのできる私たちでありたいと思います。そして、孤立・対立よりも連携・連帯が世界の主流になるよう、それぞれの地元から宗教協力の実践を広く社会に対して伝え示す〝同志〟であっていただきたく存じます。

申し上げるまでもなく、次なる四十周年は半世紀に向けた重要な節目であり、それは百周年という〝世紀〟のサミットへの始動の時です。冒頭に掲げた今大会の宣言文を自らの決意として、ともに祈り行動してまいりましょう。

最後に、今「世界宗教者平和の祈りの集い」が成功裏に事終えられたのは、十年に一度結成される「日本宗教代表者会議」の委員各位のご尽力あればこそですが、煩雑な実務を預かって下さった天台宗の方々、とりわけ事務局の皆様に衷心より御礼を申し上げます。

比叡山宗教サミット30周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

発行日　平成三十年三月三十一日
発行所／発行人　滋賀県大津市坂本四―六―一一
　天台宗務庁内
　日本宗教代表者会議
　電話　〇七七―五七九―〇〇一三
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

日本宗教代表者会議